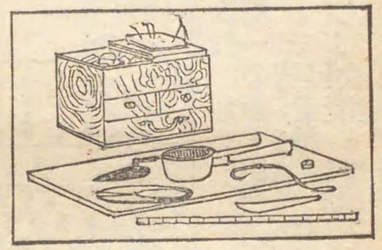
姫様に、お妃になる様にと云う事でしたが、如何にお母様の御遺言でも、現在のお父様の所え、何うしてお妃に成つて行かれましょう。

大そう困つて居らつしやると、常からお姫様の御贔負をして居る巫女が、よい智恵を教えました。それわ王様に、何でもむづかしい事をねだつて、それが若し出來たらば、王様の仰有れるやうに動かすのです。



裁縫の用具　裁縫をなすに必要なものは、先づ縫針と絎針と待針との三種の針ですが、尙ほ此他に左の品々が入用です。

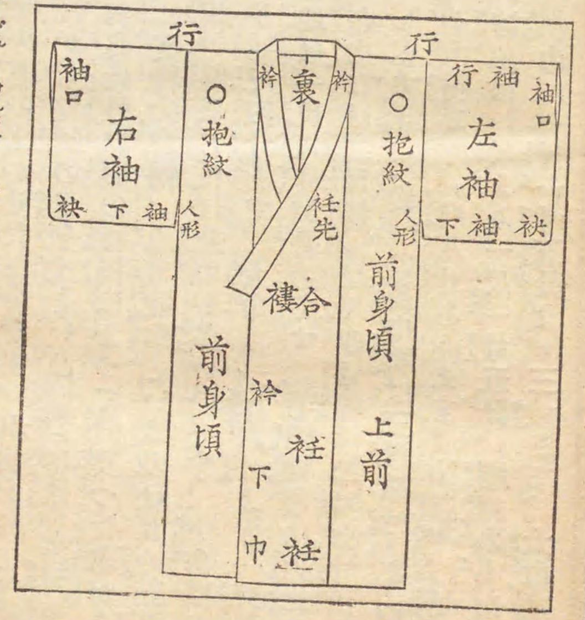
針箱　鋏　尺度　篦　指貫　チョーク　絎臺　火熨斗　鏝　そくい板　そくい篦　糸　糸卷

衣服各部の名稱　先づ後前となるべき部分を身頃と襟、袖、袖口などの名あり、脊縫より袖附までを肩幅と云ひ、袖付より袖口までを袖幅と云ひます、次に袖の尖を袂と云ひ、袂の口を振口と申し、脇あけ振口の處を八ツ口と呼び、衽の尖の細い

る事も、素直にお聞きなさいと云う事でした。

それで一番初めにわ、時候に依て色が變と云う、空色の衣物をおねだりになると、王様わ直ぐにお聞きになつて、その空色の衣服を下ださいました。

次にわ銀よりも光の好い、月色の衣服をお望みになりますと、これも直きに拵えて下ださいました。



この圖は衣服を前から見た處で、一々名前をつけて置きましたから、能く御覽ください。

部分を劍先、襟尖の處を相褄、衽先と袖付との間を抱

それから三度目にわ、金よりも光の好い、日色の衣服をお望みなさいましたが、今度もまたその通りの、立派な衣服を仕立てゝ下さいましたから、お姫様もお弱りになりましたが、遂にわ、王様の一番大切にして居らつしやる、驢馬の皮を剝いで下ださいとおつしやいました。

所がこの無理なお願も、王様わお聞届けで、あの大切な金を吐く驢馬を、惜氣もなく殺してしまつて、その皮をお姫様に下ださいましたから、今わお姫様も、いよ〳〵お父様のお妃に成らなければ成らないかと、大そう困つて居らつしやいました。

すると又巫女わ、杖を一本出して來て、

『これを貴女にあげますから、貴女わいつそ姿を變えて、このお國からお逃げなさい。それか

といひます、次に襟先より稜に達する迄を襟下と申し、裾の裏のふかせた部分を衽、其尖を稜と呼びます、それから着物の縫を丈といひ、肩の横幅を行と名付ます、尙ほ此外衣服の種類によつて、異つた名があります。

反物の丈幅　通常並巾といふのは九寸五分で、木綿、絹、麻などには此巾が多いのです、中巾は一尺二寸より一尺四寸まで、大巾は一尺六寸より一尺八寸、女帶地は一尺八寸が普通です、毛織物類は大抵二尺幅で、金巾には二尺幅、二尺四寸幅、二尺七寸幅など色々あります、又た羅紗の廣巾物は三尺四寸より四尺に達し、小巾物でも一尺八寸あります、仙臺平、博多帶などの袴地は一尺より一尺一寸五分、縮緬の小巾は九寸で、中巾は一尺一寸五分より三寸まで、大巾は一尺六寸より八寸まで、女物の丸帶は一尺八寸、片側帶は九寸内外、男帶地は五寸より六寸五分までがきまりです。それから反物一反の丈は小巾物にて二丈八尺を普通とし、三丈ある物は尺長と云ひます、又た中巾物の一反は二丈四五尺、大巾物の一反は一丈四尺より八尺あり、二反續いたのを總て一匹と申します、又女帶地は一丈五尺より一丈一尺まで、八丈縞は二丈、袴地は二丈三尺より五六尺までとしてあります、それから西洋の織物類は、尺とはいはずにヤールで計ります、一ヤールは我二尺四寸に當りますが、男子の洋服は、大抵廣巾で三ヤール乃至四ヤールの丈を有し、女物は十ヤール以上あります。

縫方のいろ〳〵　縫ひ方には種々の區別があります

ら今までお召しになつた、日色や月色や空色の衣服が、若しや着度くお成りでしたら、この杖で地を三度お叩きなさい。そうすると直ぐ出て來ますから。』と、親切に敎えてくれましたから、お姫樣わ喜んで、そつとお國をお逃げになりましたが、元より人に知れてわ大變ですから、頭から驢馬の皮をかぶり、顏にわ眞黑な物を塗つて、まるで何所の乞食かと思う樣な、汚い風俗をして居らつしつたのです。

それである國え來て、百姓の家に奉公して、其所の豚や羊を飼う役をつとめて居らつしやいましたが、ある日不圖池の側え來て、水鏡に御自分の姿を御覽になると、如何にも汚い風俗なので、我ながら情無くなり、丁度誰も見て居ない樣だから、

▲守縫は七五三、五五二、二四六の針目に縫ふので、其法は糸の端を駒結びにし、長い針目を八分にし、短い針目を一分に致します、此縫方は小兒の背印や袱紗の廻り、躾などに用ひます。▲串縫は背縫、脇縫などすべて眞直に縫ふ時に用ひます、其法は縫代を二分五厘に針目を一分五厘にし、糸の端を駒結びにして、一針返して縫ひ始め、布の端に達した時、一寸許り返すのです▲たこ縫は袋縫とも申し、單衣や襦袢の袖下などに用ひる縫方です、其仕方は表を一分の縫代に致して、縫ひ終つたらそれを裏返して再び三分の縫代に縫ふのです、又た▲衝合縫と云ふのは布と布とを接ぎ合せる時に繼ぎ目の高く成らぬやうにする爲めの縫方で、帶や紐の心などの布に不足を生じた時に用ひます、▲壓縫は布をはぎて其縫代を倒し、再び其端を縫付て高くならぬやうに、又た丈夫であるやうにする縫方で、袷、綿入の裏などを繼き合せる時に用ひます▲まくり壓縫は前の壓縫にする布が裁ち切りである場合、其裁ち口のほつれないやうにする爲の縫方です。

紮け方

耳紮、三折紮、眞紮の三種の紮け方があります、▲耳紮は布の織耳を紮ける場合の名前で、單衣の袖口、八ツ口などには此紮け方を用ひます、其仕方は先づ縫代を布幅に應して定め、布の織耳を向ふへ折り、其端に長い針を通し、紮臺の糸を其針にかけ、布を張り延しながら裏に小さく二針出し、三分五厘すくつて表に一針極く細くして縫ふのです▲三折紮は單衣の裾伏などに用ひる紮け方で、布の端を二分五厘に三

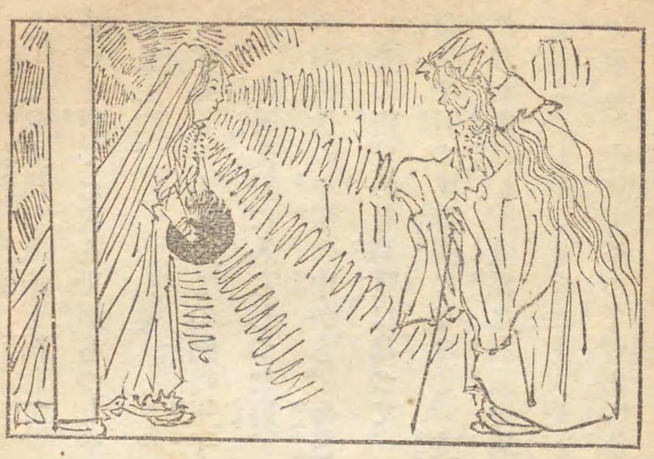
そつと元の姿に成つて見ようと、例の杖で地を叩いて見ましたら、忽ち立派な簞笥が出ました。

それを明けて御覽に成ると、中から目も眩む斗りの、日色の衣服や月色の衣服が、ちやんと出て來ましたから、急いでそれを御着になつて、獨り樂んで居らつしやいましたが、それから後わ、時々御自分の部屋の中で

重に折り、其折つた處の中をすくつて、表に針目の出ないやうに絎けるのです▲眞絎は綿入、帶などを仕立る時必要な絎け方で、其法は折つた布と布を合せ、其布を双方にすくつて少しも針目を見せぬ絎け方です。

返し方　に返し針と半返し針の二種あります、返し針は女帶や足袋の一部分を縫ふ時に用ゐるので、一針縫ふて再び前の針目に戻して縫ひ、又た一針縫ふて又た返すのを云ひます、半返し針は全く前の針目まで返さないで、針目と針目の中間、即ち半分返して縫ふのであります。

糸の結び方　にも三通りあります、(一)留結びは縫始める時に用ふる仕方で、糸の端を針にからげて、引抜いて了ふのです、(二)駒結びは縫留めを丈夫にする



爲めの結び方で、糸の兩端を取つて結びます、(三)機結びは糸を繋ぎ合せる時用ゐるので、糸の兩端を取り、右を下にし、左を上にして、左の食指の上に置き、右手で輪を拵らへ、その上にかけて引締めるのです。

積り物の注意　布帛の積りやうは、先づ其布帛の幅と丈をさし、伸縮を檢し、織庇や汚點の有無を調べて後、よい方を袖に、よくない方を襟、衽に取るやうに積るのです、單衣、羽織、袷、小供物、大人物等によつて、それ〴〵積り方が異ひますから、其宜しきに從つて無駄にせぬやうに注意すべきです、大幅物や中幅物又た片面物など普通に異るものは殊に注意を要しますが、かくて幅の伸縮は火熨斗を當てゝ直ほし、耳の釣つたのは淺く鋏を入れて布目を平らにし、然る上にて

も、この立派な衣服を出して、そつと着でわ喜んで居らつしやいました。

すると、ある日この國の王子が、此邊え狩に入らしつた時、不圖田舍の小屋の中から、金色の光の指すのを御覽になつて、急いで行つて御調になると、立派なお姫様が、立派な衣服を着て居らつしやいますから、やがて百姓え使をやつて、あの小屋の中に居る者を、御殿えさし出す様にと仰有いました。

それから二三日たつて、御殿え來た者を見ますと、驢馬の皮を被つた、眞黑な汚い女ですから、王子も不審にお思いでしたが、今更歸えすわけにも行きませんので、其儘臺所に置いて、料理番をさせてお置きなさいました。

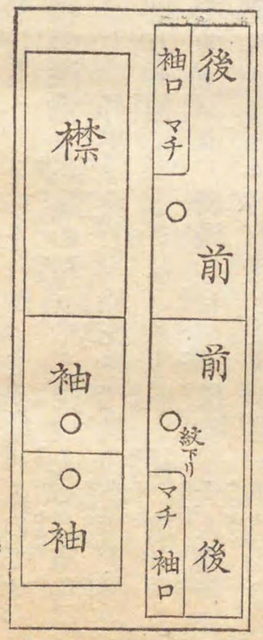
すると、ある日王子わ、御飯を叮嚀にくらべ、寸尺を正しく度つて後、鋏を入れるのです、すべて裁ち方は大切なもので、一度誤つて裁ち切つたが最期、再び改めることが出來ないものゆゑ、十分の注意を致すべきで、忽せに思ふてはなりません、裁ち方の寸法は人々の脊丈により、又た時々の流行によつて多少の相違がありますが、先づ普通男物の縫上げ寸法は左の通りであります。

身丈　三尺六寸　袖丈　一尺四寸
衿肩アキ　二寸五分　衽下り　五寸五分

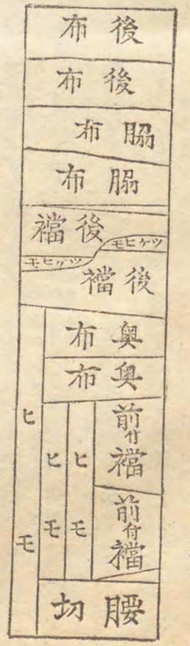
丈、袖、衽等を總尺に割當てゝ各部をよく計算して、愈々間違ひのないと決つた所で、裁ちにかゝるのです。

裁ち方の心得　一たび裁つに七たび考へよと、昔の人の云つた通り、布帛を裁つに當りては善く意を用ひて疎忽に手を下してはなりません、裁ちにかゝる前、先づ手を洗ひ裁物板を拭き、裁物の道具一切を檢して、少しも汚れの無いやうにし、よく心を落着けて、丈幅

（衣服の裁ち方）



（袴の裁ち方）



の時に燒肴をあがると、中から何か出て、咽喉に支えましたので、急いで吐き出して御覽になると、それわ見事な金の指環でした。

王子わ不思議にお思いでしたが、何か獨り考えて、やがて國中の若い女に、皆御殿え出る樣にと、お布令をお出しなさいました。

それを見た國中の若い女わ、我も〳〵と爭つて、御殿え出てまいりますと、王子わ側の指輪を出して、その女共の指に、一〳〵合はせて御覽になりましたが、誰にもうまく合いません。

そこで今度わ、お臺所に居る料理番の、汚い女をお召しになり、その指を出させて、指輪をはめて御覽になりましたら、まるで打つてはめた樣に、ちやんと合つてしまいました。

裁縫

衿下　一尺七寸五分

襦袢の縫方　襦袢を縫ふには最切先づ兩袖の下を表の方より空縫して後裏を返し、丈をはかり、標をつけ、待針を打ち、縫ひ終つて折をつけ、表へ返すのです、次に背縫の縫代に筋をつけ、待針を刺して上から下へと縫ひ下し、折目は吾が手前の方へ付けます、それが出來たら今度は兩脇を縫ひ、次に裾は凡そ二分位三ツ折に致し、縫端は下前よりします、次に衿は背縫の處に待針を刺し、尙ほ左右の衿肩、衿先及び中程にも刺し、そこで背縫より上前へ、次に背縫より下前へと縫ひ下すのです。それから衿は下前より紵け始め、次に脇を縫ひ、一番終に襟をかけるのです。

單衣の縫方　單衣も最初袖を縫ふに、矢張り襦袢に於ける如くし、袖口となるべき處に標をつけ、袖口を紵け、袖幅をはかつて標をつけます、次に衽は先づ褄下から紵け、それより肩當、臀當の端縫を致します、次に衿肩を吾が右とし、衿肩と裾の端とに待針を刺し、衿肩の方より裾へ縫ひ下すのです、次に身頃の幅をさし、兩脇を縫ふのです、それから前幅と抱の幅をはかり、兩衽を縫つて後、裾がけを紵けます、次に衿は裏衿と一緒に背縫の處から左右へ縫ひ下し、幅をはかつて裏表を紵け、次に袖を付けて、最後に綴ぢるのです。

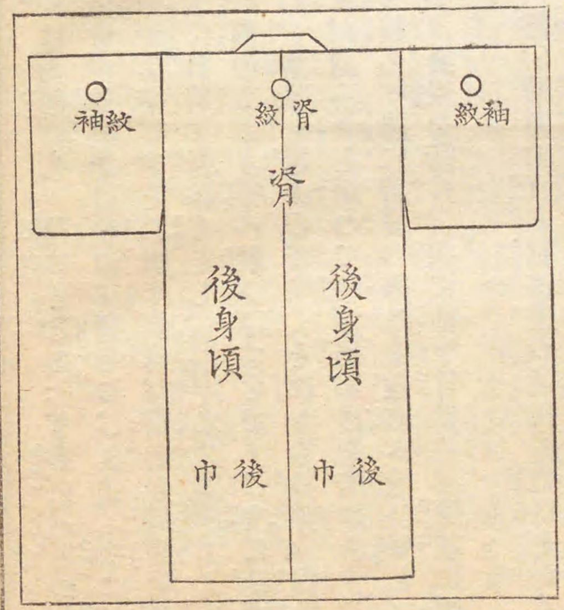
袷の縫方　女の袷は先づ裏袖に袖口をかけ、裏表を揃へ、袖口を合せて縫ひ、終つて袖口の方より四つ縫にして袖下まで縫ひ、幅をはかり裏表共別々に袖下を

そこで王子わ、

『よし、お前を私の嫁にする。はやく支度をして來い。』

と仰有いましたから、側に居た家來達わ、皆驚いて居りましたが、やがてその女の、支度をして來た所を見ると、更に又肝を潰しました。

それわその筈でしよう。今までわ驢馬の皮を被つて、眞黑な顔をして居た女が、今度わ金色



この圖は衣服を後から見た處で、一々名前をつけて置きましたから御覽ください

三寸許り縫つて後に、八ツ口を縫ひ、返して袂の丸みをつけ、又た四つ縫にして表へ返し、袖口の先と八ツ

や銀色に光る、如何にも立派な衣服を着た、如何にも美しいお姫樣になつて居るのです。

こう云う風でお姫樣は、一旦自分のお國を出て、いろ〳〵苦勞をなさいましたが、しまいには、又お姫樣にもどつて、王子のお嫁樣にお成りでした。

魚の中から出た指輪は、お姫樣が料理をなさる時、つい皿の中えお落しなすつたのです。

口とに躾をかけます、斯樣にして袖が縫へたら、次に背を縫ひ、兩脇と兩衽を縫ひ、裏の裾廻しを胴裏四布共別々につけ、縫目は裾から胴の方へと返します、それより裏地の背、脇、衽を縫ひ、次に裾を合せて躾をかけ、裾に少し綿を入れて綴ぢます、次に背を綴ち、脇を綴ぢ、八ツ口を縫ひ、袖を付け衽をとぢ、裾下を縫ひます、次に衿は裏表共に四ツ縫に致して後、單衣のやうに絎け、裏を二分程引込ますのです。

綿入の縫方　綿入は最初裏袖を縫ひ、躾をかけ、次に袖幅をはかつて、裏袖に袖口をかけ、袖口、八ツ口を縫ひ、綿を裏の方に入れ、それを表に縫付けて躾をかけます、但し袖口八ツ口は縫はないで、綿を入れてから絎けても宜し、次に背、脇、衽を縫つて衿をつけ

▲鷄の使

むかしアフリカに、タンガリンボと云う女がありました。この女わ、どう云うものか、夜ばかり外え出て、晝わ遊びにも出ませんでした。

その中に年頃になりましたので、近所の酋長の所えお嫁に行きまして、間も無く女の子を産みましたが、この子も阿母さんの性を受けて、晝間出る事をいやがりましたから、その名もウンゲンヤンガと付けられました。これはアフリカの言葉で、『月夜歩行の女』と云う事です。

ある日夫わ山え狩に出て行きますと、その留守を幸い、舅はタンガリンボに、咽喉が渴いてたまらないから、川え行つて水を汲んで來てくれ。』と云いつけました。

タンガリンボは、晝わ外え出ます。次に裾廻しを胴に取付けて表と同じに縫ひ、裾を合せ、躾をかけ、袖をつけます、それより綿を入れ、袖をとぢ、次に衿先を定め、背縫に針を打ち、伸縮無いやうにして、綴ぢて後衿けます、それから竪褄、相褄を綴ぢて、衿け、裾を綴ぢます、次に袖口に綿を含めて綴ぢるのです、但し縫はずにある物は袖口、八ツ口共に衿け付けるのです。

袷羽織の縫方　先づ袖を袷と同樣に縫ひ、後胴の布を裏と縫合せ、背を四ツ縫にします、次に前胴を接ぎ合せ、襠は四つ縫にします、それが出來たら今度は袷を裏から付けて、表で衿け次に袖を縫付け、襟をつけます。

綿入羽織の縫方　先づ袖を綿入のやうに縫ひ、次に胴の布を縫付け、脊縫をして後幅前幅をはかり、前の胴をはぎ、次に後襠、前襠、八ツ口と縫ひ、次に襟と袖をつけ、綿を入れ、次に襟を衿付けるのです。

女帶の縫方　帶地を取つて先づ火熨斗をかけ、折目や畳み皺などを伸ばし、丸棒に卷いて、之を眞二つに打り、其伸縮を見て、眞中より二尺置程に待針を打ち、篦をつけ、假縫を致し、織出しの方より一針拔に返し針を致して、叮嚀に縫ひ、眞中の處約そ一尺許を殘して又た、片方の端から縫ふのです、但し角は五厘づゝ控へて縫ひます、帶心は霧を吹いて伸縮の無いやうに致して置き、心を綴ぢ付ける時分には、よく氣を付けて少しも屈伸なきやうに檢して、幾度も地を撫でて見て、ピタリと平らに着けるのです、心に眞綿をくる

ないのですが、舅の云う事ですから仕方がありません。桶と水柄ともつて川え行き、水を汲もうとしますと、流れが速いものですから、すぐに水柄を取られてしまいました。

そこで、今度わ、自分の衣服の袂を浸けて、水を汲もうとしますと、忽ち流れに引込まれてそのまゝ溺死んでしまいました。

その後で、この事が家え知れます〻、さア大騒ぎになりました。中にも舅わ驚いて、大きな牛を一匹ひき出し、これを川の中え投げ込んで、代りにタシガリンボを返えしてくれ云いましたが、それでも嫁の姿は見えません。

その中に夜になりますと、娘のウンゲンヤンガわ、乳を欲しがつてしきりに泣き出し、いくらすかしても默りませんから、

む場合には、些かも厚い薄い偏寄なく、かたまりなどのないやうに注意すべきです、斯樣にして心を入れたらば引くり返して叮嚀に絎け付るのです。

補綴法 衣服や布類に破れ損じの出來たとき、又は布の不足を補ふ時などに、之を繼ぎ接ぎし、若くは綴ぢ繕ふ仕方を補綴法と云ひます、此法を習錬してゐますと、一たび損じた着物も再び使用に堪えるやうに成り、大層調法でありますから、裁ち方縫ひ方に亞いで心得置くべきことです、さて補綴法に接ぎ方と繼ぎ方の二通りあります。

接ぎ方 には片返しはぎ、割はぎ、掛はぎの三種あります、▲片返しはぎは二枚の布目を正し縞目を合せ所々に針待を刺し、成可く小針に接いで一方に返し、之に躾をかけて後、鏝を當てるのです、▲割はぎは布と布との縞目を合せ、同色の細絲で返し針に縫ひ、縫代を兩方に開いて躾をかけ、鏝をあてるのです▲掛はぎは双方の布目を正して縫代を裏へ折り、縞目を合せて躾をかけ、一方を絎け臺に掛け、布を張りながら、同じ色の細絲で布の横絲一筋づゝにかけて、縫目の縮まぬやうに接ぎ合せるのです。

繼ぎ方 之にもしきしつぎ、刺つぎ、穴つぎの三通りあります、▲しきしは布が古びて破れ、若くは損じた所に施すもので、其仕方は損所より稍々大きな友布の縞目を合せて之に當て、雌針一分雄針四分位、縫代四分位づゝにして針ひ、あとで鏝をあてます▲刺つぎは友絲で損所を細かく刺し、然る後に鏝をあてるので

子守の少女が背に負つて、川の岸の方え出て行き、可愛らしい聲をはり上げて、しきりに子守歌をうたつて居りますと、不思議や川の中からも、あわれな歌の聲がして、阿母さんが出て來ましたが、娘を見ると直ぐ抱きあげて、乳を飲ませてやりました。

子守わそれを見て大きに喜び、これから後わ毎晩々々、ウンゲンヤンガを川の岸え連れて來て、お乳を貰つて居りました。

その中にタンガリンボの夫わ、これを知つて大きに喜び、ある晩ウンゲンヤンガを出してやつた後から、牛の革でこしらえた繩を持つて、川の岸までついて行き、やがてタンガリンボの出て來た所を、飛び掛つて繩をかけ、家の方え引いて行こうとしました。

▲穴つぎは燒穴などを繕ふ時の仕方で、先づ其部分を裁切り、一分許りの深さに鋏を入れ、それを裏に折り返し、其穴より稍々大きな繼布の縞目を合せて、そこにあて、其周圍に躾をかけ、ほぐし絲又は同じ色の絲で折目の處の絲一筋づゝにまつり終り、繼布の方にも一分許りの深さに鋏を入れ、兩方に開いて鏝をあてるのです。

躾のかけ方　躾には、たゞの躾と隱し躾とあります、たゞの躾は雄針を表へ、雌針を裏へと一針づゝ縫ふのです、又た雄針一、雌針二と云ふやうに表へ出してかける仕方もあります、隱し躾は地質と同じ色の細絲で、雌針のみ表へ出してかけるのです。

解物の順序　解き物を致す時分に鋏の使用に注意せぬと、飛んだ疎相を仕出來します、又た糸が古く脆く成つたものなどを早く解かうとして疎末に取扱ひますと、布を裂き破るやうなことがありますから注意を要するのです、其正しい順序は單衣物なれば袖付、袖、裾がけ、衿、衿下、衽、脇、脊と解いて參るので、又た袷なれば袖付、八ツ口、衿の絎目、衿下、裾、衽、脇、脊と解きほごして參り、裏も之に准ずるのです。

輕便な手藝　編物と申すものは至つて輕便で、而して容易に覺えられる面白い手藝です、他の工藝と違ひ、道具も手輕であるし、又た材料も簡單でありますから、何處へでも携帶自由ですから、子供の守りを爲ながら

所がタンガリンボと一所に、川の水もどつと押して來て、而もその川の水が、まるで血の樣に赤くなりましたので、びつくりして手をゆるめますと、タンガリンボわその隙に、そのまゝ川の中え歸つてしまいましたが、その時聲ばかり聞えて、

『私を助けて下だされ氣なら、はやく行つてお父さんに、私の死んだ事を知らせて下さい。』

と、云ふ事ばかりわよく解りました。

そこで夫わ、急いで實家の父親のところえ、このことを知らせようと思いましたが、それにわ誰を使にやろうとおもいますと、自家に飼つてある鷄が出て、

『そのお使わ私が參りましょう。』

と云いますので、直ぐその鷄も出來、御客と雜談をしながらも出來、又た電車の中でも出來、或は旅行の友として携へ行くならば、公園のベンチに腰掛けながらも出來、徒然の憂さを慰めながら、一目一目と編み重ねて、遂に目的の形を作り得られるのですから、こんな樂しみなことはありますまい、之を覺えて居りますと、僅少の時間でも無駄に費さない習慣が養はれて、大層德で、生産的に活用するといふ習慣が養はれて、大層德用であります。

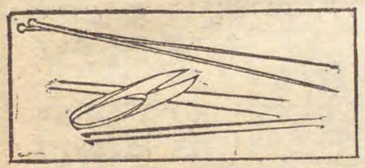
編物の品々　編物の方則に從つて編んで參れば、どんな形でも出來ますが、當節は世間の需要に應じて、拵らへますものは、襯衣、袴下、涎掛、肩掛、襟卷、帽子、手袋、腕はめ、靴下、巾着、銀貨入、袋、肘突、帶留、花瓶敷、洋燈敷などで、此他尙ほ品々あります。

編糸　編糸には毛糸、スコッチ、綿スコッチ、絹糸、レース糸、アイスクル等があります▲毛糸の內にも太、中、細、極細の四種ありまして、手袋にしろ、靴下にしろ、肩掛にしろ、大抵な編物に用ゐられます、市中で賣る毛糸の一オンスは大概七匁五分宛でありますスコッチは丈夫な糸で、重に手袋と靴下に用ひます▲綿スコッチはスコッチまがひの木綿で、値段の廉い所からスコッチの代用に致します▲絹糸は編物用としては三子よりのを用ひます、絹糸で編むと上品に出來ますけれど、價が高いので稽古には

をやりました。

鶏わ使に成つて、タンガリンボの實家え參りますのに、その途中にわ、時々惡戯者が出て來て、取つて食べようとしましたが、鶏わ羽叩をして、

『まかり出でたる鶏わ、タンガリンボのお使に、わざ〳〵お實家え參る者。タンガリンボわ死にました。水を汲むとて捲き込まれ、



適けません、普通銀貨入で二匁、肩掛で六十匁の糸を要します▲レース糸は絹糸の代りに用ひます、一玉は五十匁宛で、眞入は其半分です▲アイスクルは最上等の毛糸で値段が安くないから、滅多に使へませんが、肩掛や帽子の縁飾りに用ひ、或は各種の飾糸に成るのです、是は一オンス一玉宛になつて居ります。

編物の用具 は極く簡單なもので、編針と鋏とがあればよいのです、但し編針には鈎針、玉針、錘針の三種あり、鋏は普通縫ひ物に用ふるのでよいのです。

鈎針 は一方の端に戻りと云ふ鈎の付いた針で、是にも毛糸用と絹糸用の二種あります、毛糸用は象牙製のもの（實は

牛骨が多いのです）、絹糸用には金屬製のものを使ひます、又た毛糸用の針には糸の太さに應じて太、中、細の三種あります。

玉針 は大抵象牙製のを用ひますが、稀に竹製のもあります、玉針の形は普通の鈎針より二倍程長く、一端は尖り、一端には玉が付いて居ります、是は二本組合せて編むので、重にチョッキ、袴下、襟卷、肩掛などを編むに用ひます。

錘針 は金屬製で兩端とも尖り、長さは五寸位、是も太、細の各種あります、半襟、帶留のやうな平面の物を編むには、此針二本を用ひ、手袋や靴下のやうな筒形のものを作る時は、四本或は五本を用ひます、此針でもつて編んだ物をメリヤス編と申します。

川え陷つて死にました。』と、面白い聲でうたいますので、誰も殺す事わ出來ませんでした。

その中に、やつとの事でタンガリンボの實家え來て、この通りまたうたいますと、阿父さんはびつくりして、それでわ斯うして居られないと、急いで大きな牛を連れて、例の川までやつて來ました。

そこで阿父さんは、連れて來た牛を殺して、その肉を切つてわ川え投げ、切つてわ川え投げしましたら、見る〳〵中に川の水わ、山の樣に波を立て、その中からタンガリンボわ、さも嬉しそうに歸つて來て、再び元の酋長の所で、夫婦睦ましく暮らしました。

▲啞の女王

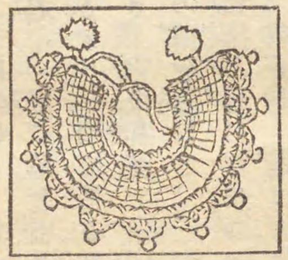
ある所に、大層子供を欲しが

編方の種類　編物は編む時の糸のかけやうで、編み上りに種々の模樣が現はれますので、一々編方に名が付いて居ります、即ち鈎針編の方では、鎖編、長打編、帽子編、笹編、藤編、松葉編、菊編、市松、龜甲、丁字、浪形、七寶等の編方があり、又た錘針で編む方には表編、裏編、ゴム編、藤編、木葉編、山形、菱、櫛目、網代などの名があります。

鎖編の仕方　大體編物の土臺は此鎖編であります、此編方は先づ扼結び、俗にツコクリと云ふものを拵らへ、鈎針を其結目へ差入れ、食指に搦げた一筋の糸に鈎を引掛け、少し鈎の尖を、捻つて、糸が鈎に掛つて扼目のうちを拔けるやうに致します、但し此時は扼の括り目を拇指と中指で挾んで居るのです、それより

拔き出して復た一筋の糸を前のやうに引拔くのです、斯樣して順々に編んで行きますと、幾百尺にても鎖を作ることが出來ます。

長打編　は先づ最初に鎖目一つ出し、次に二分五厘許りの鎖目を拵らへ、左の食指に搦んだ一筋の糸を拔き出し、之を一ツ目と致します、次に前の針に糸を搦め下の捨目に其針を通して、更に一筋の糸を引出し、先の糸と今引き出して掛けた糸と、皆んな一つに針に掛けて、引括る爲に更に糸を搦みて、先づ右の糸を引き拔き、其次も亦た針に糸をかけて、最初の長編の端の目を引拔くのです、



つて居る夫婦がありました。

ある日一人の乞食婆さんが來たので、親切に泊めてやりましたら、そのお禮に、子の出來る藥をあげるから、小僧さんを一人取りにおよこしなさいと云つて、その小屋まで丁稚を連れて行きました。

そこで丁稚わ、子の出來る藥の入つて居ると云う、小さな箱を渡されましたが、その歸途に、急に草臥れた樣に思いましたので、木の下に暫く休みました時不圖好奇な氣が出て、その箱を一寸明けて見ました。

するとその中にわ、鹽鮭がたつた一匹入つて居る斗りですから、

『なんだ、あの婆めいゝ加減な事云やがつて、こんな物を入れておきやがつた。こんな物が子の出來る藥なら、肴屋え行けば

これで二つ目が出來ました、次に三ツ目を始める時も二つ目の如く、先づ針に糸を搦み、下の捨目に其糸を通し、更に糸を引き出して、其懸つた糸と引出した糸とを、一つに括る爲めに再び鈎に糸を引掛けて引き拔き、尙ほ其處で一度糸を鈎にかけ、二つ目の長編の端の目を通して、三つ目を拵らへるのです、斯樣して下に搦み付ける糸のある限り、編んで行くのです。

帽子編　先づ糸を引掛けて拔き出した針は、目當の目に通して糸を引出し、それより捨目に通さないで其上を越えて、糸を引掛け、針に掛つてゐる所の二本の糸の中を潛らせ、引き拔くのであります、これは多く帽子を編む時に用ゐる編方です。

笹編　先づ鎖を編んで、其端より更に三つの鎖目を

出し、三つ目を四分計りに長く引き出し、後の二つ目に一つ一つに糸を通して上へ引き上げ、又た後の三つの目にも先の如く糸をかけ、都合五つを針にかけて一つに括り、其針でもつて直ぐと糸を引き出し、一つ針に搦みて、後の目に針を通し、又た糸を引き出して括るのです。以上擧げましたのは編方の初歩で、此他に尙ほいろ〳〵の編方のあることは前に御斷りした通りであります。

運針の練習　編方には又た運針の稽古が必要です、先づ安い毛糸で以つて編み習つて、針の運び方や、指の力の入れ方を達者に調子よく、又た輕く手が動くように練習を積むべきです、而して其編んだ糸は幾度も解いて、編み直して見るが宜しいので、これは誠に面

いくらでもある。馬鹿にしてらア。食つてやれ〳〵。』と、云いながら自分で食べてしまいますと、不思議や今度わ眠むくなりましたから、また路傍え倒れたまゝ、グウ〳〵寐込んでしまいました。

所がその夜更頃、不圖目をさまして見ますと、自分の側で赤兒の泣く聲がします。

丁稚わ驚くまい事か、『さて

刺繍

刺繍の目的　刺繍即ち縫取と申す技は、女子の手先の仕事としては極く適當なものです、たゞ此技術は入り易いようで至り難いので、誰しも修業の中途一寸厭氣になりますが、此境を超えて追々と上達すれば、興味を感ずる度も段々と深くなるものです、固と刺繍の目的は繪畫と同じく、山水、花卉の美、鳥獸、人物の眞相を纖細に繡ひ出して、且つ其遠近、濃淡、姿勢まで巧みに寫し出すといふ、一種の美術でありますから、之を習ひますには先づ圖畫の素養が必要でありますし、次に刺繍の大體の方法を説明致しませう。

刺繍の方法　刺繍を致すには、先づ繡をすべき帛片を刺繍臺に張り、之に下繪をつけ、次に好みの糸を針に通し、糸の端は丸く結んで玉を拵へ置き、そこで最初帛片の裏から針を通して、下繪を見當に繡ひ始めるのです、で、糸には成るべく手を觸れないやうにし、又た縫つた面に伸縮の無いやうに注意しなければなりません、併し初心の内は兎角伸縮が出來たがり、又た糸の光澤も冴えませんが、馴れて來ますと指の運びも輕く

わやつぱり鍊の効驗で、おれが子供を産んでしまつたのか。ヤア大變だ〳〵。』と、赤兒を其所え捨てたまゝ、何所えか逃げてしまいました。

その後に赤兒わ、一人でオギヤア〳〵泣いて居りますと、やがて親鳥が一羽出て來て、この子を自分の巣え咬え込み、自分の子供と一所にして、大切に育てゝ居りました。

なり、針目も綺麗に揃ふやうになりますから、練習が肝腎です。

帛布の張り方　帛片を刺繍臺に張り付けますには、その布の兩端に別の布（普通木綿を用ひます）を二重に輪にして縫ひ付け其輪へ丸い棒を通して、それを左右へ引張つて、刺繍臺に確乎と結ひ付け、猶ほ横の處には長い棒を當てゝ置いて、それへ便らして帛片の横をキリ〳〵と太い糸で固く縢り付け、左右縦横共少しも伸縮のないやうに爲るのです、又た場合によつては裏貼をすることもあります、扨て帛片の支度が出來たら、今度は之に向ふ體の姿勢ですが、體は成るだけ屈まずに正しくして刺繍臺に身を凭せず、又た繍地は至つて汚れ易いもの故、成可く之に手を觸れないやうに

さてこの國にわ、一人の王子が居らつしやいましたが、ある日森の中え狩に來て見ますと、木の上で人間の子の泣聲がします、不思議に思つてよく御覽に成ると、烏の巣の中に、可愛らしい女の子が一人居ります。

王子わ可哀そうに思い、直ぐその子を抱きおろして、御殿え連れてお歸りになり、大切にお

注意をして、左の手は何時も臺の下に入れて置いて、唯だ其指頭だけが時々繍地に觸る位に致し、而して表面繍地の上には紙片又は帛片を綴付けて覆ひをかけ、差當つて繍取らうと思ふ部面だけを脱して置くのです、但し是も繍ひ終つたら直ぐと又た覆ひを掛けて了ふのです。

下繪の付け方　圖畫の素養ある人は自在ですが、初心で繪の心得も無い人は、先づ簡易な花、葉又は果實、紋形のやうな物を剪り拔いた型紙を帛片の上に載せ、其上に繪具の粉をふつて、それを繪具刷毛で刷いて、その形をうつしとり、そこで此形を見當に繍つて行けば間違はありません、尚ほ一歩を進めて十分に致せば、一旦紙に下繪を描き、白粉か胡粉をよい加減に溶解し

育てなさいますと、その子もまことによく懐いて、段々成人しましたが、只困つた事にわ、何も口を利く事わ出來ず、只ア、〳〵云う計りで、全く唖でありました。

けれども王子わます〳〵この女の子を可愛がり、果わ阿母様のお止めになるのも聞かず、この娘をお妃になさいました。

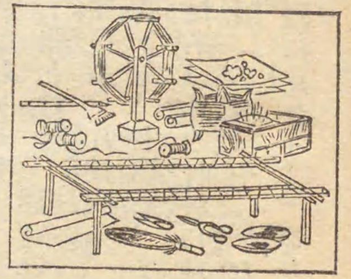
御夫婦の間も至つて睦しく、

二人わ御一所に暮らして居らつしやいましたが、その中に戰が初まつて、王子わ其方えお出ましになると、間も無く唖のお妃わ、可愛い若君をお產みになりました。

所が阿母様わ、初からこのお妃を、大層嫌つて居らしつたものですから、折角お產れになつた若君を、そつと犬の子と取りかえて、それを誰にも知れない

て置いて、此下繪の上に薄い紙を敷き、白粉の溶液を筆に浸ませて敷寫しを致して、次に其紙の白粉の着いた方の面を繡地の上に伏せますと、ホンノリと模樣が白くあらはれます、そこで此模樣が消え去らぬ内に白粉の涎液でそれを繪取つて下繪と致します、併し白つぽい色の繡地でしたら、下繪を明瞭に致す爲め色物で描く方が宜しいのです、又た刺繡の技術が上達して繪もよく出來る人は、型紙も下繪も用ひませんで、直ぐと繡地に繡糸を施して、描きながら繡つて行きますが、斯う成るのは餘程熟達した後の事です。

刺繡の用具　刺繡に用ゆる器具は、第一に針、之に天細、天太、相中、糸八、太八、極細、シベ等の種類あり、次に刺繡臺、枠、拝、針箱、糸卷、小鋏、型紙、型彫（型紙を彫るに用ゆ）刷毛、羽箒、筆（眞書）文廻し（紋などを描く場合に用ゆ）等です、尙ほ此他に下繪を描く爲には白粉、胡粉、繪具の粉等も要りますし、又た糊は下繪を貼る時若くは帛片の裏面を塗る場合に必要です。



繡方の名稱　最初は平繡から習ひ始めて、次に玉繡を覺え、それより管繡、纏繡、すがら繡、星繡、挿繡、兩面繡、高繡などゝ順々に六ケ敷いものに進んで參るのです、繡方は尙ほ此他にも金糸を以つて繡ふ金絲繡や、金紙を細

樣に、海邊え捨てゝおしまいなさいました。

尤もこの時、海邊えわ一人の婆さんが來て、その捨子を直ぐ拾つて行きましたが、これにわ誰一人氣が付かなかつたのです。

こう云う事が一度ならず、二度目の若君のお產れの時わ、羊の子とすりかえられ、三度目の若君わ、猫の子と入れかえられて、其度に眞實の若君わ、海邊に捨てられたのですが、またその度に婆さんが出て來て、何所えか拾いあげて行きました。

そんな事とわ夢にも御存じ無く、王子わ敵を追拂つて、めで度く御歸りになると、こわ如何に、大切のお妃わ、そのお留守に、犬や羊や猫の子を產んで居らつしやいます。

さすがの王子も氣味が惡くなつて、

く切つたもので繡ふ平金繡や、色々の縮緬、絹などを繡ひ込む友仙繡や、毛絲を用ひて刺し縫ふ毛絲刺や、植物の葩、葉、鳥虫の羽、翅等を浮上らせて縫ふ浮繡など、色々の繡方があります、又た之に用ゆる糸も、繡方によつてそれ〳〵異つた糸を選びますので、幾種類もあります。

絲と材料　繡糸は極天細、絹糸、羽二重糸、芥子糸、蛇腹糸、片蛇腹糸、縒金糸、縒銀糸、細金糸、毛金糸、平金糸、木綿糸、リン子ル糸等いろ〳〵あります、又た糸以外の材料には、金銀のモール、南金玉及び寶玉類（手柄類や襠などの繡に用ひます）、天眼（動物の眼に用ひます）等をも用ひます。

造花

趣味と寶益　造花は女子に適當した手藝でありますので、近年は之を稽古なさる方が漸次多く成つて來ました、一體造化と申すものは、唯だ娯樂に致すばかりでも、隨分面白味のあるもので、冬枯の淋しき時分に櫻花の爛漫たるを咲かせたり、或は自然の御手に成る牡丹の花と其研を競つて見たり、又は秋の千草の咲き亂れた花籠を造つて、之を親しい人の許に贈つたり、扨ては白菊の花簪を少女に與へて喜ぶ顏を見たり、或は又た己が部屋に飾つて不斷の眺めに致したり、なかゝに趣味深く、樂しみなものであります、けれど又た娯樂といふ外に、女子の職業として見ても、造花

『全體お前わ何だと思つて、こんな厭な者ばかり產むのだ。これにわ理由があるだろう。』と仰有いましたが、元より啞のお妃ですから、何ともお返事がありません。

阿母樣わまた王子に、『あんな氣味の惡い魔物の樣な女を、何時まで一所に置くつもりだ。はやく追出してしまわないと、今にどんな事をするか知れないよ。』

と、しきりに仰有いますので、果わ王子もその氣になり、とうくこのお妃を、御殿から追出す事になりました。

その時お妃わ、不圖女中達の話をお聞きになつて、何でも眞夜半に墓場え行き、艸の露を三度甜めて來れば、どんな啞でもなおると云う事が知れましたから、大喜びて、直ぐその通りし

は他の手藝よりも遙かに利益があります、近頃造花の需要は實に盛んなもので、第一客室食堂の裝飾として用ひ、第二音物として用ひ、第三女子の髮飾りとして用ひられ、其他種々の方面に需要が多いので、從つて供給が間に合はず、故に職業としては隨分割のよい仕事なのであります。

二つの素養　造花はもと自然を摸倣するものですから、能く實物に就て色の工合や、枝振りや、葉の重り鹽梅、花の附き方などを仔細に觀察して置くことが一番に必要であります、それゆゑ勢ひ植物學の素養が入用で、學問の上から、一層正確に其性質や、狀態を知ることが出來、造花を致す上に大層な裨益となります、又た造花は自然の花を寫生して置く必要がありますから、圖畫の素養が入用で、之に依つて大體の形と色を寫生する外に、其解剖圖を細かに寫し取つて置きますと、大きに便利であります。

造花と器具　造花用の器具は、鏝、鋏、ピンセット、打拔型、締道具、糊壺及び糊板、刷毛、伸子、彩色筆、菊皿、小茶碗、手拭等で、尙ほ此他に染粉を溶解したり蠟を煮たりする爲の土鍋、鏝をあたゝめる爲の火鉢が入用です、鏝は花瓣に膨らみを付けたり、丸みを付けたり致す道具で、之に筋鏝、緣鏝、瓣鏝、馬鏝の四

ましたら、不思議や今まで動かなかつた舌が、自由に働く樣になりました。

お妃わ大そう喜びましたが、今なまじ物を云つてわ、却つて身の爲めになるまいと、矢はり啞の眞似をして、やがて御殿を追出されましたが、その時王子のお情で、一人でわ用心が悪いと云うので、御妃にわ黃色い馬をたまわり、六人の騎馬武者を

ます。

造花の材料　造花に要する材料は、寒冷紗、絹、美濃紙、竹皮、天鵞絨、經木、糸、針線、綿、米の粉、管護謨、骨竹、藁、糊、それから布地を着色する染粉などであります。

地質の染めやう　造花は實物の色を寫さねばなりま

つけ、その上金一貫目と、銀一貫目とを下ださいまして、

さてお妃わ、これ丈の物をお貰いになつて、住馴れた御國をお出ましになりましたが、やがてその晩方にわ、隣の國の王樣の所え來ました。

尤も此時わ、もう啞でわ御座いませんから、やがて王樣の御前え出て、

『私わ謎をかけてまわる者で御

せん故、染色に注意することが肝要です、同じ紅の花でも、盛花と晩花とによつて色が異ひ、又た蕾と半開と滿開、輪の大小等によつては、色の濃淡に差違があります、又た一つの花の中でも濃い處や淡い個處があるし、それから又た同じ綠の葉にしても、新芽と半開と、生葉と枯葉とでは大層な相違がありますから、是等に要する布地は染粉でもつて一々適當の色に染めなければなりません、併し染色は染粉の調合工合で望みの色が出て來ないものですから、餘程の熟練と手加減を要します。

瓣の造り方　さて着色が濟んだら、之を陰干にして、よく乾上つた所で、目的の花に相應した打拔型でもつて打ちぬき、次に花の心も同じく打拔型で打ち拔

座いますが、若し貴君がお解きになれば、私の持つて居ります、黄毛の馬一匹と、六人の騎馬武者と、一貫目の金と、一貫目の銀を、皆さし上げてしまいますが、その代り、若しお解きになれなければ、私の持つて居ります丈の物を、何卒御渡し下ださいまし。』

と、仰有いますと、王様も面白がつて、その謎をお聞きになると、これわ斯う云う事でした。

『阿父さんわお魚。
阿母さんわ丁稚。
乳母やわ烏。
お宿わ木の上。』

と、これわ自分の事を仰有つたのですが、他の者にわ解りません。王様わとう〳〵約束通り、黄毛の馬一匹と、騎馬武者六人と、金と銀とを一貫目宛、このお妃に渡しました。

いて拵らへます、そこで花形及び心が出來たら、鏝をあて、櫻は櫻、桃は桃の形に曲げ又は縮まして、之を針線の先に貼付けた花の心に、姫糊で一つ宛貼り付け、次に其中心に蕊を着けます、此蕊も矢張打抜型で拵らへます、次に蕾も同じ順序で作るのですが、たゞ花瓣の曲げ方を加減して、圓く中の包まるやうに致すのです。

葉のつくり方 葉も花と同樣に布地を染めて乾した後、打抜型で求むる所の葉の形に打抜いて、之を五六枚程重ねて、締道具にかけて締めます、すると道具の作用で、眞物の葉に見るやうな小さな筋が

着いて、可い鹽梅に縮れ曲るものです、そこで此出來上つた葉は軸の先に姫糊で貼り付るのです。

草花の莖や、樹木の若枝などは、通例針線製の軸を用ひますが、飾り花などは成るべく實物の莖、枝を使用した方が可いのです、但し花簪などは大抵針線に着色した寒冷紗又は紙を捲いたものを用ひます。

全體の配り方 以上の手順を經て、花、葉、莖、枝とも揃つた上は、之を適當の位置と形狀とに配つて組立てるので、其順序は先づ針線のさきに花を付け、次に針線を卷きながら、枝、葉、蕾と順々に貼り付けて行くのです、此場合實物の御手本があれば結構ですが、時候違ひで實物が得られないやうな場合は、兼て寫生

さて次の日にわ、また次の國の王様の所え行つて、同じ謎の賭をして、またお妃がお勝でしたから、此所でも持つて居た丈の、黄毛の馬二匹と、騎馬武者十二人と、金と銀とを二貫目宛取りましたが、また次の國でも同し様に、王様と謎で勝つて、同じ様にまた取りましたので、しまいにわ黄毛の馬が八匹、騎馬武者が四十八人、金と銀とが八貫目宛になりました。

お妃わお喜びに成つて、尚先え入らつしやると、今度わ大きな森の中に、三人の男の子が、仲好く遊んで居るのに會いました。

見るとこの三人が、皆揃いも揃つて片目でしたが、何うも御自分のお子らしく思いますので、連れて歸ろうとすると、側の小屋から婆さんが一人出て

して置いた繪畫に就て其形を取るのであります、繪畫は斯様いふ場合に必要な許りでなく、造化の出來上りに風韻を持たせ、又た雅致を添えるには、何うしても畫の意匠を假らねばなりません、かくして其枝神に入り、造化の妙を奪ふことが出來たら、それこそ實に愉快で耐りますまい。

料理法

料理の準備　料理にかゝる前には、先づ拵へやうとするものゝ、献立をつくり、それに必要なる品物や器具を取り揃へて、身邊におかねばなりません。それから自分の顔や手をよく洗ひ、身のまはりを清潔にするのです。臺所用の着物か前掛かゞあれば、それを纏うて、身仕度を甲斐々々しくするのが肝要です。而して一たび料理にかゝつた以上は、他のものに手を觸れないやうに心掛けねばなりません。

布巾の扱ひ方　布巾は、つかひ道によつて、それ〴〵區別しておくのが宜しい。お魚の方に使つた布巾を、そのまゝ野菜類の方に用ひたりなどしますと、腥い臭氣が野菜に移つて、味が變になつて來ます。また布巾はすべて食物を盛る器具を拭くのですから、出來るだけ清潔にせねばなりません。布巾に不潔なものでも、附いて居ますと、それが食物にうつツて、衛生上恐るべき害を及ぼすことがあります。それで布巾

來て、

『何故その子を連れて行こうとなさる。』

と聞きます。

『どうも私の子に相違無いから、連れて歸ろうと思います。』

『貴女のお子なら、目が二つとも揃つて居そうなものですが、皆片目なのわ何う云うものでしよう。』

と云いますと、お妃わしばらく考えて居らつしやいましたが、

『よろしい。それでわ斯うしてためして見ましよう。』

と、云いながらハンケチを出して、その目を一人つゞ拭いておやりなさいましたら、三人が三人とも、皆潰つた方の目をあけて、

『オ、、お母さま。』

と云いながら、右左から取りつきました。

は、たびゝ沸え湯で洗ひ、時には消毒をするのが肝要であります。

臺所の經濟　臺所で用ひる品には、炭、薪、醬油、味噌、食料品など、さまゞのものがありまして、而も毎日三度々々のことですから、これを積れば、なかゝ少なからぬ金高となるのです。それ故、なるべく用ひ方を約やかにして、僅かのものも粗末にせぬやう、綿密な心掛けを持たねばなりません。第一には、品物の買ひ入れ方に注意して、不必要なものを買ひ入れぬやう、またムヤミに贅澤なものを求めぬやうにするのです。第二には、料理に必要な品物を、ムダ使ひせぬやうに氣をつけるのです。要りもせぬ火をドンゝ起しておいたり、砂糖や醬油を徒らに使つたりするのは、深く慎しむべきことであります。第三には、お魚や野菜類を、なるべく廢りのないやうに、たとへ不必要と思はれるものでも、何かの役に立てることを考へねばなりません。

料理の用具　料理によつては、隨分多くの器具を要することもありますが、通例の家で、毎日用ひるのは、次のやうなものであります。

竈、俎、錫引鍋、鐵鍋、網杓子、荒神箒、瓶、片口、目笊、布巾、コンロ、盛臺、改良揚油鍋、金杓子、おろし金、皮剝器、魚串、かぶと鉢、擂鉢、擂木、柄杓、みそこし、うら漉篩、さゝ

婆さんわ感心して、

『それでわいよ〳〵貴女のお子さんでしたか。私わこの間、皆海邊で拾つて來て、此所で育てて居りましたのですが、お母さまが知れた以上わ、たしかにお返えし申します。』

と、初めて子供を渡しましたから、お妃わ大そう喜び、今まで育てゝもらつたお禮にと、途中で取つて來た金や銀を、皆この婆さんに渡し、それからわ大急ぎで、御殿へお歸りなさいました。

御殿でわ王子が、一たんお別れに成つたお妃が、今わもう啞でわなく、而も立派な若君を、三人ともお取り返しになつて、勇んでお歸りになりましたから、王子わ夢かと斗りに喜び、又阿母様も、今わ疑もはれましたから、そこで初めの啞のお

ら、たわし、米揚笊、薄刄庖丁、出刄庖丁、膳、椀、皿、どんぶり、藥罐、湯桶、西洋料理の鍋、ナイフ、フオーク、スプーン、卵解器、油燒きに用ひる鍋、大皿、バター入れ等。

器具の取扱ひ方 臺所の器具は、壞れやすいものが多いのですから、叮嚀に取り扱はねばなりません。また食物を入れるものは、常に清潔にするのが肝要なのです。釜や鍋は、底に物のこげつかぬやう、砥石かたわしかでよく摩り、きれいに洗つた後、伏せておくのです。庖刀は使ふ前に、清水でよく洗つて水氣を去り、また使つた後には、磨砂を大根の頭かたわしかにつけてよく洗ひ、よく拭いて、椿の油か胡麻の油を引いておくのです。笊類は、よく洗つて、俯伏せにしておくのですが、米揚笊と魚を洗ふ笊とは、おき場所を別にせねばなりません。擂鉢を使ふ前には、よく拭うて水氣を去り、使つた後には水を注ぎ、さゝらで目形に摩つて洗ひ、きれいな棚に伏せておくのです。

庖刀の用ひ方 先づ持ち方から申しませう。すべて庖刀は、右の手で莖短に柄を握り、食指を少しく柄の肩へかけ、その手を伏せ加減にして、拇指と中指と小指とに力を入れ、身體は俎の左の方へ斜に寄せ氣味に据え、切るべき品を俎の上に一文字において、右の小口から切るのです。

次に、その用ひ方は、たゞ庖刀を押しつけたばかりで

妃へ王子の王様になるにつれて、此國の女王になさいました。

▲十二王妃

むかし〳〵、ある山の木樵の所に、女の子が十二人ありましたが、家が大層貧乏なので、とてもこの子供等を養う事が出來ませんから、ある日山奥え連れて行つて、十二人とも捨てゝおきました。

するとこの山奥に、女の魔物が住んで居りまして、この十二人の子が、谷底に捨てゝあるのを嗅ぎつけ、直ぐに行つて捕えて來ました。

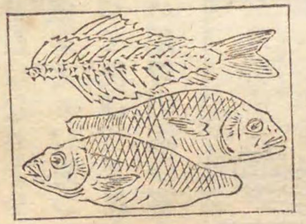
十二人わ氣が氣でわありません。皆一室の中に押込められながら、ブル〳〵震えて居りますと、やがて大きな白鼠が出て來て、

『コレ皆案じる事わ無い。私が

は、いかに軟かい物でも、うまく切れませんから、庖刀を前に押すとか、後へ引くとかするのです。併しこれは、よほど熟練を要することですから、實地に行つて見て、その呼吸を悟らねばなりません。

三枚おろし方

三枚といふのは、お魚の表と裏との肉をそぐことです。これは何魚に限らず、下肉の方から先におろすのです。而してまだ足りない時には、上肉をもおろすのです。すると、上肉と下肉と中落との三枚になるのでせう、それで三枚おろしと言ふのであります。



はね切り　刎ね切りといふのは、鯛、鮪、比目魚、鰡、鮭、鱈のやうな、大きいお魚の切り方なので、庖刀を斜にして順々に切りはねるのです。

筒切り　これは、お魚の頭を左手で押へて、尾の方からはね切りにすることで、鯉、鮒、鰡などの料理に多くあります。

野菜類の切り方　野菜の切り形には、色紙、短冊、賽の目、半月形などがあります。これ等は皆、その物の形に似せて切るから、斯やうな名があるのです。また烏帽子形といふのは、牛蒡などを丸のまゝで斜に切り、庖刀の止まりから二三分隔てゝ、横一文字に切りますと、ちやうど烏帽子のやうな形が出來ます。次に梅形は、玉子、

助けてあげるから、後についてくるがい、。』

と、云つて先に立ちますから、その後からついて行つて見ますと、ある池の岸の大木の下え來て、

『この上に居れば大丈夫だ。』

と云います。

そこで十二人わ、皆木の上に登つて、まるで目白の止まつて居る樣に、枝の上に列んで居りました。

こゝに又、此近所に一人の王樣が居らつしやいましたが、ある日その家來が、池え水を汲みに來ますと、木の上に可愛い女の子が、十二人も揃つて居りますので、いそいでその事を王樣に申上げると、王樣わ可哀そうに思召し、やがて皆迎え取つて、お妃にしてお置きなさいました。

大根、蓮根などを、長い花の形に締めもし刻みもして、小口から庖刀を入れるのです。

醤油加減　すべて煑物に味をつけるのは、鹽や醤油の加減によるのですから、これには、よほど注意を加へねばなりません。その注し加減は、最初から十分に入れずに、先づ七八分位ほどにして、その味を試した上で、殘りの二分を加へるのです。而して煑物は、なるべく沸騰させると、風味がわるくなりますから、あまりながい間煑ない方が宜しい。また殘りの二分ほどの醤油は、鍋のおろし際に加へるのです。

砂糖加減　これも、あまり多量に用ひますと、風味を損しますから、よく〳〵氣をつけねばなりません。

だし加減　だしは、煑物と汁物との區別によつて、多少のちがひがあります。煑物ならば、最初から加へるのですが、汁物の時には、これを加へてから、あまり永く煑ない方がよろしい。

味噌加減　味噌の種類によりまして、そのまゝ刻んで用ひるのと、よく擂鉢ですりつぶして用ひるのとあります。併し何れにしても、鍋に入れてからは、ながく煑てはいけません。

ゆで加減　野菜類をゆでるには、一時に多くの水を煑立たせ、その中にゆでるものを入れ、直ちに火を強くしてゆでるのです。また乾豆などは、初めから多量の微溫湯と共に鍋に入れ、とろ火にかけて、ながくゆでるのです。

だしの製法　煑物をするにも、汁物をこしらへるに

こちらわ女の魔物です。折角拾つて來た十二人の子供に、まだ一口も食べない中逃げられて、今わその十二人とも、王様の所に居ると聞きますと、何んで默つて居りましよう。

やがて自分も、可愛らしい小娘に化け、後から行つて池の側の、木の上に登つて居りました。

所え又王様の家來が來て、

『オヤ、今日も亦一人居る。』

と、云いながら抱きおろして、同しく王様の所え連れて行きました。

すると魔王の化けた小娘わ、うまく王様に取り入つて、

『あの先に居る十二人わ、皆魔物の子ですから、はやくお捨てにならなければいけません。』

と、巧く御殿を追い出させ、それから自分の家來をやつて、途中で十二人を捕えると、皆その

も、だしがなければなりませんから、その製法をよく心得ておくのが肝要です、そこで先づ、鰹節のだしを作りますには、鰹節を手引湯（沸え湯と微温湯との中間位の温度）の中に五分間も浸け、直ちに引き上げて水氣を拭ひ、それから上部の黒い部分を削り去り、よく切れる鉋で薄く長くけづり、これを鍋の湯の煮立つた中に入れるのです。この外、椎茸や昆布で、だしをこしらへることもあります。

火加減　物を煮るには、火加減をよくするのが肝要です。どんな煮物をするにも、火加減は最初に強く、次第に弱火にするやうなのが宜しい。はじめから弱火で煮ますと、その物の滋養分が、汁の方に吸ひ取られまして、肝心の喰べる物に滋養分がなくつてしまひま

す。また、焼物をする時には、よく起つた炭火を伏せ加減にしまして、なるべく火先の立たぬやうに注意しながら、火口を塞がねばなりません。而してお魚などは、火が内部まで通るほどに焼かねば、衞生上に害がありますから、少し位は焦げても、十分に焼くのがよろしい。

浸し物の調理方　野菜類をゆでゝ、かたく水氣を絞り取り、これをほどよく切つたのに、生醤油か生醤油に煮だし汁をまぜたものか或は生醤油に砂糖や味淋をまぜたものかを注ぎ、なほその上に炊り胡麻、薄がきの鰹節などを、ふりかけたものを、浸し物と言ひます。

これを拵へる野菜は、おもに小松菜、ほうれんそう、みつば、芹、よめな、しゆんぎく、ちさ、つまみな、十六さゝげ、まびきな等を用ひます。

あえ物の調理方　これは、ゆでたるお魚や、介類や、野菜などを、ほどよく取りませて、種々の香料を摺りませた味噌で、和え混ぜるのであります。また、その和えものゝ種類によつて、胡麻あえ、からし和え、さらさ和え、味噌あえ、木の芽あえ、白あえ、みぢん和えなどがあります。

酢の物の調理方　酢の物といふのは、お魚や介類をお刺身のやうに、適宜に切りまして酢に浸し、又は酢に味淋と醤油とをまぜ合したものに注けるのであります。アッサリとして、よいものです。

眼球をくり抜いて、直く大きな穴え埋めさせてしまいました。

この時娘達わ、皆懐妊でありましたので、穴え入ると間も無く、十二人が一人宛、王様のお子を産みましたが、元より穴の中の事ですから、自分達の食物わ無く、子供に飲ませる乳も出ません。

そこでその苦しまぎれに、しまいにわ親の身で、子の腕や足

食物の選び方　食物は、脂濃いものばかりでもならず、また、アッサリしたものばかりでもいけません。人間の身體には、澱粉質と脂肪質と蛋白質と、この三ツが適當に必要なのですから、あまり一方に偏しないやうに、氣をつけねばなりません。尤も、暑い時と寒い時とは、食物の上にも、やはり相違が出來るのですから、大抵その季節に應じたものを、喰べるやうにすれば、自然とそれが身體に適するのであります。

臺所の改良　食物を調理する所は、人間の命のもとなのですから、家の中でも最も好い場所を選び、空氣の流通や、日あたりをよくせねばなりません。また、濕氣を避けるためには、土間をタ、キにしたり、流し場を亞鉛張りにするのが宜しい。而して流し場、かま

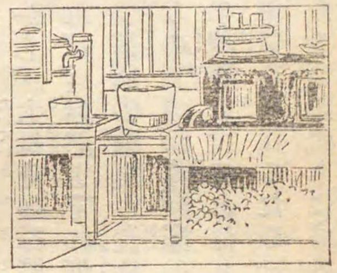
を折つて、それをムシャ〳〵食べ初めました。所がその中で、一番年の若いお妃わ、此間眼球をぬかれるゝとき、片目だけ取られずに居て、自分の產んだ子は自分で見えますから、決して食べる樣な事わしません。

而も男の子でしたから、大切にして育てますと、それが段々大きくなつて、大そう利口な子になり、毎日そつと穴をぬけ出して、食物を取て歸りますので、それで他の者までが、餓死にならずに居られました。

ある日そわ子わ、王樣の御殿の前え行つて、他の子と遊んで居りますと、例の魔物わはやくも見つけて、のざと猫撫聲で呼びつけましたが、やがて手紙を書いて、これを自分の家え持つて行けと云います。

元より利口な子ですから、

衛生



身體の健康　衛生の道を心得て、之に依り身體の健康を保護するのは、人たるもの、義務であります、凡そ健康であれば活潑に働くことが出來、長生することが出來、又た家庭を樂しくすることも出來て、大層など、俎塲、盛臺、コンロなどは、すべて立ちながら使はれるやうな仕組に、改良せねばなりません。

わが國では何所の家でも、不便な不潔な臺所を平氣で使つて居るやうですが、これを改良するのは、女子の重大なる任務であります。

幸福であります。

空氣　健康を保護する法も色々あるが、先づ第一には空氣に就て注意せねばなりません、空氣は酸素と窒素とから成り、呼吸に依て肺臟に入り、血液を循環せしめるものですから、可成く清涼新鮮の空氣を呼吸するやうにし、塵埃や毒瓦斯の混つた不潔の空氣は避けて吸はぬやうに注意せぬと不可ません、又た空氣には恐るべき病毒を含んで居ることがあるゆゑ能く氣を付くべきです、濕つた空氣も亦た健康を害します、それから室内の空氣は時々窓を明けて、戸外の新鮮なのと交換せぬと不可ません。

飲料水　空氣に次いで人體に必要なのは水であります、水の良否は健康に大關係を有つて居りますから、

『ハイ。』
と云つて御殿を出ましたが、途中でその手紙をあけて見ますと、その中にわ、魔物の娘にあてゝ、
『この子が其方え行つたら、直ぐに食つてしまえ。』
と書いてありました。
けれどもこの子わ驚きません。直ぐとそれを書きかえて、
『この子が其方え行つたら、お前のお婿さんにするがよい。』
として、それを持つて行きました。
魔物の娘わこれを見て、この子を大切にして奥え通し、いろ〳〵な御馳走をしてもてなしましたが、其中に自分も酔つて、グウ〳〵寝込んでしまいました。
この隙に奥え行つて、寶物の蔵をあけ、その中に入れてあつた、自分の阿母さんや伯母さん

しろ飲料水には總べて清淨無害なのを、使用すべきです、若し已むを得ずして不潔な水を用ゆる場合には、濾すか又は煮沸することを忘れてはなりません。

水を濾す法 明礬三分乃至一匁を溶解して、水一斗の中に加へ、暫く其儘にして置いて、更に清潔な砂三分と木炭の粉二分とを混ぜ合せ、之を普通の水甕に半分ほど充たし、其上に前の水を注いで濾す時は、精良な飲料水が得られます。

可成く清潔にして、良い水を選んで飲まねばなりません、若しも不潔な水を誤つて飲用する時は、甚く健康を害しますから、用心が肝要で、井戸の水にしろ、河の水に

飲食物 は人身を養ふもので、生命の根本となるものであるから、是れ亦た大いに注意を要します、猥りに口腹の慾に迷つて、健康を損ふやうな事をしてはなりません、例へば消化の悪い物とか、腐りかゝつたやうな物を口に入れると、それが爲めに胃を害し、腸を害して、遂には種々の病氣を引起すやうなことになります。

滋養食料 とは人體の健康を保つ上に必要な食物と申すことで、即ち身體の滋養になる營養物のことです、田原藥學博士の研究によると、日本人に適する保健食料の分量は、蛋白質九十六瓦、脂肪二十瓦、含水炭素四百五十瓦を標準とすべきだといふことです。但し之は一日の分量でこれだけの、營養分を得るには、

達の、くりぬかれた眼球を取り返えし、その上魔物の大切にして居る、魔法の棒を盗み出して、急いで穴え歸えつて來ました。

これからこの子わ、阿母さんや伯母さんを、皆元の通りの眼にして、まづ穴から連れ出し、やがて王樣の御殿え乘り込んで、例の魔法の棒でもつて、あべこべに魔物を退治しましたから、王樣も感心なすつて、その

白米、牛乳、鷄卵、牛肉、魚類、野菜、豆類、味噌、豆腐、油類などを適當に取合せることが必要です。

牛乳と鷄卵　此二つは共に滋養のあるものです、牛乳には脂肪乾酪素、蛋白質を含み、鷄卵も同樣の成分に富み、どちらも人體を營養するに必要なものです、鷄卵中の白味は黃味よりも滋養があります、黃味は養ると消化が惡くなるゆゑ、半熟で喰べるが可いのです、又た茶や珈琲は直接に營養とはならないが、心氣を興奮させる効がある故、少しく用ふるに差支へありません。

消化器の作用　食物が口の中に入ると、先づ嚼で嚙み、唾液を混ぜて咽喉に送り、それより食道を通つて

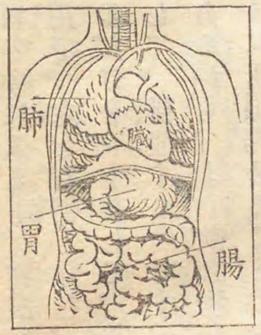
胃の中に入ると、胃液だの膽汁だのと云ふ消化器の作用で、之を胃粥となし、其中から身體の營養となるものだけを取り盡して、其餘の糟粕は腸に送つて糞尿にして、排泄するのです、斯樣に消化器は大切な機關であるから、よく飲食物を選び、且つ節制を行つて、假りにも損傷めることのないやうに注意せねばなりません。

齒の衞生　齒牙は食物を迎へ入れる第一の門戸で、此處に於て先づ嚙み碎して消化器の勞を省くのですから、胃腸の健全を保つには、先づ齒を丈夫にして置かねばなりません、それに又た齒は外貌の美を裝ふものでもありますから、强健に且つ淸潔に白くして置くことの注意が必要です、齒を損じないやうにするには、

子を王子に成さろうとしましたら、何思つたか棒を持つたまゝ、天え登つてしまつたと云います。

▲白い鳥

大むかし北海道のアイヌの中に、太郎と云う男の子が居りました。阿父さんにわ早く別れて、阿母さんと只二人で居ります、此所え、阿父さんの生きて居る時分、自家で使つて居た、



毎朝顔を洗ふ時、楊子に或るべく上等の齒磨粉を着けて洗ひ磨き、又た三度の食後にも湯水で含嗽するのです、斯樣しないと齒垢が溜つて醜いばかりでなく、齒が腐蝕る恐れがあります、又た堅い物を嚙んだり、酸い物を喫べたり、或は甚しく冷たい物や熱い物を齒に當てると、上面の琺瑯質を損傷めて、齒髓を起しますから、平素の攝養が大事です。

胃と腸の關係　胃と腸とは共に大切の消化機關であつて、胃の粘膜と腸の粘膜とは續き合つて居ますから、一方の胃に病氣があれば、一方の腸にも蔓延するのです、食物

悪藏と云う男が來て、阿母さんに、もう一度緣付かないかと、しきりに勸めましたが、元より操の堅い女ですから、却つて悪藏を叱りつけて、少しもその勸めに從いませんでした。

すると悪藏わ腹を立てゝ、その意趣返しに、何も知らない太郎を捕え、小屋の中え押し込んで、餓乾にしてしまおうとしました。

の不養生や、毒な物を喰べる時は、唯だ胃を侵す計りでなく、同時に腸も侵されます、即ち胃病の因となるものは腸の病の因ともなるのですから、胃の衛生は取も直さず腸の衛生と心得べきであります。

胃と衛生　胃の養生法を擧げると、第一に食物を克く嚙みこなすこと、第二に身體を適度に運動すること、第三に食事の時間を一定すること、第四に滋養物を取ること等であります、尤も運動には時期があります、食事を濟ませて直ぐに身體を動かすと、著しく胃液と胃の運動を妨げ、食後少くも三四十分の後に運動すれは胃の官能を助けるものです、又た食事と食事との間は、五時間乃至六時間を隔かなければなりません。

血液の効用　血液は心臓より出で、それより一定の

けれども太郎わ、常からまことに可愛らしい子でしたから、近所の者が氣の毒がつて、内々食物を運んでくれましたから、何時まで經つても平氣で居ります。

そこで惡藏も、又手を變えまして、今度わ太郎を小屋から擔ぎ出し、川の中え投り込んでしまい、その上阿母さんの所え行つて、家にある寶物をみな取り上げてしまいました。

可愛い子わ捨てられる、大切な寶物わ取られる、阿母さんわ大そう心細くなり、もう〳〵仕方が無いので、またある家え緣付いてしまいました。

さて太郎わ、川え投り込まれて、その儘死んでしまつたかと思いますと、運の好い子わ妙なもので、幸い波にも捲き込まれず、川下の洲の所まで來ると、

血管を經て體内を循環し、暫くも休むことがありません、全身に流動してゐる血液の分量は、凡そ二升五合餘で、其内五合を失ふ時は人は生命を失ふのです、血液は血漿と血球とから出來て居て、血漿の効用は營養分や老廢分の運送や血球の運搬を司り、又た血球には赤と白との二種があり、赤血球は酸素の運搬及び其配達をなし、白血球は消毒の用を致します。

血液の循環 身體の各部は十分に營養を取ることが出來ず、又た十分に老廢分を放散することが出來ません。爲めに筋骨の健全を害ひ、種々の病氣を起します、血液の循環を活潑ならしめるには、十分の營養を與へ、適度の運動を行つて、心臟の健全を保たねばなりません、又た皮膚を傷つけて出血を見るやうなことがあつたら、直ぐに止血法を行はねばなりません。

月經時の注意 婦人の月經は生理的の働きにより、凡そ四週間毎に一回づゝ現はれる所の出血です、月經の時に血液が下りるのを不潔のものゝやうに考へるのは、日本でも西洋でも同じことですが、併し月經は別段汚れた血でも何でもないのです、月經の時分には腰や下腹に痛みを覺えたり、又は頭痛齒痛を感じたり、或は感情が強くなつたりなどして、身體の調子が狂ひますから、此時分の攝生法としては、第一に身體を安靜に保つこと、第二清潔に保つことの二つの注意が必要です、而して風邪を引かぬやうに用心せぬと不可ません。

うまく這上る事が出來ましたが、こうなると氣が弛んで、しばらく夢中になつて居りました。

所え一人の女が來て、太郎を膝の上え抱きあげながら、

『オウイ〳〵！』

と呼びますので、初めて息を吹きかえしますと、女も大そう喜んで、そのまゝこの太郎を、自分の小屋え連れて行き、可愛がつて育てゝくれました。

所がこの女わ、コロボックルの仲間でしたが、コロボックルと云うのわ、大むかしの一番開けない人種で、自分の仲間で無い人間わ、皆食べてしまうと云う位ですから、今この女の家に、アイヌの子の居るのを見ますと、近所の者わ舌なめずりをして、しきりに食べ度がりましたが、果わ無理に奪いに來そうで

初めての月經　初めて月經を見た少女は、ひどく不安の念をするものです、これは生殖器の充血に基く刺戟などの爲に、精神に異常を感ずる所以でもあるが、一には又た少女の境遇を離れて成女の群に入つたと云ふ心持が一種の煩悶を其小さな胸に與へるので、人に顔を合すも口を利くもいやといふやうに羞ぎ込むのです、此時分には母や姉などが氣を付けて慰めてやり、月經の終るまで靜に臥かして置いて、身體を冷えぬようにし、消化し易い物を喰べさせ、可成く精神を落着けさせて置くやうにすることが肝要です。

皮膚の清潔法　人の身體を包む皮膚は、誠に汚れ易いもので、内から出る汗脂と、外から附く塵埃とが皆んな垢に成つて毛穴を塞ぎ、それが爲めに皮膚の活動を妨げて皮膚病を釀し、或は熱を發するとか、風邪を引くとか、病氣の原因になるのですから、能く注意して皮膚を清潔にせねばなりません、そこでお湯に入つて身體を洗ひ清めるといふ必要を生じるのです。

入浴の注意　湯の溫度は體溫と同じ位即ち攝氏の三十五度から四十度位までの處が宜しい、入浴の度數は暑い時分でも精々一日一回に止め、幾度も入るのは毒です、盛夏の外は一週二回位入浴すれば十分です、又た滿腹の時と空腹の時とは、入浴しては不可ません、滿腹の時には胸が惡くなり、空腹の時は眼暈がして湯氣に上ることがあります、それか

す。

女わまた心配して、ある時太郎に向い、

『折角お前を助けてあげたけども、このまゝ私の家に置いてわ、他の者が取つて食うかも知れないから、氣の毒だが何所かえ逃げておくれ。』

と、小さな舟を出してくれて、太郎をそれえ乗せ、一人川え流しましたが、その時女わ悲しそ

ら入浴後は全身をよく拭いて、少しも濡れて居ないやうに注意することが必要です。

化粧品　石鹸は垢を除いて心氣を一寸爽快にさせるが、皮膚を養なものではない、石鹸の成分中には角質を溶解する性分を含つて居ますから、之を皮膚に塗ると生目を荒して、白粉のノリを悪くし、毎日入浴する者に在つては殊に害になります。石鹸に引代へ糠は脂肪を乳液にする性分を有し、角質を溶解することなく、垢を落す効能がありますから、之で洗つて後は皮膚が滑澤で、白紛のノリも宜いのです、麩も糠と同樣の効能があります から糠二分に麩一分程の割で混ぜて洗へば尤も適當で

痧子の出來た時は、泔水を能く沸して洗ふのが一番です、又た洗粉は石鹸よりも皮膚の爲に良いのです、白粉は單に容色を整へる計りでなく、又た身體の清潔を保ち、精神を爽快にする等衛生上の効能も少くありません、たゞ可成く鉛毒の無いものを用ひて、あつさりと薄化粧するを可いとしてあります。

雀薄と面皰　顔に雀斑や面皰の出來たのは醜いものです、之を治すには硼砂一匁を五十培の清水に溶解し、朝夕盥嗽のたびに、又た入浴した時に、之を少しづゝ手掌に滴らして面へ摺込み、乾いてから佳い白粉を薄く着けるのです、此硼砂水は又た白粉下としてよく、尙ほ之へ香水を入れて香を付けると一層精神を爽快にします。

うに、

『あれほどみんなが欲しがつても、お前を今斯うして逃がしたら、あとで屹度腹を立てゝ、私を生かしてわおかないかも知れない。その時わ白い鳥に成つて、お前の側を飛んで行くから、待つて居ておくれよ。』

と、云いました。

何の事か解りませんが、兎に角陸に居てわ危いと云うので、太郎わ小舟に乗つたまゝ、川の中を彼方此方漕ぎまわつて居りますと、ある日の事です、何所からとも無く一羽の鳥が、舟の舳え來て止まりましたが、見ると躰中眞白で、而もその眼からわ涙をこぼして居る所を見ると、此間の女に相違ありません。

『まア叔母さんぢやありませんか。』

と、云いながら取りつきますと、

髪の毛の衛生

頭髪の養生法は油を着けるのが尤も適當です、油は成丈け梳油を用ひ、油垢は清潔な油で梳き取るが宜しい、雲脂を落すには癖直しの金盥へ熱湯を注ぎ、酒精を盃に一杯程入れ、癖直しの布を其の中へ浸して頭をピタ〳〵叩き、髪の毛を揉めば、奇麗に毛穴の掃除が出來て、逆上ることもなく、雲脂も奇妙に脱ちます、それから髪は三日目位毎に結ひ直すのが可いです。

眼の衛生　眼は物を視ることを掌るもので最も大切な機關です、眼の健全を保つには先づ視神經に過度の刺激を與へないやうにするのです、例へば強い光に向つたり、或は弱い光線で物を視たりすると、視神經を勞らして其作用を鈍くします、又た不潔な家屋に住つて塵埃や煤烟を眼中に入れると、結膜炎にかゝります、此病を防ぐには毎朝冷水で能く洗ひ清め、柔かで清潔な布片で常に拭くのです、若し又た此症に罹つたら速かに醫師に見て貰ふべきです、又た讀書の人の冒される近視眼は不自由のもので、一度之に罹ると段々と近視の度が進み、眼鏡無しでは盲目も同樣で、生涯治らぬものですから、未然に防ぐことが肝腎です。

感冒の豫防　感冒を防ぐには身體の營養をよくして、皮膚を強くして置くといふことが一番必要です、それには不斷怠ちず冷水摩擦を行ふのが宜しい、又た丈夫な人は、餘り厚着に過ぎないやうに注意すべきです、それから夜間の外出、若しくは風の劇しい日、雨

白い鳥もなつかしそうに、太郎を羽根で抱き〳〵めましたが、『さアこれからわ、お前を阿母さんの所え連れてつてあげよう。さア此方えお出で。』と云いながら、又高く舞いあかりますから、太郎わその鳥の飛んで行く方え、舟を漕いで行きましたら、何時の間にか大きな陸え來ましたが、その間に鳥わ見えなくなつてしまいました。

太郎わやつと舟から上りましたが、さて方角も解りませんので、ひとりで泣いて居りますと、其所え小さな男の子が二人と、その阿母さんらしい女が一人と、彼方からやつて來ました。泣聲を聞きつけて、側え來ました所を見ますと、こわ如何に、この女こそ前に別かれた自分の阿母さんで、二人の子供わ、腹ちがいの弟でありました。

の降る日の出歩きは感冒を豫防する爲には可成く避けねばなりません、又た濕り氣のある衣服は、風邪を引き易いから早速脱ぎ替えねば不可ません、又た暖い室から急に戸外へ出たり、入浴後直ちに寒風に曝されたりすると、甚く寒氣を感じますから、是れ又た用心すべきです。

感冒の手當　風邪を引いて腹痛下痢を起した塲合には、「フランネル」綿などで、腹部をよく被ひ置き、食物は流動物か又は可成く消化し易い物を用ふるが可い、熱があつて劇しく頭痛がする塲合には冷水又は氷で頭を冷せば心持が快くなります、雨降りなどの夜は外出は慎しむべきです。

家政

家政とは何か　皆さんは、成長の後に人の妻となつて、一家をおだやかに、治めて行かねばならぬでありませう。一家を治めるには、大小の違ひこそあれ、一國の政治を執るのも同じことで、いろ〳〵面倒なことがあるのです。それを一々取り捌いて行くのが、いはゆる家政なのであります。男子は、おもに外へ出て働きますから、家の内のことは、どうしても女子が行はなければなりません。家庭が圓滿に治められないやうでは、實に女子たるもの丶甲斐がないのです。それで皆さんも、今の中から家政のことを、多少心がけておかねばなるまい、と思ひます。家政と一口に云ひまし

そこで親子兄弟が、初めて名乗り合いまして、大そう喜びましたが、この三人が大きくなつてから、今度わあの惡藏を見つけ出して、とうゞ仇を討つたと云う事です。

▲五頭の大蛇

むかし亞佛利加のある所に、姉妹の娘がありました。

ある日その父親が、隣村の酋長の所で、嫁を欲しがつて居ると云う事を聞き込み、二人の娘に向いまして、

『何方か一人行かないか。』

と云いますと、

『私が參りましよう。』

と、姉娘が云いますので、それでわ早速支度をして、行列も立派に作つてやろうとしますと、

『いゝえ、私わ一人で行きますから、決して誰も來て下ださいますな。』

一家の規律　といふことから、申し上げませう。規律は、『少女心得』にも述べました通り、いかなる時にでも、必要なことですが、一家を治めるには、殊更にこの心得が大切で、朝起る時間から、御飯をたべるにも、仕事をするにも、寢床に就くにも、悉く一定の規律を守るやうにせねばなりません。たとへば、朝は六時に起きて、七時までに室内や庭先の掃除をすませ、七時半には朝飯を喫し、それから十一時頃まで書物を讀み、午後は裁縫をするといふやうに、日々の仕事に時間表をこしらへておくのです。またこれを、モ少し大きく見て、

仕事の日割　を作り、月曜日と水曜日とには、家の内の大掃除をするとか、火曜日と木曜日とには、朝から洗濯をするとかいふやうにしておくのも、よい方法であります。お料理の獻立なども、日割にして、大體のことを定めておくのは、大そう便利であらうと思ひます。次には

一家の經濟　といふことですが、これが非常にむつかしいので、女子の大なる手腕を要する點なのです。皆さんは、まだよく分りますまいが、どこの家でも、米、薪、副食物などを買ひ入れることから、着物の新調費、日々の小使錢に至るまで、お金のかゝることが、なか〳〵多いのですから、よほど儉約をしなければ、お金が足りなくなります、身分不相應な贅澤や、ムダ費ひをせぬやうに、つねゞ心がけて居なければ

と云つて、たつた一人で出かけました。

さて姉娘わ、親の家を出まして、獨り隣村の方え行こうとしますと、途中で鼠が一匹出て來て、

『お嬢さん、私が御案内致しましょう。』

と云いましたが、

『五月蠅い鼠だ。お前なんぞに用わ無いよ。』

と、足で蹴飛ばしましたので、

『ヤレ〳〵亂暴な娘だ。これぢやアとても嫁にやア成れない。』

と、憎まれ口をきいて行つてしまいました。

それから先え行きますと、今度わ蛙がヒヨコ〳〵出て來て、

『ヘイお嬢樣。お迎いに參りました。』

と云いましたが、

『生意氣な虫けらだよ。其方え

なりません。一家の經濟が、ウマク立ち行かないと、自然に家庭が不愉快になつて、おだやかに治まらなくなります。經濟と共に必要なことは、

家庭の衛生 に氣をつけるといふことであります。わるい病氣などに感染せねやうに、家の内外を常に清潔にし、もし家族の中に、病氣にかゝつたものがあつた時には、親切にこれを看護するなど、みな女子のつくすべき任務であります。殊に

臺所 などは、やゝもすると、不潔になりやすいのですから、食事の度毎に、器物や流し場を、きれいに洗はねばなりません。たゞに臺所を清潔にするばかりではなく、

お料理や裁縫 のことを司るのもまた、女子の務めなので、家政の一部分でありますが、これ等は項を改めて述べてありますから、こゝには略します。

婢僕の取り扱ひ方 女中や下男に對しては、なるべく情ぶかい心を以て、召使つてやらねばなりません。たとへ女中や下男に、少々わるいことがありましても、あまり荒々しく叱りつけるよりは、やさしく敎へ導いてやるのが、よいのです。女中だからとて、やはり餘所の可愛い娘さんなのですから、ムヤミにいぢめるなどは、甚だ無慈悲なことであります。常に愛し、いたはつてやりさへすれば、その恩に感じて、よく働いてくれるだらう、と思ひます。次に

退いておいで。』
と、又蹴飛ばしましたので、
『ヤレ〳〵亂暴な娘だ。あれぢやアとても嫁にやア成れない。』
と、これも怒つて行つてしまいます。
その中に森の中え來ますと、大分草臥れましたから、木の下で休みながら、お辨當を使つて居りますと、羊飼の子が一人通りかゝつて、

『姐さん。そのお辨當を少し下ださいな。そうしたら案内してあげます。』
と云いましたが、
『馬鹿お云い。案内なんぞ入らないから、はやく彼方え行つとくれ。』
と、叱りつけましたから、
『まア何と云う吝嗇坊だろう。これぢやアとても嫁にやア成れない。』

家庭の娯樂

絶えず愉快な笑顔を以て家族を慰めることが、必要であります。而して、夕飯後や日曜日などには、一家のものが寄り集つて、なるべく高尚なる遊びをするやうに、主婦たるものが仕向けねばなりません。これには、おもしろいお話や、音樂などが、最も宜しからうと思ひます。

家庭の團欒

といふことを、よく人が言ひますが、皆さんも今の中から、つとめて好機嫌を以て、家庭の樂しみを增進するやうに、快活に平和に振舞はなければなりません。皆さんのやうな幼少な頃から、かやうな習慣をつけておきますと、將來主婦となつて、一家を治める時に、大そう都合がよいのであります。

茶の湯

茶道の由來

茶の湯といふものが盛んに行はれる樣に成つたのは、足利將軍義政が東山の邸に在つて茶事を樂しんだ時からです、其頃奈良に珠光と云ふ閑人が居つて、義政の招に應じ、屢々茶の御相手をした、而して自分の定めた茶道の法をば弟子の武野紹鷗に傳へたといふ、是が先づ濫觴であります、其後今川義元織田信長なども斯の道を好みましたが、豐臣秀吉が天下を統一するに及んで、茶博士千利久なるものが顯はれ

と、この子も呆れて行つてしまいました。

それから又行きますと、今度わ一人の婆さんが出て來て、

『お嬢さん〳〵。是から先え行くと、お前さんを笑う木があるが、決して笑い返えしちやいけませんよ。又バタを入れた袋がありますが、それを取つて食べちやいけませんよ。それから頸が腋の下にある、奇體な人が出て來ますが、その人に水を貰つちやいけませんよ。』

と、親切に敎えてくれましたが、これにも、

『餘計なお世話をお燒きでないよ。』

と、惡態を吐いて行きまして、その敎えた事を用いず、笑う木にわ笑い返えし、バタの袋わ拾つて食べ、腕の下に頭のある人から、水を貰つて飲みながら、

て、茶道に關する儀式や方則を定めました、故に茶道は今日も尙ほ利久の定めた規則に從ふもので、其正統を千家流と云ひ其他遠州流、石州流、金森流、織部流など、種々の流派がありますれど、何れも皆な利久を祖宗と仰いで其遺法を受傳へて居ります、斯う云ふ譯故利久は茶道中興の祖と崇められて居るのです。

茶會の趣味　一體茶會と申すものは、狹い室の內に四五人の客を招待して、主人自ら斡旋して先づ炭をつぎ、次に料理を供し、濃茶を供し、最後に薄茶を進めて馳走を致すので、それで一人の給仕も使はず、坐布團も用ひず、主人自ら給仕の勞を執り、起居動作に少しの拔目なく働き、之に對して客も亦た慇懃に挨拶し、行儀よく擧動ふて、一椀の茶を啜り合ひ、其間には器物を見書畫を見、或は花を賞して樂しむのですから、風流幽雅の趣味に富むことは申す迄もありません。故に彼の俗惡殺風景の宴會などゝは大層な相違で、斯の道の興味は遙かに高尙なのであります、それに茶の湯の一擧一動は悉く禮節に合ふのですから、禮に嫻はんと思ふ紳士殊に婦人令孃方の嗜の一として習ふべき科目であります。

茶道具　扨是より茶の湯の順序を說明する前置として先づ必用の茶道具一通りを擧げて見ませう。

○風爐○五德○釜○釜敷○鐶○火箸○羽箒○灰砲烙○灰匙○炭籠○前土器○水壺○香盒○茶碗○茶杓

やがて隣村の川の所まで來ました。

この川にわ、丁度酋長の娘が水を汲んで居て、

『今阿父さんがお留守だから、こゝを渡つちやいけません。』

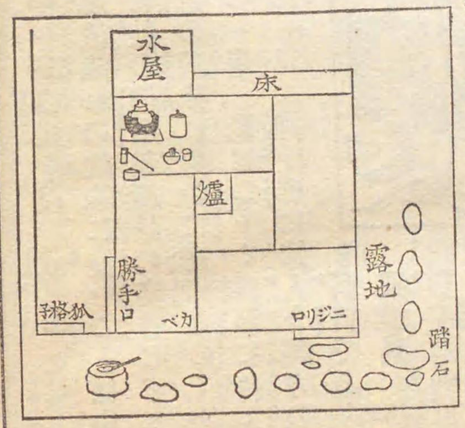
と云いましたが、姉娘わそれも聞かずに、川を渡つて、酋長の家まで來てしまいました。

すると娘も歸つて來て、

『それでわ阿父さんの歸つて

○建水○茶器○棗○柄杓○蓋置○茶筌○茶巾○袱紗
○煙草盆○燈臺等。

右の内風爐は夏の間用ひ、冬になると爐を開けて釜をかけるのです。



數寄屋　茶會を催す室の事で、茶室又は茶席とも云ひます、其廣さ四疊半又は三疊、若くは二疊の小間で、便宜の處に九寸六分四方の爐を切り、ニジリ口を設けてあります、其構造は茅葺屋根で竹の

來るまで、これでお團子をこしらえてお置きなさい。』

と、黍を澤山持ち出しましたが、姉娘わ面倒だと云うので、すぐに搗きもせず、好い加減に團子を拵えておきました。

間も無く夕方になりますと、ソレ酋長が歸つて來たと云いますから、何樣な人かと思つて見ますと、これわ又思いの外な、五つ頭のある大蛇ですから、姉

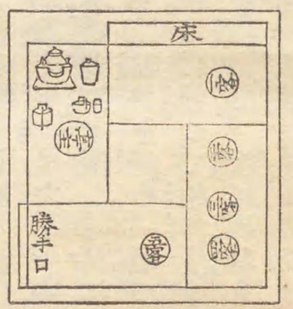
柱、或は柱に杉丸太を用ひ礎に自然石などを用ひ、鴨居敷居等の木材も多く松杉檜梅などを選び、數寄を盡さんよりは簡卒朴撲を尚ぶのか茶道の趣意であります、數寄屋に敷く疊は備後表が普通で、緣には通常紺布を用ひます。

茶會の主客　茶會を催さうとする時は、主人より當日招待すべき人々に向つて案内の回狀を廻すのです、すると案内を受けた客は、會の前日會主の宅へ赴き、厚意辱なき由を禮云ふて歸ります、之を前禮と申します、扨當日は時刻に違はず一同會主の宅に至り、先づ待合室に控へて案内を請ふのです、又主人の方では客の來ない前に茶室の準備、爐の支度、懸物香爐の飾付手水鉢の水までも用意して置きます、そこで客の揃つ

た由知らせがあると、主人が迎ひに出て教寄屋へ案内するのです、で客は亭主の案内に從つて待合を出で、飛石を傳ひ、數寄屋の入口の前なる手水鉢で手を洗ひ、口を嗽ぎ、ニジリ口より上つて穿物を片寄せます、かくて客は順次に席に入り、先づ第一に釜を見、次に風爐（冬ならば爐）を見、次に牀の前に至りて軸を見、終りて銘々の席に着くのです、此間に亭主は手水鉢に水を足したり、煙草盆、火鉢を始末したりなど致します、其内に客がすべて着席した頃を考へ、亭主は勝手口を明げて挨拶します、客も亦た庭廻り掃除の行屆いたことなど褒めて挨拶します。

風爐炭手前

そこで亭主は炭手前致すべき由を述べて退き、烏府、灰器等を持出で、釜をはづして炭をつぎます、之を炭手前と申します、其法は亭主挨拶終つて烏府、灰炮烙を持出で釜を揚る、次に羽箒で爐縁を掃き、袱紗で香盒を拭き、火箸を取つて風爐中の下火を掻集めるすると、上客より二客三客と順々に禮して爐邊に進み炭手前を見る、次に亭主は灰匙で風爐の前及び砲烙中の撒灰を掬ふて五德の周邊にまき、灰の形を正しくする、此時客は又挨拶します、次に亭主は火箸を取つて長炭、輪炭、枝炭と順々に摘んで風爐の中につぐのです、次に香爐を取上げ、蓋を取つて香を爐にくべ、畢つて蓋する時、客は香盒の拜



娘わ肝を潰しましたが、今更逃げる事も出來ませんので、黍の團子を其前え持ち出しました。五頭の大蛇わ五つの口え、團子を一つゝ咬わえましたが、直ぐと又吐き出して、

『エイ、何と云うまづい團子だ。こんな物を拵える奴わ、おれの嫁にする事わ出來んぞ。』

と、いきなり尾を振りあげて、姉娘を叩きましたら、そのまゝ

死んでしまいました。

さてこの事が、やがて父親の方え聞えますと、今度わまた妹娘を、嫁にして送つて來ました。

所がこの妹の方わ、姉とわ違つて素直な娘でしたから、途中で出て來た鼠にも、蛙にも、羊飼にも、又婆さんにも、やさしくして云う事を聞き、それから黍の團子も、丁寧にこしらえておきましたので、やがて大蛇の歸つて來た時、大そう甘がつて食べましたが、見る〳〵中に五頭の大蛇わ、立派な人間になりまして、初めて妹娘と婚禮し、生涯睦ましく暮らしました。

▲人魚の約束

むかし或國の王様が、海え船遊にお出になると、不意に船が波にへばりついて、何うしても動かなくなつてしまいました。

その時彼方の波の間から、一

見を請ふのです。其が終ると、亭主は是より會席を進らすべき由を述べて、勝手口をしめ退くのです。

會席の作法　先づ客の數に應じて膳を出し、次に香の物を出し、中酒初献を進め一順づゝ注ぐ、此間に客は香の物を飯椀の蓋に取り、鉢を末座より返します、そこで亭主は之を引いて飯をかえる、次に汁を替え、次に煮物を出し、又た飯を替えます、次に銚子を持出で二献目を進め一順づゝ注ぎ、銚子は客に預け亭主は勝手に退つて相伴する、かくて時刻を見計らひ、吸物を持出で、次に硯蓋と三献目の銚子を持出で、挨拶を述べ献酬をするのです、斯くして酒飯の饗應終つた時亭主は膳桶を出します。次に亭主は勝手口にて挨拶し、坐を改めて粗茶を進らすべき由を述ぶれば、客は一同之に挨拶し、菓子は懷中し、坐を立つてニジリ口より出る、之を中立と云ひます、此間に亭主は室内を掃除し、茶具を整へ、すべての準備が出來た所で、再び客を數寄屋に迎入れる、之を後入と云ひます。

濃茶の作法　後入して一同が坐に着いた時、亭主は茶碗、建水、蓋置を持出で、柄杓を引いて一同に挨拶する、客は答禮する、次に亭主が建水を少しく前方へ繰出す時、上客は花及花器を賞め挨拶します、其より亭主は袱紗を捌きて茶器を拭き、次に釜の蓋を取り、柄杓を右に持ちて釜より湯を酌み、之を茶碗の中に注ぎ、次に右の手で茶筌を取り、左の手で押へ乍ら茶碗

匹の人魚が出まして、

『貴君の王子を下ださるなら、この船を動かしてあげましょう。』

と云います。

けれども王様わ、此時まで王子の無かつた時ですから、そんな約束なら仕ても可かろうと、

『よし、王子をやるから動かしてくれ。』

とお頼みなさいましたら、船わ

の中で洗ひます、之を茶筌とぢと申して手加減があります、次に茶碗の湯を建水へこぼし、茶巾を取りて茶碗の周圍を三拭半ふき、更に茶巾を撮みて茶碗の中をゆの字に拭き、其より茶杓にて茶器の茶を掬ひ出して茶碗に入れる、之を茶をはくと云ひます、次に湯を酌みて茶碗の中へ半分程注ぎ、茶筌にて強く搔きたて、終つて右手にて茶碗を取上げ、左の掌に載せ、右手をあしらひ乍ら茶碗の表を上客の方へ向け、懷中より替え袱紗を取出し、茶碗と並べて置くのです。

濃茶の飲み方

上客少し坐を進め、右の手に茶碗を取り吾が前に置き、同じく袱紗を取つて左の手に移し、茶碗の次に並べ置き、次客に一禮して左手に袱紗を取つて右の手に之を披き、左の掌に敷いて茶碗を取上て袱紗の上に置き、右の手を竪にして持ち、茶碗の表を左へ廻して一口喫みます、此時亭主茶の服加減を問ふ、客之に答禮し、二口喫みたる時、次客三客に禮をする、次に三口半喫んで呑口を右の拇指を外にし食指を内にして撮み拭ひ、其手を懷紙で拭くのです、そこで又茶碗を右へ廻し、呑口を右にして兩手に持つたまゝ次客に渡します、すると次客は又上客の爲たと同じ順序で喫み、三客に渡すのです、かくて一碗の茶を飲廻し了ると、末座の者は茶碗を上客に返す、上客は之を取上て茶の香を聞ぎ、茶碗を見て、之を二客へ渡し、二客以下又同じ樣にするのです、次に又上客は袱紗を取り、之を見終りて二客に渡すこと茶碗に同じ、か一くて巡した所で末座より上客に

樂に陸につきました。

所が、その後間も無く王子がお出來になりました。王子がお出來になれば、何うしても人魚にやらなければなりません。それわ元よりお厭ですから、やがて王子が十五にお成りの時、わざと遠國えお出しになりました。尤もその前に、

『お前わ人魚が欲しがつて居るから、決して海の側や川の岸え行くな。』

と、堅くお云い付けになつたのです。

さて王子わ、それから諸國をお廻りになまりしたが、その途中で、獅子と熊と虻とを助けて、自分が獅子になり、熊になり、虻になると云う、不思議な法をお受けになりました。

それからある王國え入らつしやると、其所のお妃樣が内氣な方で、誰もお側えわ寄せつけないと云のを、王子わまづ虻に化

返し、上客は膝を進めて亭主へ戻します。

三器の拜見　右異つて亭主茶碗をすゝぎ建水に傾け、茶碗を再び置いた時、上客より御仕舞下さいと禮し、亭主之に答禮します、そこで亭主は水は酌み水壺の蓋をする、此時客は茶入、茶匙、袋の拜見を請ひます、之を三器の拜見と申して其見方には一定の作法があります、三器の拜見が終ると、亭主は之を勝手へ持去り、直ぐと菓盆、菓子を持出し、薄茶手前を始めます。

薄茶を喫む心得　亭主菓盆、菓子盆を出し終つた所で、袱紗捌き、茶筌とぢ等略々濃茶に於ける如くして、茶を茶碗にはく時、上客次客に一禮して菓子器を兩手に取つて吾が前に置き、懷中より紙を出して菓子器の右に置き、菓子を取つて紙の上に載せ、菓子器を次へ廻し、次客以下順々に同じ事をし、末座に至つて之を上客へ戻します、すると上客は之を受取て元の處へ置くのです、軈て亭主が薄茶をたてゝ出せば、上客菓子器を向直し、茶碗の側に出して先づ亭主にすゝめます、其時亭主辭退すれば上客一同へ禮して先づ菓子を食し、右の手に茶碗を取り左の掌に載せ、右の手先を堅にして捧げ、戴きて後、右の手を持直し前へ廻し、先に持ちたる處を前になし、又右の手先を堅にして持て三口半に喫み盡し、右の拇指と食指とで呑口を撮み、右へ廻し拭

けて、首尾好くそのお側え行き、それから段々と話し込んで、とう〳〵大の仲好しにお成りでした。

すると、この國の王樣が、急に戰にお出になるので、王子もお供をしてお出になりましたが、その時お姫樣に、

『私わ今度の戰に出ますと、まさか討死わ致しませんが、その代り、事によると、海え落ちてしまうかも知れません。その時わ、何卒海岸の岩の上で、バイオリンを彈いて下ださい、屹度頼みますよ。』

と、斯う云つて出て行きました。

所がその途中で、王樣わ大切な劍をお忘れになり、誰か急いで取つて來いと仰有いますから、王子わ前え進み出て、

『その御使わ私が致しましょう。』

と、自分で引うけて、出かけましたが、その時今一人、足の速ひ終りて其手を懷紙にて拭き、又右の手を持直し喫口を向ふへなし、元の處へ還すのです、薄茶でも矢張茶器拜見を請ひ、一覽了りて上客茶を辭し、かくて亭主は仕舞にかゝり勝手に入り、再び出て總禮して客と閑話を試み、客は少時して挨拶して退出するのです。

生花

活花の趣味　花木の美を瓶頭に寫して自然の趣を林上に現ぜしむるのは、活花の妙技であります、されば室内裝飾として是程優美なものはありません、隨て女子の纖手に適すべき恰好の技術であります、若しも自然の儘なる花を手當り次第に折て來て、何等の趣向をも加へずに花瓶の中に投込んだ時は、花の體裁をなさずして折角の美を失つて了ます、然るに二三枝乃至五六枝の百合なり、或は菖蒲なりを截つて其の性質と趣情に考へて、相當の技工を加へ、體裁よく排置したならば、百合は百合らしく、菖蒲は菖蒲らしく見えて、一瓶の中に自ら山野の風物が浮び出で、生氣室内に溢れて吾も人も共に快感を覺えるのです、それに斯の道にたづさはると、一々花卉の性質を研究する必要があるので、爲めに植物學上の智識を增進するなど、仲々に趣味の多い業であります。

活花の流派　活花は中古より行はれたもので、栂尾

い武士が居て、これも『私が取つてまいりましよう。』と、負けない氣に成つて駈け出しました。

けれども王子わ、例の法で獅子になり、またある時わ熊になり、それから虻になりして飛びますから、その速い事、とても人間の足でわかないません。

それでこの武士が、漸く半分途まで來た時分に、王子わもう劍を持つて、さつさとお歸りに

明恵上人へ千利久等を祖とし、降ては松月堂釋英尊を中興の祖としてあります、之にも亦た古流、石州流、遠州流、青山流、宏道流、池坊流など種々の流派があります。

活花の材料　活花の材料として用ゆる花卉は等しく花とは申すものゝ、花ばかりではありません、是には花物、葉物、樹物、實物の四種があります、花物とは梅、桃、薔薇、菖蒲、菊、桔梗、水仙等四季折々の花木又は草花を云ひ、葉物とは葉蘭、車前、辨慶草の類を云ひ、樹物とは松、磯馴、黄楊、伽羅、柳等の類を云ひ、實物とは柘榴、枇杷、梅もどき等の類を云ふのです。

活花の道具　花を活けるに入用な道具は、第一燕尾

力、第二如露、第三鋸、第四小刀、第五鉈刀などであります、草類を切るには燕尾刀と如露とがあれば十分間に合ひますが、少しく堅い木になると小刀が要ります、又た強い太い木になると、鉈刀も要ります。

活方の法則　花を挿すには一定の法則があります、先づ天地人の三枝を基本とし、最も重きを之に置いて人の枝は天地二枝の間に進み出る樣に挿すのです、尚

あります、天地人を一に眞行草と云ひ、又古流では此三枝の事を體用留といひ、新流では心戴相と名付ます、そこで此活け方は天の枝は立昇らせて挿し、地の枝は水除にいけ、

なりましたから、武士わ肝を潰して居りましたが、やがて王子わ、咽喉が渇いてたまらないので、川え水を飲みに入らしつた所を、武士わそつと行つてだしぬけに、王子をその川え突落し、取つて來た劍を横奪して、自分が行つて來た樣な顏をして、これを王樣の前え出しました。

話變つて王子わ、兼て阿父樣からの御注意で、海や川の側えわ行くなと云う事ですから、始終氣をつけて居らつしやいましたが、今日わ如何にも水が飲み度いので、うつかり川えお寄りになると、忽ち惡い奴の爲めに、川の中え落されておしまいです。

すると、忽ち波にまき込まれて、海の方え持つて行かれましたが、やがて氣がついて見ましたら、もう人魚の所え來て居らつしやいました。

尤も人魚わ、決して王子を食

花形の上からいふと、眞の花は立ちたる如く、行の花は歩み行く如く、草の花は馳せる如き形容に生けるのです、天地人三本に止めるのは最も單簡なものですが、更に此上に前添、後添を加へて五本とし、若くは日月星辰の四枝を增して七本となし、或は更に枝數を增して九本、十一本、十三本などの活方もあります、但し枝の數は必ず奇數に生けるのです。

枝の稱呼　此等の枝は配置の上から見て、夫々名前が付けてあります、即ち天の枝を眞、地の枝を根、人の枝を流と云ひます、又之に日月星辰を加へる時は、前添、後添、肩、胴といひ、若し更に胴肩各々、二本づゝとなす時は、一を眞下と云ひます。

花を挿す手順　すべて花を生けるには先づ天地人（眞、根、流）の三枝を定め、枝振を撓め直し、或は忌嫌ひの花枝を切取り、大概形容を拵へて置いて、花瓶に水を六七分入れ、次に花配りの留木を入れ、最初眞の枝を挿み、次に流の枝、次に根と生けるのです、又七本の場合なれば、先づ眞を立て、次に前添、次に後添、次に胴、肩、流、最後に根と挿すこと一定の順序にて、すべて何本の場合でも眞に始り根に終るのが規則です、而して多くの枝を集めて配置しても、根は一本の如く見せるのが法であります。

枝の撓め方　天の枝は平假名の（く）の字形に撓めるのです、若し强く張つて据りが惡ければ根本を割ります、次に地の枝は（へ）の字形に撓めるのです、又た人は横たへて撓めます、すべて撓めるには草木共に撓めよ

おうとわせず、大切にして側に止めて置くのですが、王子わ元より迷惑でたまりません。何うかして元の通り、陸え歸える工夫わあるまいかと、待つて居らつしやる折から、ある日遠くでバイオリンの音が聞えます。

王子わはやくもお聞きに成つて、

『さてわあの姫様が、私の頼んでおいた通り、海岸え來てバイオリンを彈いて居るのか。ようと思ふ處を兩手で握り、或は指頭で撮んで柔かに徐徐と撓めるのです、強く力を入れると折れる虞があります。

忌嫌ひの花枝 活花には種々の忌嫌ひがあります、○大輪の花を低く入れるのを嫌ひます○水仙など花ある物を葉ばかり生けるのを嫌ひます○葉の有る物を花計り生けるのを忌みます○縱横に丈を比べるのを嫌ひます○左右同じ所より出でゝ引張つた樣に見えるを嫌ひます○見切十文字を禁じます○花葉共に鏡の如く正面に向くを忌みます○乘越を嫌ひます○葉先垂れて花器の緣に觸るも嫌ひます○花數を偶に使ふを忌みます○露落し葉あるを忌みます、此外尙種々あります。

花配りの留木 是は枝を動かさず、花の形を潰さぬし。それなら此方も斯うしてわ居られない。』

と、まづ人魚に向いまして、

『今日わ何所かでバイオリンの音が聞えるが、こんなに海の底に居てわ、思う樣に聞けないから、少し上の方え出してくれないか。』

と云いますと、人魚もうなづきまして、まづ王子を腋に抱え、海の上の方まで浮き上りました。

王子わ〴〵めたと思いながら、爲めに必要なものです、留木の材は木槿、桃、萩など枝を用ひます、婚禮の時挿ける花又は風當りの強い所では根の留りを固くする爲め細竹で抑へます、又漆器、陶器の花瓶なれば留木の小口へ紙切を挾んで入れます、留木の形は從來のY字に似たゾの如く致しましたが、近來は簡便な方法を考へて、二本の溝を掘つた木の留を入れることゝなりました。

草木水揚法 花の眺めを長く保たさうとなれば、其花をして水を揚げしむる方法を講じねばなりません、其法は各植物によつて異ひますから、左に其大略を擧げませう○梅、李、杏等は枝の截口を火にて焦し泥を塗つて挿すと能く水を揚げます○海棠花は瓶の中へ薄荷の葉のしぼり汁を入れて生けるのです○梨、林檎の

わざと顔をしかめて、
『まだ聞えない〳〵。』
と云いますと、人魚わ氣を揉んで、
『これでも聞えないか、これでもまだか……』
と、段々王子をさし上げて、しまいにわその足が、水を離れる位にしました。
その時王子わ、はやくも體を變わしたと思うと、もう一匹の虻に成つて、ブーンと云いながら飛んで逃げ、直ぐにお姫様の側え來て、久し振で會いますと、お姫様もその無事を喜びましたが、
『それにしても、はやく御殿え來て下ださらないと、私の厭な奴のお嫁に成らなけりやなりません。』
『厭な奴とわ誰の事です。』
『貴君を川え突落して、自分で劍を持つて來た樣な顔をした、

花は大根のしぼり汁を瓶の水に和せて挿します○桃の花は瓶の中へ陽起石の粉を少し入れて挿します○藤の花は切口の所へ酒を塗り、燒火にて炙り、後に冷水にて生けます○牡丹、芍藥、萩の三種は湯にて生けます○燕子花は節を少し割つて挿けます○芙蓉、菊は花器の中に沸え湯を入れ、花を挿して口を塞ぎ、後に冷水に移すのです○朝顔は微温湯で生けます○桔梗、紫苑の類は根の切口へ煙草の膠脂を塗つて生けるのです○山茶、茶梅、水仙の三種は鹽水にて挿すのです。

花の貯養ひ方　草木の花は何によらず早朝に切つたのは勢よくて、長く保ちますが、晝切つたのは凋み易いのです、又花の蕾の開かぬ樣に貯へるには、其蕾を蜘蛛の巣で卷いて置くと宜しい、斯うすると數日を經ても開くことがありません、それから花を養ふ水は雨水が一番よく、次が河水で、井戸の水も早旦に汲んだのは、元氣を助けます、但し鹹水は花を損じますから用ひてはなりません、又水草類には池水が一番適します。

花器の種類　花器は本來花瓶が元ですが、釣花生、竹花生、籠花生、船形、馬盥、薄端、鶴首、一輪生など色々の種類と形とがあり、其用方も夫々異つて居ります、例へば釣花生には朝顔、萩、棣棠、柳の如きものを挿し、釣舟は藤花、葛、烏瓜などの蔓物又は柳な

あの足の速い武士ですが、阿父様わ理由を御存じないものですから、その御褒美に私を嫁にやると仰有るんです。何うかはやく來て下ださい。』

と云います。

そこで王子わ、急いで御殿え來て王様に會い、眞の劍を取つて來た者わ、私で御座いますと云いましたが、まだ容易に御信じになりません。

どの垂れる物を生けます、又花瓶の模様に花を描いたものには、花物を挿してはならぬ規則です。

花器と花臺の關係　花器を載せる花臺にも、亦た卓形、文臺形、卷臺、薄板、井戸輪などの種類があります、花器と花臺の取合せは、圓い花器には角の花臺を選び、脚長の花器には脚の短い花臺を用ひ、馬盥若くは釣瓶には、足つきの臺を用ひます、又た釣瓶には井戸輪を用ひるなど、ちやんと双方の關係が極つて居ります。

書畫

執筆法　書畫を學ぶには、先づ第一に執筆法を知らねばなりません。執筆とは、筆の持ち方なので、これ

その時お姫様わ證人になつて、

『あの劍を取りに來た人わ、たしか獅子と熊と虵になる、不思議な法の出來る人でした。ですからその人にもそれが出來るか、一つやらして御覽下ださい。』

と、こう云いましたので、僞物わ忽ち窮して、とう〳〵化の皮を剝がれ、御殿から逃げ出してしまいましたが、それに引かえ

に雙鉤（又は鐙鐙法）と單鉤との二ッあります。

雙鉤　とは、拇指と食指と中指との腹で筆を持ち、筆の内部を無名指の背の方で抑へ、これに小指を輕く添へるのであります。

單鉤　とは、拇指と食指との腹で筆を持ち、中指の背の方で筆の内部から抑へ、これに無名指と小指とを添へるのです。これは、小字を書く時に用ひるのですが、大抵は雙鉤法によります。また雙鉤、單鉤ともに、懸腕、提腕、枕腕の三種に分れます。

懸腕　とは、腕を自由自在に働かせるため、肘を机の上から離して、高くかゞけて居るのを言ひます。大字を書く時に便利なのです。

提腕　は中字を書く時の法で、肘を机上において書

て王子わ、首尾よくお姫様のお婿様になつて、二人睦まじく手を取つて、遙々阿父様の所へお歸りになりました。

▲綠の小鳥

むかしある王様の所に、一人のお姫様がお出來になりました。生れ付き大層美しい方でしたから、誰一人褒めない者も無い位でしたが、ある日人相見の婆さんが、それとなくお姫様のお顔を見て、

『恐ながらこのお方わ、十二のお年に大變な災難におあい遊ばします。』

と、斯う申上げましたので、王様わ大そうお驚きになり、急に大工に云いつけて、窓の無い高い塔をこしらえ、その一番上の室に、乳母を一人つけてお姫様を入れ、少しも外へ出さない様にしておきました。

くのであります。

枕腕　は小字を書く時の法で、筆を持つた腕を、左の掌の上に輕く載せて書くのであります。次に

運筆法　は筆の運び方で、これが巧みに出來さへすれば、書でも畫でも、上手に書けるのです。

永字八法　といッて、昔から「永」の字が申し分なく書けるやうになれば、その他の文字も、またこれに倣うて書くことが出來る、と說いてあります。即ち左の圖に示してある通り、第一の側は、筆を平らにしないで側て、第二の勒では、筆を臥さずに、中高く兩頭下りに書いて、筆の心でこれを壓し、第三の努では、筆を眞直にせずと左の方へ偃せて下し、第四の趯では、筆の鋒を收め、その勢を借りて躍らせ、第五の策では、

は、斧で物を斫るやうに筆を斫り、第六の掠では、筆を拂ひ掠めて、その鋒を迅くし、第七の啄では、鳥が物を啄むやうに、筆を立てゝ早く下に罨ひ、第八の磔では、徐かならず急ならず、戰き行きて卷かんとしてまた駐まり、筆を離すのであります。定つた法則は、上の通りでありますけれども、

熟練　といふことが、最も大切であります。幾度も書いて見て、これに慣れなければ、始めから上手に書けるものではありません。次には

繪を學ぶ順序　を申し上げませう。はじめには、な

氣の毒なのわお姫様で、罪も無いのに囚人同様、暗い室の中に押込められて、少しも日の目を見せられませんでしたが、やがて十二の年にお成りでした。

すると或日お姫様わ、御飯のお菜にあつた魚の骨を、しきりに玩具にして居らつしやいましたが、やがて壁え樂書をなさると、土がボロ〳〵落ちて、いつか小さな窓が出來ました。

所え、何所から飛んで來ましたか、一羽の綠色の小鳥が、その窓から入つたと思うと、忽ち可愛らしい男の子になつて、お姫様と一所に遊びましたが、その仲の好い事わ、まるで前からのお友達の様です。

而もこのお友達わ、それから毎日の様に來てわ、晩までお姫様と遊んで歸りますので、乳母も不思議に思つて居りました

るべく簡單な物躰の形狀を描いて、直線、曲線、圓などの書き方を練習し、漸く進んで草木や動物を描き、然る後に人物の描き方を學ぶのが、普通の順序なのであります。而して、その中で

臨畫　といふのは、何か繪の手本を見て、それに似せるやうに描くのです。また

寫生畫　といふのは、何でも自分が見た物躰の形狀や、野山の景色などを、寫し出すのであります。それですから臨畫は初歩で、寫生畫の方がむつかしいのです、併しどんなものを見ても、直ちに寫生が出來る位にならなければ、繪を學んだ甲斐がありません。また

考案畫　と言つて、自分の考へたことや、胸に浮んだことを、繪に書きあらはすことがあります。これ

も非常に必要なことですから、ときゞ試みるのが宜しい、そらから、繪を書くのに必要な

用具　は、筆、繪具、調色板、木炭、刷毛、筆洗などであります、中にも筆は、細い線を描くのに用ひるものや、彩色筆、隈取筆などを用意して、一度使つた後には、必ずこれを叮嚀に洗つておかねばなりません。

濃淡法　のことは、隈取りとも申します。色の濃淡が出來る理由は、第一光線の受け工合によるのです。即ち光線を強く受ける部分は濃く、弱いところは淡いのであります、第二物體の遠近によつて、遠い所のも

が、その中に十二の年も過ぎましたから、もう用心するにも及ぶまいと、お姫様わ高い塔から下りて、王様の御殿へお歸りになりましたが、そうなるとあの小鳥わ、もう遊びに來ませんので、お姫様わ折角自由な躰になりながら、却つてお友達の無いのを淋しがつて、毎日悲しそうな顔をして、少しも笑わなくなつておしまいです。

のは淡く、近くにあるものは濃く見せるのです。第三色彩の濃淡によつて、白や黄などは淡く見え、青や紫などは濃くなるのであります。

平塗法　とは、同じほどの濃度の墨汁を、平均に塗る法です。これは筆に十分墨汁を含ませて、便利な所から塗つて行くので、もし一度で思ふやうに塗れなければ、乾いてから二度塗つても差支ありませんが、まだ乾かない中に、同じ所を二度塗つてはいけません。

ぼかし法　は、墨汁の筆と水の筆との二本を用ひて、はじめに墨汁を十分に引き、次に淡くしやうと思ふ部分だけを、水の筆で引き延ばすのです。この時には、水を含ませた筆の、水加減をよくするのが、最も肝要なことで、また最もむつかしいのです。

色の調合　色彩は、調合の如何によつて、さまざまのものが出來ます。例へば、赤と黄とを合すと樺色になり、赤と青とを合すと紫になり、青と黄とで綠になり、また綠と紫とを合すと橄欖色になるなど、それからそれへと、變つて行きます。併しこれは、バレットの上で、實際に調合して見なければ、よく分るものではありません。

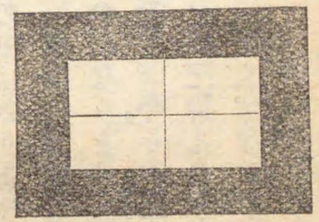
寫生の方法　寫生をするには、主として外へ出なければなりませんから、諸種の用具を準備するのが第一です。今その主なるものを申しますと、

三脚儿＝これは、寫生する時に腰を掛けるのですから、なるべく丈夫なのを選ぶべきです。

見取枠＝これは、寫生せんとする風景の、位置を

乳母わこれを見て、又心配でなりませんから、何でもあの綠の小鳥を、何所かえ行つて探して來なけりや成らないと、只一人森え行つて、方々探して見ましたが、さてあの小鳥わ見付かりません。

仕方が無いから歸ろうとしますと、向うから一人の男が馬を引いて來て、乳母の心配して居る譯を聞き、



さて、自分が描かうとする景色に對し、

繪の主題 を定めるのです。たとへば、神社なら神社、家屋なら家屋を主題として、その他の樹木や神社の敷石などは、繪の客となるのですから、なるべく主題を美しく見せるやうに心がけねばなりません。つまり客になるものは、主題を美しく見せる補助のやうな

定めるに必要なもので、ハガキ大の厚紙を、圖のやうに中央を切り抜き、十文字に糸を通して、周圍を黑く塗るのです。これを持つて寫さうとする景色を見れば、ハッキリと分ります。この外、筆や繪具やパレットが必要なのは、言ふ迄もありません。

『それなら私の御主人の所え來なさい。何か御爲めになる事があろう。』

と云いますので、一所について行つて居ましたら、立派な御殿の中え來ました。

見ると御殿でわ、十二人の美しい女の人が、今御飯を食べようとして居る所です。乳母わこれを見ますと、何しろ一日森の中をさがし廻つて、腹の減つてものです。次に注意すべきは、

大體の調子 をよく合せるやうにせねばなりません。目に見えるものを、悉く描き出さうとしても、到底描き盡せるものではありませんから、大體の調子に合せて、不必要なものは、なるべく省くのが宜しい。

距離 寫すものゝ高さの二倍以上、離れたところに居るのが、寫生の通則です。例へば高さ六尺の燈籠を寫すには、十二尺以上離れねばなりません。また晴天の時には、太陽の位置に氣を附けて、左右何れかの上部から、斜めに光線を受けるやうにしますと、明暗の

居る所ですから、もう我慢が出來なくなつて、いきなり側にあつた鍋に手をかけ、鍋ごとお汁を吸おうとしましたが、忽ち頰桁を火傷して、『あつゝ』と云つて顔をしかめましたので、十二人の美しい女は、皆腹を抱えて笑い出しました。

乳母わ心づいて、『なるほどこれわ可笑いに相違無い。こう云ふ所を御覽に入たら、屹度家の度がよくて、寫すのに都合がよろしい。太陽が物體の前面にあると、影が少なくて風致に乏しく、もしまた後にあると、寫すのに困難なのです。

彩色の順序　彩色を施すには、最初に寫さうとする景色中、一番明るい部分と暗い部分とを見分け、その他の處は、それから次第に少しづゝ度を和らげて描くのです。

繪の種類　畫には、日本畫、水彩畫、油繪、鉛筆畫、投影畫、透視畫など、さまざまありますが、いかなる繪にも、鉛筆畫が基礎になるのですから、よくこれを練習しなければなりません。また投影畫や透視畫も、應用する場合が多いものですから、一通りは心得ておくのが肝要です。

お姫様も、お笑いになる事が出來るだろう。』と、思うと直ぐ引かえして、いそいでお姫様を連れ出し、またこの御殿え來て、先刻の通りの事をしましたら、又十二人が笑い出しましたが、それと一所にお姫様も、思わずフッと吹き出しました。

すると不思議です。今まで行方の知れなかつた小鳥が、忽ち窓から飛込んで來て、お姫様の

英語

Alphabet　アルハベットと讀むのです。これは日本のイロハ四十八文字のやうなもので、英語を學ぶには、是非とも第一に知つておかねばなりません。即ち、a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z の二十六文字です。これをさまざまに綴り合はせて、一ッの言葉とするのであります。

Words　ウオーズを讀む、何か意味のある言葉であります。文章をつくるのは、これが原となつて、いかに複雜な思想でも、言ひあらはすことが出來るのです。

Noun　ナウン、名詞のことです。名詞には固有名

側え來ますと、お姫樣わさも嬉しそうに、その小鳥を手に据えながら、

『オ、久しく來なかつた事、何所を今まで飛んで居たの。さぞお腹が減つたでしようねエ。まアこれをおあがりなさい。』

と、云いながら匕を取つて、汁を一口飲ませました。

すると小鳥わ、身震して、直ぐ男の子になりましたから、お姫樣わ喜んで、御殿え一所に行こうとしますと、男の子わ手をふりはなして、

『いゝえ、一所にわ行けません。何を隱そう、私わ隣の國の王子だが、ある時罪を犯したので、しばらく小鳥にされて居たのだ。それで今日が七年目で、元の人間になれる所を、お前が餘計な汁を食ませたので、また七年間元の通り、小鳥に成つて居なけ

詞(Proper Noun)、普通名詞(Common Noun)、抽象名詞(Abstract Noun)などの別があります。固有名詞とは、或る特別なるものゝ名で、東京、ロンドン、家康、お花といふやうなのです、普通名詞とは、同じ種類のものには、どれにでも通用する名で、犬、人、書物、山、河などいふやうなものです。抽象名詞とは、物の性質、狀態などのやうに、すべて目に見えないことを名づける時に用ひるので、正直、愉快、親切などゝいふのが、即ちこれであります。また、名詞には單數(Singular)複數(Plural)といふことがあつて、一個を言ひ表はす塲合と、數個の時とを區別するやうになつてゐます。例へばGirlといへば、一人の女の子で單數ですが、Girlsといへば數人の女の子で、複數になります。

Pronoun プロナウン、代名詞のことです。文章を書くのに、同じ名詞をあまり深山使ふと、讀みにくいから、その代りに代名詞を用ひるのです。而して、これは、名詞の種類によつて、いろ〳〵異つた名があります。即ちI,you, he, him, she, her, they などは、人のことに用ひるのですから、これを人稱代名詞(Personal pronoun)と言ひ、this, that, these, thoseなどは、その前にある名詞を指して用ひるのですから、これを指示代名詞(Demonstrative pronoun)と言ひ、Who, what, which のやうに、疑問の時に用ひるのを、疑問代名詞(Interrogative pronoun)と言ひます。

Adjective アジエクチーヴ、形容詞といふので、名詞に或る意義を附け加へる時に用ひるのです。例へ

れば成らない。それを氣の毒だと思うなら、お前もこれから七年間、この御殿の椽側で、少しも動かずに待つて居ておくれ、そうしたら又歸つて來て、二人わ一生仲好くしよう。』

と、云うかと思うと男の子わ、又綠の小鳥に成つて、何所えか飛んで行つてしまいました。

お姫樣わ悲しくて溜りませんが、何しろ御自分が餘計な事をしたので、あの人が又小鳥に成つたのですから、これわ自分も辛抱して、又會えるまで待たなければ成らないと、今云われた通り、御自分わこの家の椽側で、これから向七年の間、身動きもせずお待になる事になりました。

それを聞くと御殿からわ、『そんな馬鹿な眞似をするにわ及ばん、はやく歸つて來るがよ

ば、A fine ship went out to sea.

It is a black dog.

の fine は ship を形容し、Black は dog を形容してゐるのであります。

Article アーチクル、冠詞と言ひます。名詞の前につける詞で、不定冠詞（Indefinite Article）と定冠詞（Definite Article）との二ッあります。a, an が不定冠詞で、The は定冠詞です。また冠詞は、形容詞の一種であります。

Verb ヴアーブ、動詞のことです。人或は事物について、何事かを言ひ表はすのに用ひる詞で、これを自動詞（Intransitive verb）、他動詞（Transitive verb）、助動詞（Auxiliary verb）の三ッに大別します。Ohawa laughed（お花が笑ッた）といふやうに、『笑ふ』といふ動詞が、お花の外に關係するものがない時には、これを自動詞といふのですが、Ohana bought a ribbon（お花がリボンを買つた）といふ時の動詞『買つた』は、何を買つたのかと言へば、リボンを買つたのですから、お花の外のものにまでも及んでゐます。それでこれを他動詞と言ひます。また助動詞は、will, may, would, should などを言ひますので、時間の關係や、他の動詞の意味をかへるのを助けるに用ひます。

Adverb アドヴアーブ、副詞のことです。これは形容詞が名詞を形容するやうに、動詞、形容詞、または他の副詞を限定するものであります。例へば、very fine apple（大そうおいしい林檎）といふ場合に、very

い。』

と、王様のお迎いが來ましたが、お姫様わ御聞入無く、とう〳〵此所で七年の間、雨の降る日も、風の吹く日も、少しも動かずに待つて居らつしやいました。

するとその七年目に、立派な王子が目の前に現われました。お姫様わ嬉しさに取り付こうとすると、王子わすげなく突きはなし、

『あゝ、汚い〳〵。お前の様な汚い女に、私わ用わ無いのだから、もう物も云つてくれるな。』

と、其儘又何所えか行つてしまいました。

お姫様わこの時、初めて御自分の躰に氣が付いて御覽になると、何しろ七年の間、湯にも入らず、髪も解かず、日に照らされ、雨に打たれて居らしつたのですから、その汚い事わ、まるといふ副詞は、fine といふ形容詞の意味を強めて居るのです。また She will soon arrive.（彼の女は、すぐに着くでせう）、She did her work slowly, but surely.（彼の女は、徐ろに併し確かにその仕事をしました）といふ時に、soonだの、slowlyだの、surelyだのは、皆動詞の意味を限定して居るのであります。而して副詞には、單純副詞（Simple Adverb）、疑問副詞（Interrogative Adverb）、關係副詞（Relative Adverb）の三種があります。

Preposition　プレポジション、前置詞といひます。これは名詞や代名詞の前に置かれて、他の語に對するいろ〳〵の關係を示すのであります。I place my hand on the table.（私は、私の手をテーブルの上に置く）といふ場合に、onは前置詞で、テーブルの上にといふことを示して居るのです。もしonがなかつたならば、テーブルの上なのか下なのか、或は中なのか分りますまい。かやうな働きをする前置詞のおもなるものは、on, in, to, into, at, from, for, of, up, underなどであります。

Conjunction　コンジャンクション、接續詞のことです。これは言葉と言葉とをつなぎ合せ、または章句と章句とをつなぎ合せるのに用ひるので、同位接續詞（Co-ordinative Conjunction）と從位接續詞（Sub-ordinative Conjunction）との二通りあります。同位接續詞とは、互に獨立せる事柄をつらねる時に用ひるので、Hanako and Mineko といふ場合のandだの、She is sad, but hopefulといふ場合のbutだのは、即ちそれでありま

で人間とわ思はれない位です。

『あゝ、何と云う態だろう。折角王子に會いながら、この汚い姿でわ、愛想を盡かされるのも無理わ無い。』

と、果わ其場え泣き伏しておしまいになると、例の十二人の美しい女わ、この時初めて迎いに來て、

『何も御心配にわ及びません。私達がついて居ますから、きつと善い樣にしてあげます。』

と、これから十二人が、この一人のお姫樣を、よつてたかつて介抱して、髪を結うやら、爪を切るやら、湯を使わせるやら、衣服を着更えさせるやら、いろ〳〵にして磨きましたら、元々美しいお姫樣が、今度わ前に十倍も增した、奇麗なお姫樣にお成りでした。

すると十二人わ、またこのお

す。また從位接續詞とは、獨立して完き意味をなさずに、他の章句に附屬して意味を成すものを、つなぎ合す時に用ひるのです。例へば、She told us that rain had fallen. (彼の女はわれ〳〵に、雨が降つたことを告げた)といふ場合に、that は從位接續詞になつて居るのであります。

Interjection インターゼクション、間投詞といふのです。日本語の『オ、』とか『あゝ』とかのやうに、何か物に感じて發する時の言葉です。今その最も普通なものを擧げると、次のやうです。

Hurra! 喜びをあらはす。　Ha! Ha! 面白さをあらはす。

Oh! Ah! Alas! 悲しみをあらはす。

Lo! Hush! 注意をあらはす。　Ho! 呼び掛けをあらはす。

Punctuation パンクチュエーション、句點法のことです。ながい文章にはところ〴〵に、句點をつけて、讀みやすく、且つ意味が分りやすいやうにするのです。ペリオド(.)、コンマ(,)、インタロゲーションマーク(?)、エクスクラーメーションマーク(!)などは、普通に用ひるものであります。

Phrase フレーズ、單句と譯します。これは幾つかの言葉の結びついて、意味をあらはしたものですが、併しまだ完全な意味にはならないものを言ふのです。例へば、On the river. (河の上に)、A bird in the hand. (手に鳥)といふやうなものです。ところが、これに

姫様をつれて、先刻逃げた王子の居る、御城の前え連れて行つて、其所に御殿を建て、住わせ、毎朝高い所え立たせておきますと、王子わはやくもそれと氣が付きまして、又元の心になり、何でも御嫁さんに欲しいと云うので、まづ阿母様を以て話し込みました。

阿母様わ、可愛い王子の望むお姫様ですから、何でも嫁に成つて貰おうと云うので、まず一番最初にわ、金の指輪をお土産に持つて、わざ〳〵頼みに行きましたが、お姫様わその指輪を、側に居た鷲鳥に投げてやつて、お嫁に行こうと云いません。

次にわダイヤモンドの頸輪をもつて行つて、これなら云う事を聞くだろうと思いますと、今度わ犬の頸輪にしてやつて、矢張り王子の頼みを聞きません。

動詞や助動詞を附け加へて、完き意味のものにしますと、始めて文章となるのであります。

Clause クローズ、成句と譯します。これは文章の一部分でありながら、而も完全なる意味をあらはすものを言ふのであります。

Sentence センテンス、文章のことであります。幾つかの言葉が集つて、十分な意味をあらはす時に、これを文章と言ひます。而して文章には、必ず主語(Subject)と説明語(Predicate)とが、なければなりません。例へば"He is writing."は一ッの文章で、He は主語、is writing は説明語であります。また、"Ohana struck mineko."といふ文章で、Ohana は主語、struck Minekoは説明語なのです。それからまた文章には、單文(Simple Sentence)、合成文(Complex Sentence)、複合文(Compound Sentence)の三種類があります。これ等の委しいことは、追々に學んで、自由に英語の會話や文章が出來るやうに、御勉強なさいよ。

農業

農業 人のする仕事には色々有りますが、其中で穀物野菜を作り、或は牛馬を飼ひ、蠶を育て又は山林を仕立てる仕事を農業と云ひます、農業は衣食住の原料を作り出すもの故、最も大切な職業です、農業に從事する人は常に田圃や山林に出で、新鮮なる空氣を呼吸しますから、從つて身體も健康に成り、長生することも出來るのです、されば農家に生れた少女諸君は、農

すると王子わ心配して、何うやら御病氣に成つた樣子ですから、今度わお姫樣の方で云い出しました。

『それほど私が嫁に欲しければ、何のお土産も入りませんから、その代りお婿樣が、死人の樣に棺桶に入つて、私をお迎いに入らつしやい。そうしたら參りましよう。』

と、斯う云う事になりましたが、

業の事に力を盡し、國の富を作り身の幸福を得なければなりませんが、夫れには先づ充分に農業の智識を磨くが第一です。

作物　稻麥大根桑茶豆の類は、何れも農家で作る植物ですから、之れを名付けて作物と稱します、又其作物を育て養ふことを栽培と云ひます、之れ等の作物は元野生の植物で有りましたが、私達の祖先が種々苦心して良種としたものです、新くの如く人の力で出來たもの故、充分なる手當をしなければ、再び質の惡い野生植物の如きものと成つて、遂には何等の役にも立た

王子わそれでも否とわ云わず、やがて立派な棺桶を作らせ、自分わ死人の樣に其中に入つて、わざ〳〵お姫樣を迎いに入らつしやいました。

その時お姫樣わ、玄關まで出て入らしつて、その棺桶に向い

『あの不實な王子わ……』

と聞きますと、棺桶の中から聲がして、

『罰が當つて死にました。』

なくなるでせう。

種子　作物を栽培するに就いて、第一に吟味しなければならぬのは種子であります、如何に熱心に手入をしても肝腎の種子が惡ければ、決して多くの收穫をすることは出來ないのです、で種子は成るべく大粒で、重いのが宜しく、小粒にして輕きものは惡いのです、なぜ重くて大粒なのが良いかと云ふと、胚乳と云ふ養分が多量に含まれて居ますから、初めて芽を出したばかりの幼植物は、之れに依つて安全に成長することが出來るからで御座います。

選種　既に種子の良否が解れば、輕くて小さのを除き、重くて大なる種子を選ぶことが必要で有ります、選種の方法は種々ありますが、稻や麥の類では、鹽水

と云いますと、

『それでわ死骸を引取りましよう。』

と、走りよつて棺の蓋をあけ、中の王子の手を取つて、さも懐しそうに引き起し、こゝに初めてお二人わ、御夫婦の約束をなさいました。

▲熊　娘

むかしシベリヤに、一人の百姓が、一人の娘と一所に住んで

百匁の鹽を溶かし、其中へ籾を入れて搔き廻すのです、すると輕くて小さな種子は直に浮びますし、重くて大きなのは、底に沈んで居ます、此の沈んだ種子を取つてよく鹽氣を去り、夫れから播くが宜しい。

浸種　稻籾の類は、播く前に一度水に浸さなければなりません、之れを浸種と云ひます、浸種をする必要は、種子に充分の水を含ませて、成るべく早く芽を

居りました。

その娘わ、至つて利口な、孝行者でしたが、只一つの瑕わ、兎角多辯で、云わなくてもよい事まで、近所えふれまわす事でした。

たとえば父親が、山え行つて罠を掛けて來て、明日わ何か取れると云つて、樂しみにして居りますと、娘わ直ぐにその事を、近所の人に喋つてしまうも

出させる爲めであります、若し早く芽を出さなければ、雀の類が來て、悉く種子を食ひ去る恐が御座います、さて浸種の日數は普通五日位が丁度宜しい、あまり長く浸して置く時は、折角の種子が遂に腐敗して仕舞ふ樣なことも有るからです。

播種　種子を土中に播くことを播種と云ひます、播種の仕方には色々有りまして、撒播、條播、點播などです、即ち撒播と申しますのは、種子を一面に散し播きにする事で、又條播とは畦を作りて、其中に連接して播くこと、次ぎに點播と云ふのは畦若くは條に沿つ

のですから、折角好い獲物が掛つても、人に取られてしまいます。

こんな風で、家わ貧乏する計りですから、ある時父親わ、娘に一人留守をさせて、遠くの町の方え出稼に行きました。

すると、その留守の事です。ある晩娘わ、獨りで糸を繰つて居りますと、戸をトン〳〵と叩く者がありますから、誰かと思つて明けて見ましたら、大きな一匹の熊でした。

娘わ驚いて逃げようとすると、熊は思いの外やさしく、『いゝえ恐い事わありません。私わ今獵師に撃たれて、怪我をして居るのですが、ぐず〳〵すると捕まりますから、何卒助けて下ださい。』と云います。

娘わ聞いて氣の毒に思い、

て一粒或は數粒宛、點々に播く法であります。

苗床 茄だの甘藷だのと云ふ、畑に作る作物の苗を仕立てる所を苗床と云ひます、苗床は專ら幼植物を保護する爲に作るもので有りまして、常に日當のよき場所を撰み、成るべく良き苗を得る樣に心掛けねばなりません、又苗床には藁、馬糞、枯葉の類を入れて温度を高め、以て作物の生育を速かにするものも有りますが、之れは温床と云ふものです。

移種 苗床で仕立てた苗を、本當の畑に移し植えることを移植と云ひます、移植に就いて注意すべきことは、根を傷めない樣に、竹の籠の類で、土と一所に堀り取り、其まゝ植えるのですが、作物の根が土地とよく接する樣にし、其上部を輕く壓して置くが宜しい。

肥料 作物の養ひとなるもので、土中に含まれて居る養分の不足を補ふ爲のもので有ります、で肥料を適度に施す時は、作物の根もよく蔓り、莖や葉も充分に生育致しますから、從つて收穫も多く成るのです、肥料は適度に施さなければ何の功も有りません、只多量に施せば、莖や葉が柔かになつて、收穫も少くなります。

作物と日光 日光の充分に當らない暗所に生ずる植物は、莖や葉の色が白く、細長くなりて倒れ易く、花も咲かず實も又結びません、で作物には充分日光を當てゝ丈夫に育てなければなりません、床の下に芽を出した柿や、藪蔭に生じた木の弱々しいのは、日光に當たらない爲に、葉の同化作用が行はれませんから、斯

『それでわ私が見てあげよう。』

と、その熊の足を見ましたら、なるほど傷がありますから、まず藥をつけてやり、それから奥の小屋に通して、しばらく隱まつてやりました。尤も流石のお多辯も、人に話せばこの熊が、直ぐ捕ると思うものですから、この事ばかりわ誰にも云わず、感心によく世話をしてやつたのです。

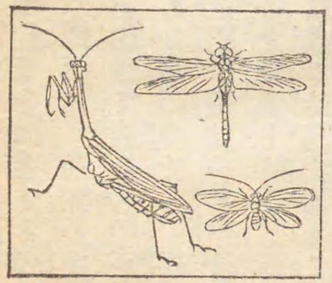
その中熊わ傷がなおりますと、娘にあつく禮を云い、さてこの恩返しに、好い物を上げ度いと思いますから、私と一所に入らつしやいと云います。

娘わ一人で淋しい所ですから、直ぐその熊の脊に乘つて、何所え行くのかと思いますと、氷の上や、雪の中を、遠くの〳〵方え行きましたが、やがて大きく弱々しい有樣を呈して居るのです。

雜草　田や畑に繁茂して、作物の生育を妨げる草の類を雜草と云ひます、雜草は作物の如くに人の手に依らず、自然に發生するもの故、性質が甚だ強く、忽ちにして繁茂し、作物の養分を奪ひ、又日光を遮ぎるもの故、如何しても作物は充分に生長することが出來なく成ります、故に之れ等の難草をば、未だ其生育しない内に除かなければなりません。

害蟲　作物には雜草の他に、種々の蟲が生じて、葉莖又は根等を食害致します、之れ等の蟲を稱して害蟲と云ひ、其種類は頗る多くあります、例へば金龜子、葉捲蟲の類は專ら葉を食ひ、螟蟲天牛等は莖又は幹を害し、夜盜蟲キリウジガガンボ等は根部を食害致します、總じて害蟲類は其繁殖が著しく、被害の度も激しいもの故、力めて之れを驅除しなければ、遂には其收穫を皆無に歸せしめる樣なことも有ります。

益蟲　昆蟲類は作物を害するものばかりではありません、中には只に作物を害しないばかりか、却つて其害蟲を捕食して、間接に人間の手助をして呉れるものもあります、即ち蜻蛉、蟷螂、青蜻蛉、瓢蟲の類は、皆有益な昆蟲故、一方害蟲を驅除すると同時に、又之れ等



な山の下に、象よりも大きな獸の、じつと立つて居る所え來ました。

すると熊わ娘をおろして、この大きな獸をさしながら、

『あれわマンモースと云つて、前の世界の獸ですから、今わ生きてるのでわありません。それであの牙わ、一本五百圓にも賣れると云う、結構なものですから、これを持つてお歸りなさい。』

と云います。

けれども獸について居るのが、何うしたら取れるのだろうと思つて居ますと、熊わやがて自分の爪で、氷の中を堀りはじめましたが、間も無くあの通りの牙が、何本とも無く出て來ました。

熊わこれを堀り出すと、娘と一所に脊に負つて、又その家まンドットなどは卵と肉とを兼ねて採ることが出來ます。

家畜 牛馬豚の類を云ひ、之れ又農家の副業として種々の利益が多く有ります、即ち先づ農耕上に使役し、肉、乳、毛、皮等を採り、又は肥料を得る等です、我國では馬と牛とを最も多く飼養致します、昔しから牛で名高いのは但馬、馬は南部のが宜しい、外國では古くから家畜飼養の事が盛でありましたから、今日では日本の牛馬よりも、遙かに良質のものが出來たのです。

養蠶 生糸は日本の名產で、年々外國へ向つて輸出する額は頗る多く御座いますが、此の生糸を獲るには、先づ蠶を飼はなければならず、蠶を飼はんと思へば、

の益蟲を保護するのは、最も肝要な事です。

保護鳥 鳥類の中にも又專ら害蟲を捕食して、農家を助けて居るものが澤山あります、で法律で保護してある鳥の中でも、燕、小雀、日雀、四十雀、五十雀、杜鵑の類は一年中全く捕へることが出來ません、之れ等を禁鳥と呼び、雉子、山鳥、雲雀、鵐、鳩、鷸の類は或る時期丈捕ることが出來ません、之れをば保護鳥と云ひます。

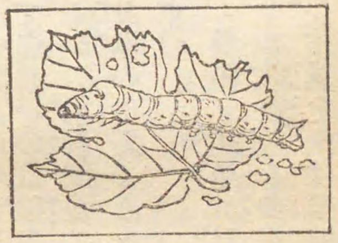
鷄の飼育 農家では種々の作物を栽培する傍に、雞を飼育して滋養に富める卵と肉とを取り、以て食料とします、雞には種類が極めて多くありますが、レグホーン、アンダルシヤンは卵を採るによろしく、シヤモ、ブラマの類は肉が宜しく、又コーチン、ワイア

で送りましたが、

『これから又一年經つて、その牙が皆賣れた時分にわ、又取りに行きましよう。然し私が案内した事わ、決して誰にも云つてわいけませんよ。若し人に話すと、折角の德が無くなりますから。』

と堅く云いおいて歸りました。

二三日經つと、父親が歸つて來ましたから、娘わ取つて來た



其食料たる桑が必要です、桑は其芽の出し方の遲速で、早生中生晩生などに區別され、又其中には夥しい品種が有ります、就中市平、節曲、赤木、鶴田、高助、鼠返などは著しいものです。

蠶の掃立　春になつて桑の芽の萠す頃になれば、種紙を蠶室に入れて溫めて置くと、やがて忽ち卵の色が青味を帶び、夫れより二三日經れば、蠶が發生致します、で其悉く出揃ふのを待つて紙の上に掃き立て、紙のまゝ產座に移して細く刻んだ桑を與へるのです。

蜜蜂　蜂類中には害蟲の體内に寄生して宿主を殺

マンモースの牙を、皆出して見せますと、父親わ驚いて、

『全體こんな結構な物を、お前わ何うして持つて居るのだ。』と聞きましたが、娘わ熊に堅く云われて居りますから、まだ眞實の事わ云いません。

『これわ、ある晩旅の人が怪我をして困つて居るから、氣の毒に思つて、家で泊めて介抱してあげたらば、そのお禮にくれた

し、或は花粉の交媒をなすなど、農家に利する所が多くありますが、殊に蜜蜂は蜜と蠟とを採ることが出來るので、之れを農家に飼へば非常の利益が有ります、養蜂をなすには先づ蜂の巢を造るべき巢箱が必要です、で巢箱の中へ王蜂と共に蜜蜂の一團體を入れて置く時は、職蜂は臘を分泌して巢を作り、其中に蜜を貯へます、冬期には蜂が寒氣の爲に死ぬことが有ります、から、巢箱を圍ひ、又蜂の食物が欠乏すれば、砂糖水を作つて與へるがよろしい。

養鯉　水の便利よき地方の農家では、耕作の傍に鯉を飼ふのも利益ある事業です、鯉は川魚の中では、最も美味なものですから、從つて其價も高くありますが、農家では夏の中に稻田に放養することが出來て頗

のです。』

と云いますと、父親わほんとにして、

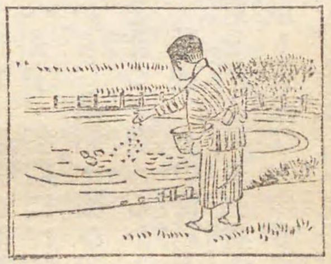
『それわ善い事をした、然しこの儘でわ役に立たないから、町え持つて行つて賣つて來よう。』

と、それを持つて賣りに行き、代りに澤山の金を持つて、大喜びで歸つて來ました。

今まで貧乏であつた百姓が、このマンモースの牙のおかげで、急に大金持になりましたが、その中に丁度一年經ちました。

一年經つと又熊が、誘いに來る約束ですから、若し父親の居る所え、知らずに來るといけないと云うので、娘わ一人家を出て、野原の所まで來て待つて居りました。

所が、熊わまだ來ませんのに、父親がかえつて追つかけて來て、



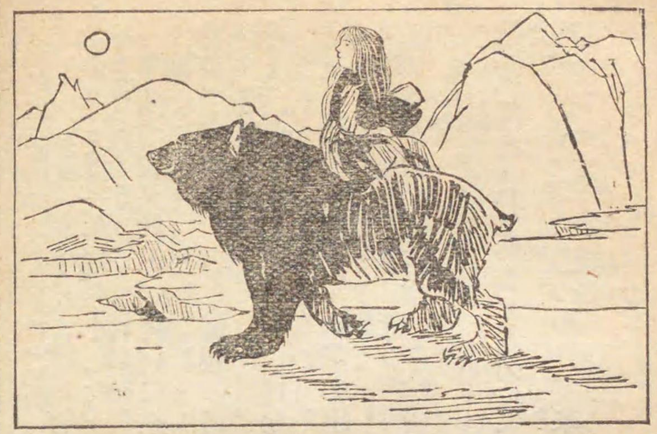
連作と輪作　連作と云ひます、連作は種々の弊害の多いもので、前年に病蟲害があれば、矢張り夫れが殘つて居て、再び害をなします、又同じ養分を取りますから、後作の時には土地に養分が缺乏して、肥料が多く入ります、で

る便利です、蕃殖用の鯉は、五六歳のものが宜く、四五月の頃になれば、產卵しますから、池の中に藻や藁の類を入れ、之れに卵を產み付けさせ、產み終ると直に卵を別の池に移して孵化させるので、幼魚には雞卵の黃味を與へ、やゝ生長すれば蠶の蛹を與へるのです。

毎年同じ土地に同じ作物を作ることを農家では年々作物の種類を更へて作ります、之れ即ち輪作で、後作は前作と異つた種類の作物ですから、病蟲害に罹ることも比較的少なく、又前作物の殘して置いた養分を吸收して生育致しますから、經濟上頗る好都合で御座います。

作物の種類　作物には極めて其種類が多くありますが、普通之れを大別して、穀菽類、蔬菜類、工藝作物類、飼料類、果樹類の五種と致します。

穀菽類　此の類の中で、稻、麥、粟、黍、稗の類を禾穀類と稱し、大豆小豆、菜豆等を豆菽類と呼び、又蕎麥の如き



は、之れを雜穀類の部に入れます。

蔬菜類　此の類は專ら菜食に用ゐられる作物であり、まして、大根、人參、牛蒡、馬鈴薯、里芋の如く主として根部或は地下莖を食用に供するものを根菜類と云ひ、漬菜、甘藍、土當歸の如くに專ら莖や葉を食用とするものを葉菜類と稱し、茄胡瓜、南瓜の如く果實を食するをば、果菜類と云ふのです。

工藝作物類　此の類は綿、油菜、甘蔗、煙草等の如く、工藝製造の原料となる作物で有りまして、何れも特別の用途あるもの故、一に特用作物とも申します。

飼料類　專ら家畜の飼料となすべきもの、牛馬の飼料とする牧草、或は蠶の飼料となすべき桑の類之れに屬します。

『お前一人でこんな所迄來て、全體何をしてるんだ。』

と聞きます。

娘わ返事に困つて、しばらく默つて居りますと、父親わ機嫌を惡くして、

『コレ、お前私に隱事をする子。此間のマンモースの牙も、お前わ旅の人に貰つたと云うが、其れわ皆嘘だろう。屹度誰かに教わつて、あの牙のある所え行つ

果樹類　桃、柿、梨、栗、葡萄等の如く專ら果實を採る爲に栽培するもので、其果實の種類に依りて、核果類、仁果類、漿果類、乾果類等に區別致します。

軍事

陸海の軍備　國家の獨立、威嚴を保ち、兼て國民の福利を增進する上には、陸海の軍備が必要であります、陸の軍備即ち陸軍は、攻めるも守るも陸上に在つて働くもので、海の軍備即ち海軍は擊つも防ぐも水上に於て働くもので、此二つは國家樞要の二大勢力であります。

陸軍の編制　には平時編制と戰時編制の區別があります、平時に於ては步兵の三個小隊を以て一個中隊

て、自分で堀つて來たに相違無い。どうだ、まだそれを隱す氣か』

と、叱る樣に云いますので、娘も今わ我慢が仕切れず、

『ア、、それじやア仕方がありませんから、眞實の事を云いましよう。』

と、娘わ熊の言葉を守つて、決して云わなかつた初めからの事を、殘らず話してしまいました。

父親わこれを聞くと、何でじつとして居られましよう。

『それでわ直ぐに堀りに行こう。阿父さんが一所に行けば、熊が來ないでもいゝぢやないか。』

と云いますと、娘もその氣になりまして、今わ熊の來るのも待たず、父子二人で出かけましたが、娘わ一度行つて案内を知つて居ますから、やがて去年來た

となし、四個中隊が集つて一個大隊、三個大隊が聚つて一個聯隊、二個聯隊が合して一旅團、二旅團が併つて一師團を成すといふ編制であります。併し師團となると歩兵の外に、騎兵の一個聯隊と、砲兵の一個聯隊と、工兵の一個大隊と輜重兵の一個大隊とが加はるのです、但し戰時の場合は尙ほ之に豫備、補充、衞生部員等が結び付いて、種々の變化を見るのであります、以上の如く大部分歩兵を以つて編制された師團の外に在つて、獨立せるものには、騎兵旅團、野戰砲兵旅團、鐵道隊、野戰電信隊、軍樂隊等があります。

師團は軍隊の大單位で、戰爭に要する一切の機關を具へて居ります、故に一師團の兵は小規模の戰鬪をなすに足るのです、師團の數は日露戰役以前は十三個

でしたが、戰役以後は增設されて十九個師團となりました、其の配置を見ると、近衞師團（東　京）第一師團（東　京）第二師團（仙　臺）第三師團（名古屋）第四師團（大　阪）第五師團（廣　島）第六師團（熊　本）第七師團（旭　川）第八師團（弘　前）第九師團（金　澤）第十師團（姫　路）第十一師團（善通寺）第十二師團（小　倉）第十三師團（高　田）第十四師團（宇都宮）第十五師團（豐　橋）第十六師團（京　都）第十七師團（岡　山）第十八師團（久留米）等。としてあります、

要塞、警備、守備

要塞は我邦では多く海岸の要害に置かれ、敵の侵來を防ぐに備ふるもので、要塞砲兵が配置してあります、その場所は東京灣要塞、紀淡海峽要塞、吳要塞、馬關要塞、佐世保要塞、長崎要塞、函館要塞、旅順口要塞等であります。又た▲警備隊

所え來て、去年取つた通りにして、マンモースの牙を澤山持つて歸りました。

所が、一度父親に話してしまえば、もう誰に云うのも同し事だと、娘わ元のお多辯に成つて、近所の者の顔を見る度に、その話をしましたから、慾にわ誰もひけわ取りません。『そんなら己も行つて取つてやる。』『おれも堀りに行くぞ。』と云うので、我も〳〵と鋤鍬をもつて、皆牙を堀りに行きましたから、今わ氷の中の牙わ、一本も殘らない樣になつて、あの立往生したマンモースの、口に生えて居る牙を取らなければ、他に仕樣が無い樣になりました。

そこで大勢の者が、薪を澤山かついで行つて、まずこのマンモースを、燒いて倒そうと云う事になり、氷や雪の上で、盛んといふのは邊境を警備するもので、對馬と琉球の二ケ所に置いてあります、尙ほ此他に▲守備隊といふのが、臺灣の各地と、朝鮮、遼東の各地に置いてあります。

陸軍の階級は大將、中將、少將、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、準士官、下士、兵卒の十二級で、此中少將以上を將官、少佐以上を佐官又は上長官といひ、少尉以上を尉官とも士官とも申します、それから單に將校と申すのは、少尉から佐官までを總稱する時に用ゆるのです、また准士官といふのは特務曹

長の事、下士官とは曹長、軍曹、伍長を謂ふので、兵卒には上等兵と一等卒、二等卒及び輸卒の區別があります、以上は戰鬪員の階級ですが、醫官、會計官等の非戰鬪員にも亦た之に相當する各階級があります。

軍隊の服制　近衞師團は軍帽に赤の太線を付けたのを冠り、他の師團は黃の太線を付けたのを用ひます、又た陸軍々人の襟元を見ると、色絨で所屬の隊號が着けてあります、其色によつて兵種を識別すると、赤色は步兵、萌黃は騎兵、黃色は砲兵、鳶色は工兵、藍色は輜重兵、茜色は憲兵、軍醫は深綠色、會計官は銀茶色を用ひて居ります、又た▲肩章によつて階級を識別すると、黃絨の星章一個付けたのは二等卒二個が一等卒、三個が上等兵、それから肩章の中央に金線一

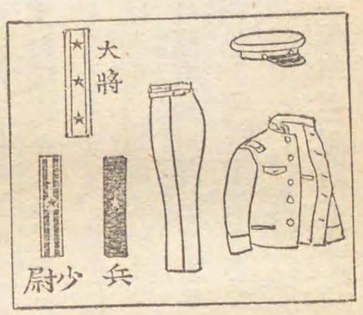
に火を燃やしはじめました。

すると此火の勢で、マンモースわ燒けて倒れましたが、それと一所に氷や雪が、一時に溶けたからたまりません。今まで無事であつた所に、急に大洪水が起つて、居合はせた人々わ云うまでも無く、遙かに娘の居る所まで、恐ろしい勢で押して來て、アレヨ〳〵と云う中に、家も道具も、木も畑も、皆どん〳〵流してしまい、そしてあの熊わ、ついに姿を見せませんでした。

▲光明姫

ある所に、大そう獵の好きな王子が居らつしやいました。毎日鐵砲を持つて、方々を獵してお廻りなさいますから、阿母様わ心配なすつて、

『三番目の國までわよいが、四番目の國にわ魔物が居るから、



官の肩章は金線二條を畫したる上に、星章一個付けるのが少佐、二個が中佐、三個が大佐、また將官はすべて幅廣の金線一條を畫して、之に星章一個添えたのが少將、二個が中將、三個が大將であります、また軍醫、會計官などの非戰鬪員が戰鬪員に異る點は金色條あつて、星章一個付けたのは伍長、二個が軍曹、三個が曹長であります、進んで特務曹長となると、肩章に金線一條と左右に黃の小線各一條を畫し、少尉はそれに星章一個を加へ、中尉は二個、大尉は三個の星章が付くのです、佐

の星章が銀色となり、金線が銀線となる許りです。

陸軍省 は陸軍の政務を司る所で、陸軍大臣を戴いて居ります、參謀本部は國防や用兵に關する百般の事務を司り、總長は畏多くも大元帥陛下に直隷して居ります。

海軍の主力 海軍の任務は水上の活動でありますから、攻守共に軍艦の勢力を假らねばなりません、實に軍艦は海軍の主力で、又た其生命なのであります。

軍艦の種類 軍艦には、戰鬪艦、巡洋艦、海防艦、砲艦、通報艦、水雷母艦、驅逐艦等の種類があり、各艦にまた等級があります、即ち戰鬪艦では排水量一萬噸以上あるを一等、一萬噸未滿を二等とし、巡洋艦、海防艦では七千噸以上を一等、其以下を二等、三千五百

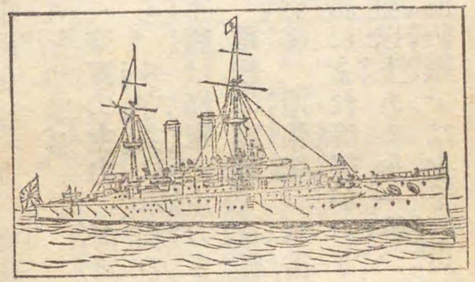
決して行つてわなりません。』

と、云つて居らつしやいました。

然し斯う云れると、王子わなお行つて見たい樣な氣がして、ある日四番目の國まで來て御覽になると、木の上に鸚鵡が大勢止まつて居ります。

『なんだ、魔物とわこんな奴か。』

と云いながら、直ぐ鐵砲でお擊ちになると、一羽わ下え落ちま



頓未滿を三等とし、また砲艦は千噸以上を一等とし、それに滿たぬを二等としてあります。

帝國軍艦の種類と名稱

戰鬪艦には新造の安藝、薩摩、鹿島、香取の四大艦を筆頭とし、日露の海戰に威名を轟かした三笠、朝日、敷島、富士の四艦、及び石見、肥前、相模、周防、丹後の五戰利艦、都合十三隻の一等戰鬪艦を有し▲巡洋艦には鞍馬、伊吹、筑波、生駒、淺間、常磐、出雲、磐手、八雲、吾妻、春日、日進（以上一等巡洋艦）笠置、千歲、嚴島、松島、橋立、利根

したが、他の鸚鵡が逃げようとしますと、落ちた鸚鵡が口を利いて、

『コレ、おれ一人を置いてくと、後でお姫樣に云つけるぞ。』

と云いますので、他の鸚鵡わまた引かえして、この鸚鵡を助けあげて、又木の上に止まりました。

王子わ不思議に思いながら、

『コレ、お姫樣とわ誰の事だ。』

浪速、高千穗それから戰利艦たる安蘇、津輕、宗谷の三隻がありますと、（以上二等巡洋艦）新高、對馬、秋津州、音羽、和泉、明石、須磨、千代田（以上三等巡洋艦）の二十八隻と、また▲海防艦には、鎭遠、扶桑、金剛、比叡、高雄、天龍、葛城、大和、武藏及び戰利艦たる壹岐、見島、沖島、松江の十三隻、▲砲艦には筑紫、磐城、宇治、摩耶、鳥海、赤城、伏見、隅田の八隻▲通報艦には、八重山、千早、龍田の外に戰利の姉川と捕獲の滿洲の都合五隻▲水雷母艦には豐橋と捕獲の韓崎の二隻、以上の總計七十一隻、四十七萬噸に上ります。猶ほ▲驅逐艦には、春雨、村雨、朝霧、有明、吹雪、霰、潮、初霜、神風、彌生、子ノ日、如月、朝風、夕暮、若葉、朝汐、白雲、霞、雷、電、曙、漣、

と、お聞きになると、
『私達の御主人の事だ。』
と云いますから、
『それわ何所に居るのだ。』
と聞きましたが、
『お前達に行けるものか。』
と云つたぎり、後わ何も云いません。

けれども王子わ、この事が氣に成つてなりませんから、何うかしてそのお姫樣の所え行つて

やろうと、御殿え歸えると直ぐ支度をして、御兩親から御暇をもらい、そのお姫樣を探しにお出でになりました。

さて一番目の國え入ちつしやると、大きな井戸がありましたから、其所でお辨當をつかおうとなさると、何時の間にか蟻が來て、お辨當を食べて居ります。王子わ、その儘口をつけず、皆蟻にやつておしまいなさいま

朧、叢雲、東雲、夕霧、不知火、陽炎、薄雲、並に戰利の敷波、卷雲、皐月、文月、山彥の三十四隻、それから建造中のものが二十隻あります。▲水雷艇には、一等水雷艇の小鷹、福龍、隼、白鷹、鵲、眞鶴以下、二等、三等の水雷艇數十隻あります。

軍港　日本の軍港は相模の横須賀、安藝の吳、肥前の佐世保、丹後の舞鶴、膽振の室蘭、遼東半島の旅順口の六ケ所であつて、各軍港には鎭守府と云ふものが置いてあり、其管下に軍艦、海兵團、水雷團等の備があります。

海軍の武力　は重に水雷と大砲の二つですが、先づ水雷の事から說明すると、水雷に防禦水雷と攻擊水雷との二種あつて、前者は水道や港灣に敵の侵入するを防ぐ爲めに水中に沈設するもので、之に視發水雷、電氣觸發水雷の三種があります、即ち日露の役に際し、旅順口水道に敵味方より沈めたるものは此機械水雷で、彼のマカロフの坐乘せるペトロパウロースク號が沈沒したのも、我が初瀨、八島が同じく沈沒の厄に罹つたのも亦た此爲であります、また攻擊水雷は敵の水雷防禦を擊破したり、敵艦を擊沈したりする水雷で、これには反裝水雷、外裝水雷、魚形水雷等の區別があります。

魚形水雷　仁川港にワリヤークを擊沈めた如きは、實に此魚形水雷の働きです、魚形水雷には電氣自動水雷と氣壓自動水雷の別あれど、要するに魚形水雷の大切な箇所といふのは、軍艦を擊沈するため衝突る尖頭

した。

するとやがて目の前え、蟻の王がやつて來まして、

『只今わ御馳走になりました。この御禮にわ今日から、貴君の御家來に成りましよう。御用の時わお呼び下さい。』

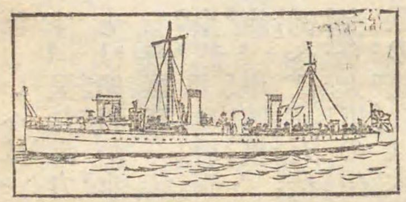
と云つて、又何所えか行きました。

それから二番目の國え行くと、今度わ大きな虎が、前足にトゲを立てゝ苦んで居りますから、可愛そうに思召しながら、そのトゲを拔いておやりでしたら、虎わ大そう喜んで、

『このお禮にわ御家來になつて、どんな御用でも致しますから、何時でも御召し下だされ。』

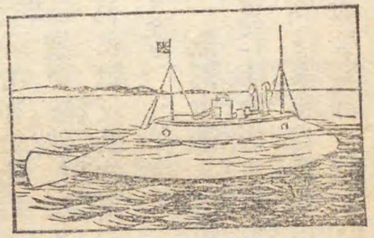
と云つて、又何所えか行つてしまいました。

それから三番目の國え來ますと、大きな山男が四人で、飛べつて稱することに成つて居ります、即ち何時砲といふのは口徑の大きさを云ふので、八十斤砲、二十斤砲などいふものは、彈丸の重量を目安にした稱呼であります、また火藥では日本の下瀨火藥が一番炸裂猛烈で、威力の凄じいことは日露戰爭の證する所であります。



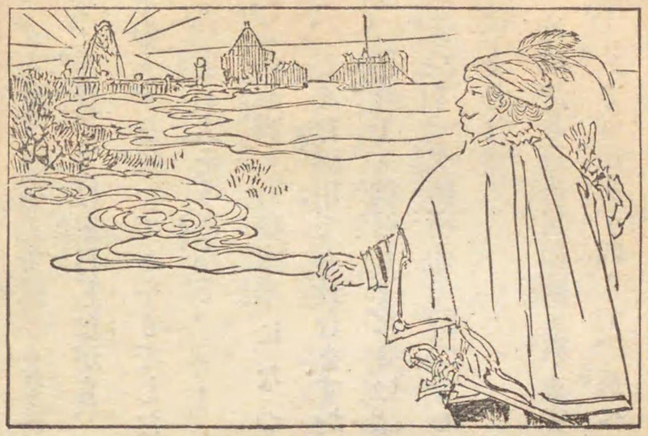
噸數と速力

軍艦の大小を示す場合には、いつも排水量何噸といふことを申しますが、此排水量とは船體が水中に入る爲めに排除せられるだけの水量を申すのです。また速力と云ふのは、船が風や水の抵抗を排して、一時間に進航する速度をいふので、例へば十八で、其次は爆發藥を發火させる所の發火針でありますが、今各部の構造を擧げて見ると、第一尖頭、第二發火針裝置、第三爆裂藥裝置、第四原動機裝置、第五機關裝置、第六舵及び鰭等から出來て居ります。



大砲の種類

軍艦に搭載する大砲には、いろんな種類があつて、簡單に書き盡せる譯のものでありません、現今各國の軍艦で使用してゐる大砲の種類は主にアームストロング式、クルップ式等の大砲、カットリング式、マキシム式等の速射砲、機關砲などです、それから、砲の大小は概ね口徑の吋若くは其砲に裝塡する彈丸の重量を以



節といへば一時間十八哩を航行することになるのです、又た馬力といふのは船を動かす機關の力で、吃水とは船體が水中に浸入るたけの深さを謂ふのです。

海軍旗に第一種と第二種とあります、第一種は天皇旗、皇后旗、皇太子旗、皇族旗、海軍大臣旗、大將旗、中將旗、少將旗、代將旗、先任旗、司令長旗で、例へば天皇陛下が臨乘まします時は天皇旗を掲げ、海軍大臣の坐乘せる折は海軍大臣旗を飜し、大將坐乘の場合は大將旗を掲げる等、各々其場合に相當した旗章を用ふることに成つて居ります、また第二種は、軍艦旗、艦首旗、當直旗、運送船旗、工作船旗、海軍病院旗等であります。

滿艦飾とは軍艦が港灣に碇泊せる際、各檣頭に軍

る椅子と、沸出る袋と、水の吹く壺と、敵の無い棒と、この四つの寶物を、頻りに取り合つて喧嘩して居ります。

これを見て王子わ、山男共に向い、

『今おれが矢を射るから、それを一番先に取つて來た者が、この寶物を取るようにしろ。』

と、云いながら自分の矢を、四方え一本宛飛ばしますと、四人の

艦旗を掲げ、艦首から艦尾に旗旒をかけ連ねる禮式を申すのです、但しこの滿艦飾を行ふのは、紀元節、天長節といふやうな日とか、又は天皇、皇后、皇族、外國の皇帝、皇族、大統領に對し皇禮砲を放つべき日とか、或は特に命令を下された日に限るのです。

海軍省は陸軍省と並んで海軍の政務を統ぶる所で、長官に海軍大臣を戴いて居ります、また海軍省内に軍令部といふのがあつて、作戰計畫、用兵等のことを司ることに成つて居ります。

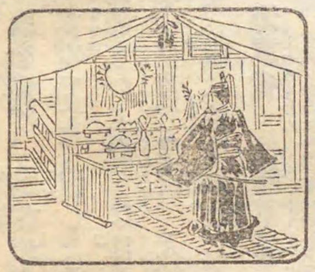
海軍禮式皇禮砲は天皇陛下を御初めとし諸皇族に對し、紀元節、天長節に當つては百一發、又た軍艦が外國の港に着した時は二十一發の禮砲を放ち、同じく二十一發の答砲を受ける例になつて居ります。

山男わ四方にわかれて、その矢を取りに行きました。その間に王子わ、寶物を四とも自分の物にして、其所を逃げてしまいました。

さてその次わ、いよ〳〵四番目の國え來ました。所が不思議な事にわ、丁度夜になりましたのに、此國でわ誰も燈火をつけませんから、變だと思つて聞いて見ますと、これわ此國のお姫

別科

少女年中行事



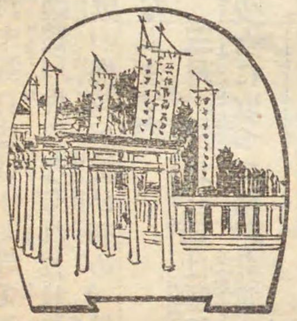
一月 一日は四方拜ですから、宮中では天皇陛下が御正殿に出御遊ばして、伊勢大神宮を始め、天神地祇幷びに四方の神々を拜し給ふのであります。生徒は學校に集めて御眞影を拜し、年始の歌をうたうて、年のはじめの芽出たさを祝ふのです。三日は元始祭で、陛下は賢所、皇靈殿、神殿に御參拜あそばして、皇祖皇宗の

樣が、光明姫と仰有る位で、身體から御光がさすので、夜になると高い所え上つて、國中をお照らしに成るから、少しも燈光わ入らないのだと云う事です。

王子わこれをお聞きになつて、

『ハ、ア、さてわ此間の鸚鵡の話わ、此姫の事を云うのだな。』

と、初めて思い當りになりましたが、さう聞くと一層合つて見



御靈をまつらせ給ふのです。五日は新年宴會、七日は宮中の御講書始め、八日は陸軍始めで、青山練兵場に觀兵式を行はせ給ふのです。また海軍始めは月の十五日です。十六日は鍬入りと言つて、雇人が皆暇をもらつて、思ひ〳〵に遊びまはるのです。孝明天皇祭は三十日、學校もお休みです。

二月 この月の始めの午の日を初午と言ひ、諸所の稲荷へ參るものが多いのです。十一日は紀元節、神武天皇が東國を平定し給うて、お位に即かれた日であります。學校では祝ひの儀式があります。ま

たくなり、急いで御殿の方え行つて御覽になると、もう目が明けて居られない位、大そう光る物が彼方に見えます。これが名高い光明姫でした。

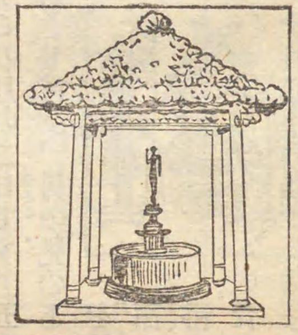
けれども夜わ光がきつくて、とてもそばえ行かれませんから、まづ翌日までまち、それから例の飛ぶ椅子を出して、『光明姫の所え行け。』と云いながら、それえ腰をお掛けになると、椅子わ忽ち宙を飛んで、光明姫の御居間まで來ました。

見るとお姫様わ、夜通し照らして居らしつたので、晝わ寐て居らつしやいますから、その間に例の袋から、木の葉を澤山呼び出して、寢床のまわりえ一面にまき、そつと又歸つて來ました。

それから又次の日にわ、同じた十五日には、お寺で涅槃會を行ひます、これはお釋迦様が失くなられた日であります。月の終り頃から、庭の梅花が綻び初め、鶯が小枝に初音を漏らすやうになります。

三月 三月三日は雛祭り、上巳の節句と言ひます。少女に取つては、非常に嬉しい日で、お雛さまを飾り、白酒を飲むのです。中旬から彼岸に入つて、その中日を春分と言ひます、彼岸ざくらが咲き初めるのは、この頃からです。春季皇靈祭は春分の日で、宮中でお祭りを行はせ給ひます。月の終りには、學校の學年試驗もすんで、卒業證書授與式があります。

四月 三日は神武天皇祭、神武天皇がお崩れになつた日です。この月の始めには櫻花が滿開して、野にも山にも霞たなびき、さま〳〵の草花が咲きはじめます。野外の散歩に、最も適した好季節です。八日はお釋迦様のお生れなさつた日なので、各所のお寺では花御堂を作り、釋迦の像に甘茶を灌ぎ掛けます、これを灌佛會と申します。陰暦の三月三日は大汐と言つて汐干狩りの好季節です、それは大抵この月の中にあります。上野の東照宮は、十七



様に椅子に乗つて、お姫様の側へ行つて、今度わ立派な肩掛を呼び出して、そのまゝ置いてお歸りなさいました。

それから又三日目の朝にわ、同じ様に飛んで行つて、例の呼出し袋から、金の腕環を呼び出して、それをお姫様の腕えそつとはめようとすると、お姫様わ目をさまして、

『お前わ何んだ。』

とお聞きでしたから、王子わ思いきつて、

『此間から貴君の寐て居る所え來て、いろ〳〵な物を置いて行つた者です。なんと私と一所に、私の國え來ませんか。』

と云いました。

すると御姫様わ、

『それでわ一度お父様に伺つて、可いと仰有つたら行きましよう。』

日が大祭であります。

五月 農家種蒔きの季節に入る八十八夜は、大抵毎年この月の二日です。五日は端午の節句、あやめの節句とも言ひ、男の兒のある家では、幟を立て武者人形を飾つて祝ひます。また軒に菖蒲を挿し、菖蒲湯をこしらへて浴しますが、これは火災除けのため、惡氣を拂ふためだと申します。粽をたべるのも、この節句であります。六日は靖國神社の例祭、二十八日は地久節です。この月は青葉若葉が繁つて、軒端には燕が巣をつくり、空にほとゝぎすが鳴き渡り、汀には螢が飛び交ふやうになります。藤、

山吹、菖蒲、芍藥、木瓜などは花盛りです。

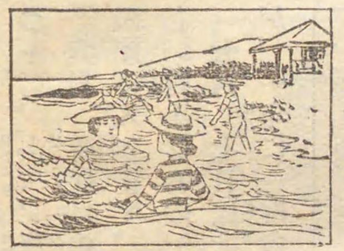
六月 時候は追々暑くなつて、月のはじめから梅雨の期に入ります、農家では麥刈りに續いて、田植の忙しい時となるのです。

七月 七日は七夕祭、天の川で牽牛と織女との二星が、一年に一度會ふのだと申します、家々では子供たちが、五色の紙を短冊形に切り、七夕に縁ある歌を書いて竹の枝に結び、庭の先に立てゝ祭ります、盂蘭盆はこの月の十五日ですが、まだ舊暦を用ふる所が多いやうです。學校の暑中休暇は、月の末から來月へ渉つてあるのですが、高等の學校では、十

と云いますので、これから公然に、お父様の王様に話し込む事になりましたが、この王様わ恐ろしい方で、やがてこの王子に、難題を四つ出して、これが出來たら姫をやると云う事になりました。

難題とわ、第一に、八十貫目の芥子の油を、一日の中に油にしろと云う事。第二に、恐ろしい鬼を呼び出して、これと角力を取れと云う事、第三にわ、空に銅の太鼓があるから、それを叩いて鳴らすと云う事、第四にわ、小さな斥一挺で、御殿の前にある大木を、眞二つに割ってしまう事と、この四つでありました。

所が王子にわ、途中で出來た家來や、また取つて來た寶物がありますから大ていの難題にわ驚きません。



一日から休むので、歸省する學生が多いのです。綠蔭涼しきところ、靜かに書を繙くのも、この頃からのことであります。富士登山、昆蟲類の採集、避暑旅行、海水浴など、樂しみはなか〳〵に多いのであります。

八月 暑中休暇、稻の穗がそろ〳〵出かけます。時候は燒くやうに暑く、蟬の聲は噪がしく聞えます。蚤や蚊も多く出て、まことに嫌な時でありますが、朝早く起き出で、露を含んだ牽牛花に目をさますのは、實に氣持ちのよいものであります。この頃は、食物が腐敗し易いから、よく氣をつけて、衞生を守らねばなりません。

九月 秋風吹きそめて、朝夕はやゝ涼しくなります。二百十日と二百二十日とは、稻の花のために大切な時季であるのに、よく大風が吹きますから、農家ではこれを厄日として、心配するのであります。學校では新學期がはじまり、勉學の好季節となります。九日は重陽の節會とて、五節句の一つであります。秋季皇靈祭は秋分の日に行はれますので、その儀式は春季皇靈祭と同樣で

す。月の下旬には、燕が歸つて雁が音づれ、柿の實もやう〳〵熟し、草葉にすだく蟲の音を聞くことが出來ます。また陰曆八月十五夜は、仲秋の月と言つて、月

見によいのです。

十月　天高く氣清く、秋の草花咲きみだれて、郊外散歩の好時期となります。また、夜が追々ながくなりますから、燈下に書を繙くに適します。十七日は神嘗祭、新穀を伊勢大廟に薦め給ふ儀式があつて、國民は皆その業を休み、國旗をたてゝ祝ひます。また舊曆では十月の中の亥の日を亥の子と言ひ、爐開きをなし、亥の子餅をこしらへます。月の終り頃には、稻の穗が熟し、菊の花が咲きそめます。

十一月　三日は天長の佳節、陛下が御降誕遊ばした日で、國民の最も祝さねばならぬ日であります。この日、青山練兵場で觀兵式を行はせ給ふ。二十三日は新嘗祭と言つて、陛下が今年の新穀を天神地祇にお供へ

まづ油わ蟻に賴んで作らせ、次に鬼とわ虎に角力を取らせ、空にある銅の太鼓わ、飛ぶ椅子に乘つて叩きに行き、これで三つまでわ無事に出來しました。

所が四番目の大木割りにわ、流石の王子も困つて居らつしやると、お姫樣がそれを氣の毒に思い、髮毛を一筋ぬいて、內證で大木の所え行き、

『お前わまことに素直な木だね

になり、またそれを召し上る日でありますから、國民はこれを祝し奉るのであります。また、六日は靖國神社例祭、五月の祭りと同じであります。十五日は子供の祝ひ日と言ふので、神田明神へ參詣するものが多いのです。庭には菊の花咲きほこり、山には紅葉の色うつくしう、野には稻刈る農夫の忙しさう、時は追々寒くなつて參ります。

十二月　一年の終りの月なので、何となく氣も忙しくなつて來ます。東京では十三日から、諸所に歲の市が立つのです。月の中頃以後は、煤掃き、餅搗きなど

エ、だから私がこの毛で撫でたら、直ぐに中央から割れるのだよ。』

と、よく云いつけてをきました。

そこで王子が、斧をもつて大木に向い、一ト打ち當てました時に、お姫樣わ側に居て、そつと大木を毛で撫でましたら、何百年經つたか知れない、恐ろしく大きな大木わ、中央から二つになりました。

そこで王子わ、見事に四つの難題を解きましたから、こゝでいよ〳〵望通り、光明姫をお嫁さんに貰つて、めで度くお國えお歸りになりましたが、山男から取つた寶物の中にわ、誰にも負けない棒がありますので、その後わ誰も恐い者わ無く、よく國中をしたがえて、樂しい月日を送りました。

タクローズのお土産を樂しみます。さて、いよ〳〵三十一日には、一年中のことを滯りなく濟ませて、安らかに年を送るのです。その夜、諸所のお寺で撞き出す除夜の鐘を聞きながら眠りに就いて、明くればめでたいお正月！　さア〳〵、年がかはれば氣も新らしう、追羽子ついて遊びませう。

をして、お正月の準備に日も足りない位です。學校は二十五日頃から翌年にかけてお休み、お父さんのお役所も、二十八日からお休みの筈です。またクリスト教信者の家では、二十五日がクリスマスで、子供等はサン

山野の跋渉

勉學の餘暇に野や山を歩く時は、まことに宜い心地が致します、植物の繁茂する所は、空氣も清涼でありますから、身神爽快を感じ、何となく高尚なる心になります、殊に植物を採集して、標本を作る如きは、學問の上にも極めて有益なる事故、こゝに標本製作法の大略を記しませう。

胴卵

鐵葉製の筒形のもので、標本器械類の賣捌所に行けば、一個七八十錢位で購ふことが出來ます、胴卵の内部を濕して、其中へ採集したる植物を入れ置く時は、永く凋れず、いつ迄も生々して居る故、一日採集し歩きて家に歸るも、標本製作には、少しも差支な

▲手無し娘

ある處に、兄と妹と、たつた二人で暮らして居りましたが、兄わ何所からか女を連れて來て、これを自分の女房にして居りますと、この女がまことに惡い女で、夫の妹を邪魔にして、何うかして追出してしまもうとしました。

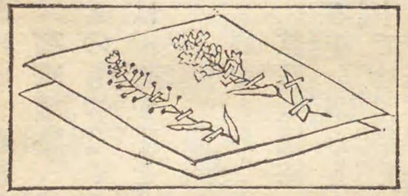
そこで、ある日夫が山え行つた留守、女房わ裏の小屋え行つて、飼つてある牛や豚を、一匹殘らず殺してしまい、それから夫の歸つて來た時、これわ皆な妹が、殺してしまつたのだと云いましたが、夫わ一向腹も立てませんから、今度わまた留守の中に、家中の道具を皆叩き壞して、それを妹の所爲にしました。けれども夫わまだ何とも云いません。

其中に女房わ、一人の子供をいのです。

製作法 本式にやれば、種々雜多なる道具が必要でありますが、初心のものには其必要がありません、で只舊き新聞紙の間に、植物を手際よく排置し、其上に又新聞紙を積み重ねて、上より重石をかけるのです。

紙の取換 植物には多量の水分を含有するもの故、いつ迄も同じ紙に遂に醗酵して腐敗する恐れあるものですから、時々吸取紙を取換へて、なるべく水分を少くしてやるがよろしい。

出來上り さて充分に乾燥すれば、之れを畫學紙に



付け、所々細き紙にアラビヤゴムを糊して、手際よく配列して、兩の中に貯へ、例のナフタリンを入れて、害菌蟲等の發生を豫防するがよろしい。

美術的標本 菜の花の如きは、いつ迄も其色が變色しないで、美しき黃色をして居りますから、額面などに仕立てゝ壁間に掲ぐれば、なか〳〵雅致あるものです、殊に花に配するに、蝶類の標本を以てすれば、一層美觀を呈するでせう。

採集心得 植物と雖も生命あるものなれば、猥りに折り取ることは出來ません、殊に貴重なる種類のものを多く取り盡す時は、遂に根絶しになる恐れ

産みましたから、夫わ大そう喜んで居りますのを、またその留守の間に、自分で殺しておいて、さて夫が歸つて來た時、『妹わほんとに鬼の樣な人です。大切の〳〵赤ん坊を、とう〳〵殺してしまいました。』と、泣きながらその死骸をさしました。

これにわ流石の夫も、ひどく腹を立てまして、もう勘辨わ成らんぞと、翌日離れ島え苺を取りに行つた時、不意に斧でもつて、その兩方の手を切り落して、そのまゝ置いて來てしまいました。

可哀そうに妹わ、嫂の惡計にかゝつて、何の罪科も無いものに、兩方の手を落された斗りか、誰も居ない離れ島に捨てられて、草の上に倒れたまゝ、只泣いて斗り居りました。

あれば、心しなければ成りません。

有毒植物　多くの植物の中には、恐しき毒を有するものも少なくありませんから、植物を取扱ひたる後には、必ず手を美しく仕なければなりません。

草花栽培

草花栽培法　草花は多くの植物の内で、最も艶美なる花を開くもので、從つて草花の栽培は、家庭園藝の中では、最も趣味の深いものです、併し其栽培法は他の果樹蔬菜等に比して、頗る容易なもの故、誰にでも出來る丈に面白いもので有ります。

草花園　草花は畑地に栽培することも出來れば、又鉢植として棚の上などに列べ、之れを見て樂しむことも出來ます、で其棚を設くるにも、成るべくは園内に於てするが宜しけれど、木蔭や軒下では、自然日光や通氣も良好でない爲め、草花の生育に大なる障害を來たすことを心得て置き、假りにも光風のよからざる所に置いては成りません。

區劃　園地に於て草花を栽培せんと思はゞ、其區劃を井然として、一糸亂れぬ樣にするが宜しいが、若し廣い園地がない時は、成るべく人家に近い地を撰び、畦幅は四尺乃至六尺程とし、長さは地面の都合にて隨意です、而して畦の間には、必ず二三尺の通路を設け、

すると、ある日この離れ島え、ある國の王子が遊びに來て、手の無い娘の居るのに氣がつき、その側え寄つて樣子を聞きますと、如何にも可哀そうでなりませんから、そのまゝ御殿え連れてお歸りになりましたが、この女わ手こそ無けれ、顏容も美しければ、氣質も到つて善い樣ですから、大層王子のお氣に入つて、とう〳〵お妃になさいました。

さてこれから暫時立つと、王子わ御用で旅をなさいましたが、不思議にもお妃の兄の家に、丁度お泊りになる事になりました。所え御殿からお手紙が來ましたのを、例の惡い嫂わ、そつと取つてあけて見ましたら、中にわ手無しのお妃が、玉の樣な王子をお產みになつたと云う事が書いてあります。

培養手入に都合よくし、各草花には小さき木片に名稱を記して、其前面に立てゝ置くのです。

花壇 園地の栽培上、最も趣味深きものは花壇の造り方で、花壇の造法如何に依りては、著しく異彩を放つものです、左に花壇の造法に就き、其重なるものを記して見ませう。

模樣花壇 これは赤、紫、白、紅、黃などの種々の美しき草花を配合して、模樣風に植え並べるので、主として日當りのよき樹木のなき肥沃の土地を撰定し、肥料を充分にし、又耕耘にも注意して、植ゆべき草花は、あまり高くならぬ横生のものをよしとするので、又之れを植ゆるには、花壇の緣より五六寸を放し、緣には朝鮮芝の如き芝草を植え廻し、朝の間には肥料を施し、日暮には水を注ぎ、勉めて花壇の手入をして、雜草等の生へない樣に、毎日注意しなければなりません。

彩色花壇 これは模樣花壇の一種とも云ふべきもので、主として短時期の花を集め、其色彩を整ふると共に、專ら同時期に開花する色のみを植え、其植ゆべき時も、成るべく密植する必要があります、夫れで此の花壇では、一時に各種各色の花が咲きますから、其美しさは恰も花御堂を見る樣であります。

リボン花壇 此の花壇は前者の如く、只花ばかりでなく、葉の美しいものをも交ぜて植えるので、其法は

嫂わ見てすぐに燒きすて、代りに自分が手紙を書いて、

『手無しのお妃が犬の子を產みました。如何取り計らいましようか。』

としておきました。

王子わ御覽になると眉をよせて御考えになり、やがてお返事をお書きになりましたが、それわ、

『そう云う忌わしい奴わ、母子

リボンの如く、細長く植えるもの故、墻壁などに添ふて植ゆるがよろしい、そして比較的長き植物を後方にし、短かきものをば前に植へ、長短正しく一糸亂れぬ樣に整然としなければなりません。

ピラミツト ピラミツト花壇は、庭園などに設くれば、至つて趣味の深いもので、其法は先づ花壇の中央部に、最も丈の高きものを植え、夫れより順次左右に短きものを植えて、彼のピラミツトの如き形狀を呈せしめるにあるので、之れが全體に花を付くる時は、甚だ美麗なるものです。

盆栽仕立法

盆栽 盆栽とは極めて狹き盆の裡に、植物の形態を自然のまゝで縮めたもので、例へば直徑一尺にも足らぬ樣な小鉢に、數百年の星霜を經たかと思はるゝ樣な、大木を縮小して現はし、或は其丈け數寸にして、既に幹の腐朽して、青苔の類を生じ、一見多數の年處を閲した如く、之れを机上に置けば、猶千年の老木の林に遊ぶ樣な感があつて、極めて雅致の多いものです、されば其栽培法の如きも、最も手數を要するものであります。

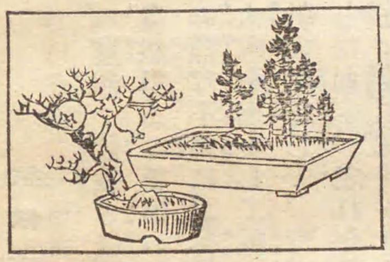
盆栽の種類 盆栽には多くの種類があります、即ち杉の如きは、專ら葉を見るもの故、之れを觀葉樹木類

とも樽詰にして、海え流してしまえ。』

とありました。

その お手紙が御殿え來ますと、何しろ王子からの御命だと云うので、直ぐにお妃の赤兒と一所に、樽詰になつて海え流されましたが、運よく水も入らず、また岩にも當たらず、無事に三年の間わ、方々浮いてまわりました。その間に樽の中の赤兒わ、もう三歳になつて居たのです。

ある日この子わ、そつと樽の中から外をのぞいて、岩のあるのを見つけましたから、いつそあの岩に打つけて、この樽を破つてしまつたら、二人とも外え出られるだろうと、いきなり岩え打ち當てますと、樽わうまく割れて、二人わ其所え出られましたが、何しろ此所わ海の中の、岩の上に出た斗りですから、何と云ひ、橘、石榴の類は主として果實を見るものですから、之れをば觀實樹木類と稱し、梅櫻の如きは花を主とするもの故、觀花樹木類と云ふのです、而して之れ等の盆栽は葉や果實や花を見るばかりでなく、其枝や幹の形狀を見、或は鉢に石を添へて風致を增す等の必要もあります。



盆栽と地質　盆栽には先づ第一に、其樹木に適當なる土を得ることが大切であつて、もし土が不適當なれば、盆栽は迚も完全なる成育を遂げることが出來ません、即ち盆栽用の土としては昔しから田土、溝土、黄土、赤土などであります。

肥料　盆栽の肥料としては、觀花樹には牛乳、竹類には糠、松其他深山性のものには松魚節、其他茶滓、貝殼、魚の洗汁、米泔汁、泥の類も夫れ〳〵功用の多いものであります。

灌水　如何なる植物にても、灌水は最も必要なるもので、殊に盆栽に於ても、四季に論なく灌水を怠つてはなりません、即ち二月より五月頃にかけては、日中に灌いでよろしく、五月の末より秋の彼岸頃までは、午後三時頃、又秋の彼岸後は日中に灌水するものです。

盆栽と棚　盆栽は之れを棚の上に

うする事も出來ません。

その中に大浪がサッと來て、アレェと云う間もあらばこそ、二人とも浪に取られて、海の中え持つて行かれ、自分だけわやつとの事で、又砂の上え打上げられましたが、子わ行方も知れません。

所が自分の側にわ、魚が一匹砂の上に居て、ピン〳〵跳ねて苦しがつて居ります。

『オ、、お前わ陸でわ困るだろう。でわ助けてあげようねェ。』と、手わありませんから足の先で、その魚を海に押し入れてやりますと、魚わさも嬉しさうに、波の中でピチ〳〵躍りましたが、やがてこのお妃に、

『貴女わはやく彼所の岩え行つて、岩の間から流れて居る、眞水でお手をお洗いなさい。』

と、云つて彼處の岩をさします。

陳列するのが一番よろしい、之れに反して地上に置く時は、下部の排水穴から蚯蚓等が這入り、種々の害を及ぼすことが有ります、棚の高さは高からず低からず、肥培灌水にも差支なき樣にし、なるべく風通よき地に、南方を背に北面して裝置するもので有ります。

仕立法の注意　何事でも丹精を盡さなければ、成就するものでは有りません、殊に盆栽の如きは、丹精に丹精をこらし、初めて目的を達するもので、初めより逸品を作り出さうとあせつても、夫れは難しいこと故、充分熟練を重ねて、漸く成功する心掛が肝要であります。

昆蟲採集

昆蟲　昆蟲は脚が六本あるから、一に六足蟲とも云ひます、地球上最も種類の多いもので、殆ど四十餘萬種に達すると云ふ事です、日本は寒熱帶に跨る長い國故、昆蟲もなか〳〵多く、實に五六萬種以上に達して居ります、之れ等の中には元より人の益に立つものもありませうが、多くは害をするものです、而して昆蟲を採集して標本にする事は、極めて愉快なことであると共に、又甚だ有益な事故、簡單に其方法を記して見ませう。

捕蟲網　蜂蝶蛾の如き、飛翔する昆蟲を捕るには、どうしても捕蟲網を用ゐなければなりません、捕蟲網を製作するには、寒冷紗と太き針線と、夫れに竹の柄と有ればよろしい、寒冷紗で以て先づ口徑一尺程長さ

何の事かと思いながら、まづその岩の所え行つて、流れて居る眞水の中え、切れた腕をつけて見ましたら、不思議にも兩方から、元の通りの手が出ましたが、まだそれ斗りでわありません、その手首を洗う拍子にふと前を見ましたら、居なく成つた自分の子が、ちやんと目の前に歸つて居ります。

お妃わ大喜びで、直ぐとこの王子を抱え、それから御殿の方へ歸つて來る途中で、思いかけなく泊り合わせましたのわ、いつぞや追い出された兄の家でしたが、兄わ一向氣がつきません。

又あの惡い嫂も、ちやんと其所に居りますから、お妃も大そう驚きましたが、先方わまだ氣が付かない樣です。

所えまた不思議にも、王子が泊り來合わせましたが、これも

二尺五寸程の網を作り、口部の周邊には丈夫な木綿の布を縫ひ付け、針線を輪にしたものにあしらひ、長さ三尺程の竹の柄を付くればよろしい。

採集函 之れも菓子折の不用になつたものを代用とするが宜しい、底には疊表の如きものか、又は黍殼の類を列べて敷き詰め、採りたる蟲を針に留めて、刺し置くに便利よくし、眞田紐を付けて肩から下ぐる樣にすれば一層都合がよろしい。

毒壺 廣き口のある藥瓶を求め、其底部に青酸加里と種する藥を入れ、濡らしたる紙を五六分の厚さに詰め置く時は、

藥分は紙に透り、毒氣瓶中に充つれば、蜂其他の甲蟲類の如き強き物も、大抵毒氣に當りて斃死するものです、青酸加里は激藥なれば、取扱ひに注意を要すると共に、固く瓶口を密封して、毒分の散失を防がなければ成りません。

留針 採りたる蟲を刺して留め置く針で、標本屋又は小間物屋にて賣つて居ます、大小三種ありて、價は極めて安いものです。

ピンセット 昆蟲類の中には、種々の毒あるもの、害を加へるものがある故、手指で取扱ふことは甚だ危險なれば、ピンセットで挾み扱ふがよろしい、此の器械は一個二十錢程なれど、細き竹にて手づから製造するもよろしい。

お妃の樣子が變つて居るので、まだそれにわ氣が付かないのです。

すると子供わ、はやくも王子の前え出て、今までの事を殘らず話しましたから、王子を初め兄も嫂も、皆肝を潰しましたが、中にも嫂わ、今までの惡い事が、それで殘らず知れましたので、夫にわ愛想を盡かされ、王子にわ引捕えられ、とう〳〵嚴しい處刑にあいました。それに引かえてお妃わ、王子と一所に御殿え歸つて、前にもました樂しい身上になりました。

めでたし〳〵。

姿やさしき姫百合の
花にやどれる白露を
うつせ少女子
化粧の水に

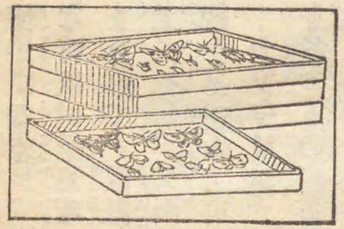
蝶類採集　蝶類は春から秋まで、花のある所には大抵飛んで居ります、之れを採るには、捕蟲網を以てし、網の上から輕く其頭部を壓すれば、忽ち絶息しますから、別に毒瓶に入れないで、其まゝ採集箱に收めるのです。

蜂類採集　蜂類も又花のある所か、或は樹木の幹から出る樹液を吸收して居ますが、之れを採集するには捕蟲網で以て靜かに採り、網の中からピンセットで挾み、毒瓶に投じて殺すのです。

甲蟲採集　甲蟲類は夜間は飛翔しますが、日中は多くは樹木の空洞等に蟄伏して居ますから、別に捕蟲網を用ゆるの必要がありません、そして之れを捕殺するには熱湯を用ゐるがよろしい。

標本製作　さて採集し得たる昆蟲は、家に飯ると共に、なるべく早く標本に仕立てなければ成りません、標本製作に就て、心得べき二三のことを記せば、先つ第一に

展翅板　と云ふ器械で之れは蝶類の翅を開展するには、必要缺くべからざるもので、中央に凹所のある板です、針に留めた蟲體を、凹所に刺して位置を定め、翅を兩方に展きて、洋紙の小切で止め、數日間そのまゝにして置けば、自然に乾燥して、立派なる標本と成ります。



標本函　完全に製作した標本を貯藏して置く所で、之れも手製の函を

格言三十題

一 德は香氣の如し、これを碎けば益々香し。　ベーコン

二 虛言を吐くべからず、正直に考へ眞實に話せ。　フランクリン

三 虛言を吐く者は、眞實を述ぶるも信ぜられず。　アリストートル

四 愛は婦人に取りて、最も神聖なる觀念にして、その全き生存の流れ出づる所なり。　カール・ニツセル

五 愛情は善き生活の最大なる基礎なり。　ジョージ・エリオツト

六 身を立て道を行ひて名を後世に揚げ、以て父母を顯はすは孝の終なり。　孔子

七 顏の赤きは、心の穢きに優れり。　ドン、ク井ジー

八 温良と聰明とは、おほむね相伴ふものなり。　ポープ

小鳥飼養法

使用する方が、却つて面白くありますが、函が不完全な時は、折角巧みに出來上つた標本も、忽ち塵や埃にまみれて、散亂する恐れある故、なるべく隙間のなき工夫をし、又函の上面に硝子蓋をして置けば、一層美觀を呈するで有りませう。

ナフタリン 多くの昆蟲標本の中には、種々の惡臭を放つものがあり、從つて標本蟲其他各種の黴菌が發生して、彩しき翅を汚損せしむる恐れあるが故に、ナフタリンと稱する藥劑を求めて、標本函の四隅に紙に包みて入れ置く時は、只に臭氣を生じないばかりか、黴菌等も發生せず、頗る好都合であります。

小鳥 種々の動物を飼ひ馴らすことは、最も趣あるものですが、殊に小鳥は其鳴き聲が美しく、其姿が愛らしいので、誰でも之れを飼養することを好みますが、中には飼養法が難しいので、折角の小鳥を死なして仕舞ふ樣なことがあります、されば茲には最も普通の小鳥に就いて少しく記して見ませう。

四十雀 形は雀に似て小さく、羽毛は薄淺黃で、頭は紺黑、喉胸の邊は黑く、シチピー〳〵と鳴き、殊に四月頃より入梅にかけてよく鳴きます、此の鳥は木の枝や葉の裡に居る蟲を捕つて食べ、木の周圍をグル〳〵廻る故俗に木廻雀とも云ひます、

九　辭讓の心は禮の端なり。　孟子

一〇　憤怒は愚者の胸裡に住す。　聖書

一一　善き本心は柔かき枕なり。　獨逸俚諺

一二　他人の過を非難せんよりは、むしろこれに鑑みよ。　英國俚諺

一三　守錢奴は常に貧し。　獨逸俚諺

一四　眞實は神の娘なり。　スペイン俚諺

食物は專ら摺餌を用ゐます。

日雀　又鵐とも書きます、形は四十雀に似て小さく、鳴音は四十雀よりも音色が低くあります、甚だ弱い鳥ですから、餌物にも充分注意しなければなりません。

山雀　雀に似て羽毛は茶に黑班があり、頰は黑で喉と胸は茶色で、食物は麻の實、蟲、荏胡麻等で可なり強い鳥で、殊に此の鳥の特徴は、空に飛び反りて止木に返る性があります、籠は充分に長くして運動を自由にしてやらねばなりません、此の鳥は種々の藝を仕込むことが出來るので、上等の鳥になると、一羽の價が五六十圓も

一五　婦人の愛は、しば〳〵男子の勇氣よりも大なることをなす力あり。　ゲレーゼル

一六　婦人よ、善ならんと求めよ、大ならんと求むるなかれ、婦人の美德は謙遜にあり。　リットルマン

一七　眞正の友誼は不朽なり。　ピタゴラス

一八　人生、交友の快樂より貴重なる快樂あらず。　ジョンソン

致します。

雀　人家に近く居る鳥で、其一種に黃雀と云ふのがあります、重に關西地方に居るのです、雀の餌は稗、粟、黍等の穀類で宜しい。

眼白　羽毛は青味を帶びたる黃で、胸は黃に眼の周圍は白く、眼白の名は之れより起つたのです、食物は摺餌で且つ時々蟲を與ふれば一層宜しい、三月頃より六月頃迄鳴くもので、音色は金鈴の如く、人の最も愛するものです。

鶯　鶯の餌物は最も大切です、今摺餌製法の割合を示せば、糠一升に玄米三合を混じたるもの一匁に付いて魚五分の割、先づ玄米を煎り次ぎに糠を煎り、之れを粉末にして置き、別に菜を摺鉢にて摺り、ハヤ又は

一九 男子は富を作り、女子はこれを保つ。 伊國俚諺

二〇 沈默せる婦人は、さわがしき婦人よりも常に讃美せらる。 ラテン俚諺

二一 わが家の笑顔は眞に秀美なり。互に和合するは眞に愉快なり、純潔なる愛情の充滿する家は、四邊至るところ歡樂ならざるはなし。 クーパー

二二 節儉は大なる歳入なり。 シセロ

二三 貞女兩夫に見えず。 日本俚諺

二四 希望と快樂とは繁榮の始めにして、苦痛は艱難の始めなり。 ペトラーク

二五 勝利はよく忍ぶ者に歸す。 ナポレオン

二六 己れを制する人は最も強し。 セネカ

二七 誠實は最良の方便なり。 ワシントン

ハゼの燒いたを入れて摺り合せ、先の粉を入れて更に充分に混ぜたるものを、餡の如くにして與へるのであります。

鳩 鳩は種類の最も多いものでありますが、其内日本に產する在來の種類は僅に三種しかないので、即ち眞鳩（山鳩）白鳩（八幡鳩）青鳩（尺八鳩）で、彼の金鳩、長生鳩、銀鳩、白子鳩などは何れも外國から渡來したものであります。食餌は粟黍玄米等を以て飼養することが出來ます。

鴞 一に百舌とも書きます、羽毛は茶色で、尾は長く嘴は鷹や鳶の如く先端が曲つて、肉食に適して居ます、食物は強度の摺餌で、殊に好んで種々の蟲類を捕食しますが其際翅などの固い部分は、巧みに丸めて吐き出します、元來此の鳥は性質が荒くて、鬪爭を好むもので、此の際は人が行つても、少しも恐れませんから、容易に捕獲されます。

カケス 一に樵鳥とも云ひます、羽毛は茶褐色で、頭は灰白に黑斑が有ります、手羽に白と青との斑が甚だ奇麗に出て居ります、鳴音は猫の如く、あまりよろしくは有りませんが、羽毛が美しいので、人に好まれて居ります、而して食物は弱い餌摺を用ゐるのです。

金魚の飼養法

其形が優美で、其色が艶麗で、何となく女ら

二八 艱難は德の親なり。 プルターク

二九 身體衣服又は居室を不潔ならしむべからず。 フランクリン

三〇 衣服を飾るといふことの中には、知慧の乏しきといふことを含む。 英國俚諺

和歌三十首

一 敷島のやまとごころを人とはゞ朝日に匂ふやまざくらば

本居宣長

二 山水のその源をきよめてぞ千々のながれも濁らざりける

藤原親長

三 人おほき人の中にも人はなし人になれ人ひとになせ人

金玉詞林

四 この本をひたしゝ松の下水はながれて千代の鏡とぞ見る

本居豐穎

五 みがきなば誰かひかりの見えざらむ心の玉は石ならめやな

しく見えるものは金魚で、此の魚は確かに魚類中で最も子女に好愛さるゝもので有りませう、されば鯉の如く大きな容器を用ゐないでも、狹き泉水又は水盤の中にでも、充分之れを飼養することが出來ます、さて先づ金魚を飼ふべき

水質 は如何なるものが良いかと云ふに、溫かくて溫度の變化が少く、多少の混和物のある河水が最もよろしく、地下から湧出する泉の水は、至極宜敷くないのです、次ぎには

容器 ですが之れには種々の形狀がありまして、或は金屬性又は硝子製など、一時魚を入れて觀賞するには宜敷いが、永く飼養する時は、遂に空しく斃死することが有ります、故にやゝ廣き泉水を用ゆるのが一番よろしい。

泉水の位置

泉水を作るには、先づ第一に其位置を撰ばねば成りません、若し泉水の位置が惡い時は、金魚は忽ち病氣を發して斃死するか、又は色模樣が惡くなります、されば泉水の位置は、土地が高く乾いて風通よく、東南の日光を充分に受くることの出來る所がよいのです。

泉水と魚數 茲に半坪の泉水があるとすれば、其中に凡そ何尾の金魚を入れてよいかと云ふに、當歲魚ならば、七月迄は十五六尾、八月後は十二三尾とし、又二歲魚ならば、八九尾を適度とし、三歲以上ならば六七尾以下を限りとするので、若し之れに反して多數の

は

小澤　蘆庵

六　たちならぶ學びの庭のをみなへし何れか高くならむとすらん

柳原　愛子

七　進みゆく學びのまどの姫小松ねがふは千代のみさをなりけり

小池　道子

八　雄ごころし振り起しなば少女だに大き功のたたざらめやは

河村　重子

九　奥山のおどろが下もふみ分けて道ある世ぞと人にしらせむ

後鳥羽天皇

一〇　かぎりなき御代のさかえも著るく雲井の庭ににほふ白菊

都子　御方

一一　君がためちるものこるも櫻井の花のかがみとたれか仰がぬ

稅所　敦子

一二　あらく吹く風は何にと宮城野の小萩が上を人のとへかし

赤染　衛門

金魚を入るゝ時は、發育甚だ鈍く、思ふ樣に成長せしめることは出來ません、尤も只一日二日愛翫用として放養する場合には、何程多數の魚を入るゝも、さした害は有りません。

日覆　上に記した如く、泉水の位置は、土地高燥にして終日太陽の光熱を受くる故夏時は、炎天の水沸き、冬時は寒風を受くること強く、從つて魚體に害あれば、夏は五月より九月頃まで、日覆を作り、冬は十二月頃より冬覆をして、之れを保護しなければなりません。

金魚の食餌　金魚の食餌には種々有りますが、生餌類煉餌類の二種に大別することが出來ます、即ち生餌類とは子子蟲、水蚤、糸蚯蚓等を云ふので、煉餌とは素麺、麥飯、麥子菓子、魚肉、雞卵等で有ります。

藻　金魚の產卵は四五月の交にある故、其卵を產み付けさせる爲に、泉水の中に藻を入れて置くも中々面白いもので有ります、藻には種類多けれど、俗に金魚藻と稱するものが最も宜敷い、金魚藻は池沼其他流れ川に生ずるもので、莖葉共に甚だ細く、形やゝ問荆に似て長くあります、但し之れには害蟲類の卵多く附着することあるが故に、成るべく清き流れ川に生ずるものを用ゐるが宜しい。

金魚の產卵　四月中旬から七月の下旬に至るまでは、金魚の交尾產卵する時期で、數回に亘りて產しますが、氣候の不適當などの爲、實際孵化生存するものは極めて少く、僅に三百分の一に過ぎない樣なこともあ

一三　ひさかたの月の桂もをるばかり家の風をば吹かせてしがな　菅原道眞の母

一四　白かねもこがねも玉も何かせんまされるたから子にしかめやも　山上憶良

一五　うれしきもまた悲しきも語り合ふはらからこそは樂しかりけれ　大江榮人

一六　ほととぎす今朝なく聲におどろけば君にわかれし時にぞありける　紀貫之

一七　わが宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかるべき　凡河内躬恒

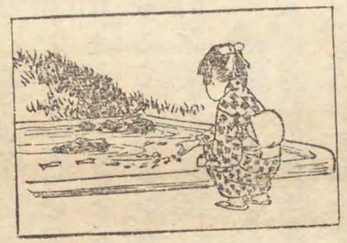
一八　見せばやと人をぞ忍ぶ山ざくらあかぬ心のへだてなければ　村田春海

一九　はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあらざむく　僧遍昭

二〇　花の色はうつりにけり

るのです。

産卵の回數　四月上旬の第一回産卵は、之れを一番子と云ひ、次ぎを二番子、夫れより三番四番五番六番と順次稱するものでありますが、普通三番子又は四番子迄に止め置き、其他は産卵させません、之れ餘り度々産卵させると、魚が衰弱するからであります。



孵化日數　卵の孵化する日數は、一番子なれば晴天つゞきで、餘り寒くなければ、一週乃至十日位で孵化し、二番子は、五六日乃至一週日、三番子は三四日位を要するに過ぎません。

紋形

病害　金魚は優しき魚丈に、病氣にかゝり易いもので其病氣は、一見して認め難けれど、誰にでも見易きは尾で有ります、元來金魚の尾は、水色をなして薄きものであるが、一度病氣に罹れば、尾は白く曇り且つ厚くなりて、血筋が現はれますから直に解りますし、又群を離れて獨り下底に沈み、或は浮上して背を水面に現はして居るものも、罹病したるもの故、早く其手當をしなければ成りません。

紋形の工夫　紋形は面白い手藝の一つであります、そして之は知つて居ると大層便利です、昔時御殿奉公をした女中などは必ず之を稽古したものださうです。

ないたづらに我が身世にふるながめせしまに　小野小町

二一　心だにわが思ふにはかなはぬを人をうらみん理りぞなき　藤原爲子

二二　わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をや思ひすつべき　紫式部

二三　千世ふともひとつ誠はひさかたの月日とゝもにてらすべらなり　源元信

けれども昔の女が習つたのは只だ此紋は恁うして切れば出來るものだと、器械的に覺え込んで居るばかりで、少しも應用とか工風とかいふ才はありませんでした。だが二十世紀の教育を受けたお方は、それでは困ります、此紋は斯う云ふ形であるから、恁うして這ういふ風に切れば出來ると、幾何學又は用器畫の原理にまで立入つて研究したいもので、何にしても工風が必要であります。

紋の圖形　一體紋といふものは、繪とは違つて、その圖形に規則的の處があります。先づ中央から二つに

二四　する終に海となるべき山水もしばし木の葉の下くゝるなり　伴蒿蹊

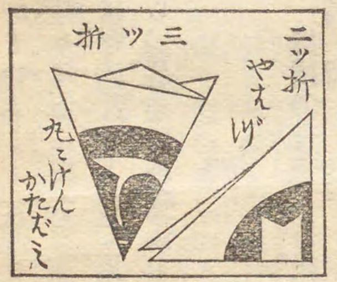
二五　石をのみ玉といだきて歎くかな玉は玉とてあらはるゝ世に　香川景樹

二六　露の間とゆるす心やゆく水のかへらぬ悔のはじめなるらむ　中島歌子

二七　なか〳〵に拂へばつきぬ世の中の塵はしづめておくべ

折つて見ると、左右が同形であるとか、又は四に折ると、其四つが夫々同じ形に成つて居るとか云ふ風にちやんと規則が定つて居ります。斯ういふ譯故、爰に初めて紋形の切りやうなどゝ申す術が起つたのです。

紋形の切りやう　紋形を切るには、先づ四角な紙を取出して來て、二つ折、三つ折、四つ折、又は八つ折などゝ云ふ樣に折つてさて、之を切つて拵へるのです。一々圖に就いて說明すると可いのですが、紙數に限りがあるので、左樣する譯にいきませんから、爰には省きますが、初め幾つ折にすれば可い



かりけり　小出榮

二八　港川みづはかれても天地にあふるゝものはまことなりけり　下田歌子

二九　とにかくに年へてのちと思ひしに昔も今も同じわが身か　野村望東尼

三〇　降る雪をしのぎて立てる松にこそ千年へぬべきかげは見えけれ　皇后陛下

押繪

かといふことを能うく考へて、その通り折つて、さて種々な形に從つて切れば自然と出來て參ります。これは單に遊戯として見ても仲々趣味の多いことですから、是非習ひ覺えて行つて御覽なさい。

押繪の今昔　押繪は昔時德川幕府の大奥や諸侯の奥向に盛んに行はれましたが、現今は僅かに其餘波を羽子板の面影に留めて居る位で、スッカリ廢れて了ひました、とはいへ、流行の波は寄せたり返したりですから、又た近き將來に於て流行の時代が來るに違ひないと思ひます故、習つて置いて損はありません。

押繪の趣味　押繪は額面、手箱、巾着又は羽子板等

笑話

面白い夢　或る家の娘明け方に眼を醒し、傍に寢てゐる姉に向つて「姉さん、昨夜見た芝居の夢は面白かつたわね」と言ひますので、姉は笑つて「オホホホ、、あなたの見た夢を私が何で知るものですか」と申しますと、「だつて、姉さんと一緒に行つた夢を見たんですもの」と言

に小さな帛片を貼り付けて、花鳥、山水、人物等を巧みに寫し出すのですから、器用に出來ますと誠に見事で、女子の手藝として餘程趣味のある技術であります。

必要な道具　押繪を貼るに必要な道具は極く簡單なもので、左の數種に過ぎません。

篦＝角又は骨製のもの大小二本、竹篦でも宜しい。

鏝＝先の尖つた細いもの、大小二本。

鋏＝花鋏と呉服鋏と各々一挺宛要ります。

串＝薄い篦形のものと、稍々厚いものと二通り。

締竹＝布地を締付るもので、手製で間に合ひます。

下繪の描き方　さて押繪を貼るには、刺繍と同じく下繪を描かねばなりません、下繪は成るべく疎く描いて、線も太く引くのが可いので、密に細く畫いては却

つて、妹は睡むさうな眼を擦つて居まりした。

元の紋　ある小學校の前で、二人の女生徒が話して居るのを聞きましたら「吉田さん、あなた及第なすつて？」「イヽエ」「落第なの？」「イヽエ」「ぢや、あがつたの？」「イーエ、矢張、元の級！」

お床の間　新築の家に移轉して來ましたので、子供は珍らしつて出來上りが奇麗にゆきませんから、疎畫で而も筆勢に活氣あるやうに描き、よく實物の眞相を寫し取るやうに心掛ねばなりません。

型の切り方　下繪が出來上つたら、次は之を型に切り取るのです、型に用ふる厚紙は美濃紙を貼り合せたものなら此上なしですが、普通には古帳面の表紙又はボール紙を用ひます、そこで此紙を臺にして其上に下繪をあて、四方を糊で貼り付くるか、又は留針で少しも動かぬやうにして置き、細き竹串又は篦を以て其の下繪にならつて筋をつけ、其線のついた痕に從つて切り拔くので、切り終

がつて其處らを見廻し、母ちやん、此の板の敷いてある處は何？」と訊きますので、「そこは、おとこの間さ」と敎へますと、子供は其隣接の袋戸棚を明けて見て「夫では此處は女の間かい。」……母親も是には笑はずには居られませんでした。

ローズ　或小間物屋で此頃抱へた許りの下女が、牛肉を買つて歸つて來て「お内儀さん、おつたら、表裏左右の紛れないやうに、一々符號をつけ、形の良否を見て幾度も切り直すのが宜しうございます。

押繪の貼り方　型が出來たら、之を帛片にあて、帛片の方を型よりも一二分大き目に截ち、襞を取るものでしたら豫め能く見積つて尙ほそれよりも大きく斷たねばなりません、そこで帛片の緣即ち折れ返る處へ糊を少しづゝ着けて、金篦で折り返し、一寸押へて、猶ほ拇指と食指とで能く壓へますと、うまくゆきます、かくて順々に貼つて行き、一通り出來上つた所で、小さな鏝でもつて小皺を伸し、更に細い處を貼付けて仕上をするのです。是でまづ出來上りますが、初心の中は兎角糊が表に浮出して地質を外見惡くしますか